

---

# 第二の人生はISの世界で！？

キンケドゥ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第二の人生はISの世界で！？

### 【Nコード】

N4314W

### 【作者名】

キンケドウ

### 【あらすじ】

WARNING！

これはISの二次創作ものです！

オリ主最強が苦手&原作ブレイク&NTRが嫌いな方は閲覧注意です！

話の序盤と一部のみオリジナルで、他は小説丸写しです！

そして構成は作者の完全妄想！弓弦先生ごめんなさい的作品です！

処女作のため、至らぬ場面が多い！（というか駄文！）

また、誤字脱字あり！（見つけたら指摘して頂きたい）

それでもやあってやるぜ！って方のみ閲覧して下さい！

360,000アクセス越え&37,000ユニーク越えしました  
！ありがとうございます！（遅っ！）

↓↓以下あらず↓↓

この物語は天然神様によってテンプレ展開を受けた氷川優人はIS  
の世界で生きることになり、基本的に原作通り進みつつ平凡に生き  
る事を決めた優人が織り成す学園生活を描いた物語である。

## プロローグ（前書き）

初めまして、キンケドウと申します。  
文才の無い妄想癖のある私ですが、生暖かく見守って頂ければ幸いです。

## プロローグ

「ふあゝあゝ…よく寝た…よっし、ISのSSの続きでも読むかって…あり？」

俺は起き上がると、自分の目の前にあったはずのパソコンが無い事に驚いた。というより、俺の周り全てが真っ白だった事に驚いたのかもしれない。

「むむ…これはまさに、俺が見ていたISの転生物のSSと同じ展開じゃないか！」

「うんゝその通りだよゝ」

「えっ？その声は…豊崎愛生！？」

振り向くと平沢唯に似ている少女が立っていた。

「愛しの唯ちゃんが…何故ここに！？」

「アハハ…残念だけど、あたし、唯じゃ無いんだよね。正確には神様だよ！！フンス！！」

「唯のまんまじゃん！！」

「あなたが望むから、唯ちゃんのモノマネしてるんだよ」

「俺が…望んだ…？っか、ここはどこ！？」

「あ、そうだった、説明がまだだったね。ここはあなた達の言う、天界かな？または死後の世界？」

「…ちよつとまで。ということはお…俺死んだの！？何処その二次

創作ものの主人公みたいな状況な訳!？」

「そうだよーモグモグ…」

「なに一人、優雅にお茶してんだ!？」

「あ、食べる?」

「そうじゃねえよ!! 本当に唯みたいだなオイ!!」

「えー、これがあたしの素だよ?」

(畜生…まんま、唯で心奪われそうだ…ん…?ここが死後の世界だとして…)

「お前って神様!？」

「そだよ。で、あなたはさっき自分で言ってた通り、あたしの部下の手違いで死んだわけ」

「はは…嬉しいのやら…悲しいのやら…ってえ!! 俺、けいおん!の映画見てないし、まよチキの最新巻読んでねえし、ISも続きが気になるんですけどお!! あ、はがないも見えてない!!」

「大丈夫のーぷろぐれむ、だよ! あたしが転生させてあげるから。転生先はあなたの居た世界じゃなくてもいいよ! 因みに、どの世界に行ってもけいおん!の映画も見れるようにするし、あなたの言ってるラノベを読むよ! あ、そのラノベの世界に行く事も出来るよ…そうなのか…んじゃ、ISの世界に転生させて下さい」

「良いよーあ、その代わり、ISの原作の続きは読めなくなるから。自分の目で確かめて」

「う…構わん…俺の本命はけいおん! だけだ…ん?と言う事はまよチキとはがないも平気…?」

「うん、でも、あなたがさっきまで生きてた時の歳まで成長しないと、発売されないし、放映もされないから」

「そうなのか…意外に手厳しいね…」

「なんだって、因果律を書き加えて平行世界を作るから」

「そんな事すんの!？」

「うん、因果律書き換えるの結構面倒なんだよー?クオヴレーくんをお願いしなきゃだし」

「く、クオヴレー！？実在してたの！？」

「え？うん。今まで名前はなかったけど、あなた達が名前を付けたからクオヴレーになったんだよ？」

「は、初耳だわ…あ、ところで、何処ぞの二次創作みたいにチート能力つけられる？」

「うん、あたしの部下の手違いのせいだからね。あまり強大なものじゃ無ければ幾つでも」

「えーっと、じゃあ、転生した際、小学校と中学校の時の記憶を勉強のこと以外消し去って欲しい。綺麗さっぱりね」

「OK、OK。勉強以外の記憶を消せば良いんだね？つまり、黒歴史を消したいんだね？」

「そ、で、次に定番の束さんと同じくらいの天才スキルと運動やらなんやらの身体系スキルを付けて。あ、後、ISに反応する様にして」

「ようは、天才になって、さらに運動などでも天才になりたいと。更にISも起動出来る様になりたいと」

「そう言うこと。というか、IS起動出来なきゃ詰まんねえだろ」

「それもそうだね。まだまだ付けられるよ」

「うーん…そんぐらいかな」

「あれ？顔がイケメンとかじゃなくていいの？」

「あー…それはフツメンでいいわ」

「なんで？男の子なんだから、フラグ体質のためのイケメンじゃ無くていいの？」

「俺はあくまで、最低限、原作を見たいだから、女の子と馴れ合いたい訳じゃ無いんだ」

「もしかして…16にして枯れてた？」

「ちげーよ！！女の子が苦手なだけだよ！！」

「じゃあ、なんで女の子が最も多いISの世界にしたのさ？」

「え？何処ぞの二次創作みたいにオリジナルのIS作れるからに決まってるだろ？」

「ふーん。でも、それならガンダムの世界とかでもいいんじゃない？」

「あー、あれはダメ。戦争とか、巻き込まれたくないし。それに、ISの世界でガンダムとかの武装を使ってみたいし」

「例えば？」

「ガンダムのフィン・ファンネルとか、クアンタのソードビットにフルセイバー、ヒュッケバインのファンゲスラッシャーとか」

「おおー！いい具合にチートばかりだね」

「どこがだ！ファンゲスラッシャーは強化しなきゃチートじゃないだろ」

「まあいいや、そろそろ行ってもらうよー。あ、因みに、まだ死んで無いから、一回死んでもらうね」

「ところで、俺の死亡原因って？」

「ジャンプとラノベを買いに行つた帰りに暴走トラックに轢かれます！」

「へ？ちよつと待てそれかなりイテエじゃねえか！ー！」

「グッジョブ！」

「おい！ー！」

気づくと俺は本屋に居た。

「あり？…手には買ったばかりのジャンプとラノベ…さっきまで家に居たよな…？まさか、本当にあつた事なのか？んな訳無いかー夢だろ、夢」

あ、思い出した。SS読んでたけど、ISのラノベの続きと今週号のジャンプが欲しくて、走って本屋まで来たんだつた。  
アリガトウゴサイマシター

「さーてと、さっさと帰って読めますかー」

「キイイイイイ！ー！」

「ん？つてえトラック！？嘘っ！ーこっちくんない！ーちよ…」  
ガッシャーン！ー！！！！



## プロローグ（後書き）

如何でしたか？本編には入っていませんが、アドバイスをくれるとありがたいです。

## 主人公設定（前書き）

書いてあったのに投稿するのを忘れていた…

今更ですけど、どうぞ

## 主人公設定

主人公

氷川優人

天然神様の手によって転生というテンプレ展開を受けた青年。前世では、ロボットアニメや日常アニメが大好きな青年だったライトオタクである。容姿は少し幼さの残したスパロボ のリョウトのような顔立ち。

転生してからは文武両道の優等生キャラで、父親に似て正義感が強く、自由を愛している。

束のISの作成を手伝い、その過程で、ISのコアを偶然ながら作ってしまう。

小学4年生で、神様と再会し、純粹種のイノベーターの力を授かる。

使用IS

ブレイヴハーツ

格闘寄りの万能タイプのIS。格闘戦がし易い様に従来のISよりスマートで小柄なデザインとなっている。腰に鞘に収められた剣がある。背中には光を放つ剣で翼のような形を作っていて、操縦者が命令をする事で遠隔操作武器として使う事も可能。尚、作られた当初は操縦者の顔等を隠す為のヒュッケバイン風バイザーとマントが装備されていた。武器は近接戦闘用にウイングセイバー（非実体剣）、エクスカリバー（実体剣）。中距離用にフアングスラッシュヤー（ヒュッケバインMk-?と同じデザイン）。遠距離用にケルベロスショットと呼ばれるツインハンドガンとショットガン、ランチャーの三種に変形する万能光学銃。

単一仕様能力

不明

## オートクチュール

### ・重火力型 デストロイ

その名の通り火力重視の装備となっており、武装の装備数はシャルロットの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』には劣るものの火力としては現行IS（PFを含めず）最強。追加武装は右腕に大口径型ショットガン、ショットガンのアンダーバレルにグレネードランチャー、左腕にガトリングガン、ミサイルポッド（両肩、両足）、腰にレールガン、背中に荷電粒子砲、左腕の隠し武装に9連装パイルバンカー。全ての武装はデッドウェイトにならないようにパージが可能である。また、突進力を強化する為に背中に大型スラストーも付いている。尚、これを装備する際にカラーリングは赤を基調としている。

### ・高機動型 シューティングスター

このオートクチュールは背中のウィングセイバーの出力をすべて推進力にまわしている（V2ガンダム<sup>アンロックユニ</sup>の真似）。そして非固定浮遊部位<sup>ツト</sup>の増設スラストーを装備。これによって高速移動時の急転回を可能に。最高スピードは紅椿と同等である。追加武装は小型近接ブレード2本だけと心許ないが、2本の近接ブレードを連結させることでツインランサーとして使用が可能。尚、これを装備する際、カラーリングは青を基調としている。

## 二機目

### プライムフィールド

フランスにいる時に作ったIS。このISは全身装甲であり、固有の武装を持たないため専用パッケージに換装しなければ戦闘能力は無いに等しい。優人がこれを作った理由は「ダブルオー系統は勿論、他ガンダムの武装や、スパロボシリーズの機体を使いたいから」と

という理由。反則的能力ばかりある為、このISを使う時は緊急時など特殊な条件下のみ。

単一仕様能力

パッケージエンジンジャー

パッケージによって単一仕様能力を変える単一仕様能力

専用パッケージ

クアンタ（フルセイバー）

優人が最初に作ったパッケージ。このパッケージを基本装備としている。その名の通り、ダブルオークアンタの姿そのもののパッケージである。このパッケージにGNドライブが搭載されている為、攻撃や移動の際にシールドエネルギーを消費しない。このパッケージのみGNドライブは二機搭載している。

武装はGNソード？、GNソードビット、GNビームガン。ソードビットとGNソード？が合体する事でバスターソード（ライフル）になる。フルセイバーという追加パッケージがある。その際、GNソード？が追加装備される。

単一仕様能力

トランザム

GNドライブから精製されたGN粒子を一気に開放し、通常のスペックより3倍以上引き上げる単一仕様能力。しかし、この能力は長くても10分が限界である。トランザムが終了すると、能力が極端に下がってしまうという原作の設定があるが、その問題はある程度は解決済みである。

サバーニャ

クアンタと同時進行で作ったパッケージ。このパッケージにはGN

ドライブが搭載されている。外見は、最終決戦仕様のガンダムサバ  
ーニャ。武装はGNホルスタービット、GNライフルビット？、G  
Nピストルビット、GNミサイルポッドである。

単一仕様能力

トランザム

前述通り

サーベラス・イグナイト

IS学園入学後に作ったパッケージ。外見はサーベラス・イグナイ  
ト（G）。武装はH oミサイル・ランチャー、レイガン・ポッド、  
コーティング・ソードT e X、ラディカル・レールガン、イグナイ  
ト・パイク、ターミナス・キャノン。動力にTEエンジンを使用し  
ている為、シールドエネルギーを消費するのはダメージを受けた時  
だけである。原作通り、TEスファイアもある為シールドエネルギー  
を消費する事は殆どない。

フォームSもあるが優人が近接戦を好むため、全く使わない。

単一仕様能力

TEスファイア

異空間からエネルギーを取り出し、バリアを張る、単一仕様能力。  
シールドエネルギーの消費をしない為、非常に便利。

ソウルゲイン

優人が唐突に作ろうと考えたパッケージ。近接特化された機体でス  
ピードはピカイチ。武装と言える武装は聳弧角<sup>でっかく</sup>のみ。

単一仕様能力

オートリパース  
自己再生

装甲が破壊された際に自己再生する。が、しかし、シールドエネル  
ギーで装甲が守られるためあまり重宝されない。

ビルトビルガー

優人が唐突に作ろうと考えたパッケージ。このパッケージは近距離特化しつつも、中距離をこなす万能機。通常時はジャケット・アーマーを装備した重装備型で必要に応じてジャケット・アーマーをパージした高機動形態に変わる。この形態ではテスト・ドライブをフルドライブにすることによってウイングにエネルギーを発生させ、これを高速で相手にぶつけ切り裂く「ビクティム・ビーク」が使用可能となる。武装は三連ガトリング砲、M90アサルトマシンガン、コールドメタルソード、スタッグビートル・クラッシャー、ビクティム・ビーク。尚、コールドメタルソードにはゾル・オリハルコンiumを使用している。

単一仕様能力

なし

## 主人公設定（後書き）

随時更新して行きます

12/15

追記しました



第一話 あれ？俺がいる時点で原作ブレイクだよな？（前書き）

第一話です。

うっ…文才が欲しい…

## 第一話 あれ？俺がいる時点で原作ブレイクだよな？

どうも、先日？天然神様の部下のミスで殺されました、氷川優人です。でも、神様は僕にチート的能力を付けて、ISの世界に転生させてくれました。容姿は、何故かイケメンにするつもりは無かったのに、少しだけスパロボ のリョウトに似てる気がする…体型はまあ、中肉中背だね。

親の名前は父親が氷川勇利と、母親は氷川莉緒。しかも、母さんは何処ぞの令嬢だったとか。で、駆け落ちして今に至るんだと…何という滅茶苦茶な設定だ…しかも、ご近所さんは織斑家と篠ノ之家。あ、因みに、明日で僕は小学1年生になります。

「ユウト…？ご飯ですよ？」

「あ、はい！」

「明日から一年生だな、優人」

「うん、やっとして感じただけだね」

「そうか。まあ、お前は運動も出来るし、頭も良いしな、それに顔も良いからモテるんじゃないか？」

「む、優人は渡しませんよ！」

「莉緒、そりゃ、過保護過ぎるだろ」

「アハハ…」

この二人、結婚してからも、名前で呼び合ってるらしい。

「そうでしょうか、勇利？」

「そうだよ。っと、お前も明日は早いからな、さっさと飯食って、風呂入って寝なくちゃな」

「うん、わかってるよ、父さん」

翌日、

「じゃ、いつてきまーす！」

「おう、入学式には行くからな！」

「気を付けて行ってくるんですよー！」

「わかってます！」

ガチャッ！

「お、優人！」

玄関から出ると、幼馴染の一夏と篠ノ之が居た。

「やあ、一夏！篠ノ之さん！」

「んじゃ、行くか！優人、篠ノ之！」

「一夏、逆だぞ？」

「へ？アハハ…じよ、冗談さ！」

この頃から方向音痴だったのかよ…

入学式

一夏視点移行

『新入生代表、氷川優人！』

「はい！」

「（？なあ、篠ノ之、何で優人が新入生代表なんだ？）」

「（お、お前…あいつが成績優秀者だという事を知らないのか！？）

」

「（え！？あいつ、やっぱり頭良かったんだ…）」

優人視点移行：

ううー、緊張するな…たかが、入学時の学力テストで本気出すんじゃないかった…簡単過ぎたから、なあ…

『新入生代表、氷川優人！』

呼ばれた！

「はい！」

そう言つて壇上に上がり、手に持っていた原稿用紙を広げ、読み上

始める。

#### 勇利視点

「お、息子の晴れ舞台だ。カメラ、カメラと…」

「勇利ばかりズルいです、私にも見せてください!」

「わーった、わーった!」

因みに、勇利達の居る位置は保護者席の一番後ろである。

「ほら」

そう言つて、録画中のビデオカメラに映る息子の姿を見せる。

「本当にうちの優人が立ってる…感動的ですな、勇利!」

「莉緒、声がでかい」

「す、すみません…」

#### 優人視点移行

そんな事もあった(らしい)入学式は無事終了。

そして、俺は入学祝いにパソコンを買ってもらい、インターネットも繋いだ。そして始める事は…

「武器の設計!」

そう、俺はスパロボやガンダムなどの武器の設計をしたいと思っていた。

そして、そんな武器の設計をしていたある日。

「優人、東さんが来てますよ!」

「東さん?何の用だ?」

不思議に思つて、階段を降りて行く。

「ハローゆーくん!」

「東さん、どうしたんですか?」

「ここじゃ、何ですから、優人の部屋に入れたらどうです?」

「そうだね、母さん。東さん、どうぞ」

「おっじゃましーす」

「んで、束さん、何の用ですか？」

「ゆーくんさ、武器の設計してるでしょ？それかなり強力そうな」

「！ええ、まあ…どうしてそれを？」

これは…まさか…

「ゆーくんのパソコンをハッキングして、ちょちよいと見せてもらったからね。それで、ゆーくんに手伝って欲しい事があるんだ」

…やってくれたな、この天災。

「…手伝って欲しい事？」

「うん、うん、ここじゃ説明しにくいから束さんの家まで来て」

「はあ…」

「あら、優人、折角お菓子だそうと思ったのに、出かけるんです？」

「ええ、ちよつと束さんの家まで」

「そうですか、気を付けていってらっしゃい」

「はい。いってきます」

「ここだよん」

「つて、物置じゃないですか！」

「ちつ、ちつ、ち、甘いなあ…ここに秘密基地があるのです！」

「へ、へえ…」

「とりあえず、中に入って」

「はあ…」

「あ、そこに立ってて」

「はい…ん？」

段々、足下が下がっていつてる事に気付く。

「束さん、これは？」

「私が作ったエレベーター！」

はっは、この天災、何でも作るのね。というか、僕は束さんと同じ

ぐらい天才なんだから、作れるのかな…材料があれば出来るな…たぶん…

そうこう考えてるうちにエレベーターが止まる。

「とーちゃく」。ようこそ！束さんのラボへ！」

「うわぁ…」

様々な機械がある。まさにここは僕にとっては天国だ…これだけあれば、僕の武器も作れる…！

僕は武器の設計はしていたが、材料が無いため、設計止りだった。その辺の廃材を使えば良かったのだが、面倒だったので、お小遣いをこつこつと貯めて、通販でそれぞれの材料を買って作ろうと思っていた。

「あ、それでね、ゆうくんの手伝って欲しい事は、これ！」

そう言つて、ライトアップした白い甲冑のようなものを指差す。

「これは…？」

「正式名称は決めてないけど、高性能な宇宙服！しかも女性にしか動かせない！」

「それで、僕にどうしろと？」

「外装は出来てるんだけどね。中身のOSが未完成で、システムも不安定だし、持たせる武器とかが無いの…」

「…ちよつと待つてください。OSとシステムはわかりますが、武器って何です？武器って」

「え、自己防衛の為に付けるんだよ！」

「は、はぁ…」

「というわけで、手伝って！ゆうくん！」

「…わかりました。但し、これの構造やら何やらを教えて下さいよ、でなきゃ手伝えませんし」

「いいよ」

「じゃあ、始めますか…」

「はいはい、これが構造表ね！」

それから、僕と束さんのIS作成が始まった。

**第一話 あれ？俺がいる時点で原作ブレイクだよな？（後書き）**

両親出て来てますけど、しばらくしたら出番無くなると思います…

## 第二話 どうしてこうなった…（前書き）

どうも、キンケドウです。

なんやかんやで2話目です。

って、誰も読んでませんね^^；



## 第二話 どうしてこうなった…

どうも、先日から束さんの高性能な宇宙服（仮）の作成を手伝い始めました、氷川優人です。手伝い始めて一週間、そこで僕はとんでもないものを作ってしまった…そう、コアですよ、コア。束さんに見せてもらった資料を元に自分なりに考えながら束さんからもらった材料を使って作れちゃいました。しかも、資料には女性にしか反応しないって書いてあるのに普通に俺に反応してるし。まさか…作り方も書いて無かったのに作れてしまうし、しかも起動出来てるとは…神様チート恐るべし…

『でしょ？神様は偉大なのです！』 フンス！

…幻聴が聞こえた気がする…とりあえず、これを束さんに見せてみるか。

「束さん、偶然こんなものが作れたんですけど…」

「あ、これ、あれのコアだね。作り方は見せてない筈なのによく作れたね。あ、しかも反応してる！どうしてか分からないけど、さすがゆーくん！」

「アハハ…とりあえず、僕もこれでちょっと束さんと同じものを作ってみます」

「わかった！じゃあ、ここにある材料、ゼーんぶ使っていいよ！」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「いやいや、いつも手伝ってくれてるからね、ゆーくんは」

ここから、僕のオリジナルISの作成が始まった。

そして、オリジナルISの作成が始まって一年、小学校にて、とあ

る事件が起こる。…え、時間が飛び過ぎ？仕方ないじゃない！毎日やってる事が機械弄りなんて！

…ゴホン、で、いつも通り放課後帰ろうとしたんだけど、急に腹が痛くなつて教室掃除をする一夏に荷物預けてトイレに行ったんですよ。戻って来たら、一夏と一緒に掃除をする、篠ノ之さんが六人の男子に囲まれて何かされてるんですね、はい。って、原作では三人じゃ無かった？増えてる？…一夏アアア！！どこ行つたアアア！！？…とりあえず、イジメの現場を撮影するか…この束さんお手製高性能ビデオカメラで！！

「なあ、お前男女のクセになんでリボンなんかしてんだよ？」

「本当だよ、お前に似合わねーって」

取り囲んでる連中は大笑い。

…これを束さんに見せたら恐ろしい事になるな…

あ、一夏居た。何呑気に掃除をしてんの？

「大体、お前の姉ちゃん、変人なんだってな？変人の妹は変人てか？」

「お、お姉ちゃんは…変人なんかじゃない！！」

「男女が怒った〜！」

「お前ら、うるせえよ。掃除をしないなら帰れ」

お、一夏が助け舟出したか。

「んだよ、織斑」

「俺知ってるぜ、こいつら夫婦らしいぜ！」

「夫婦！夫婦！」

「別に仲が少し良いだけだろ？夫婦なんかじゃねえよ」

「あ、そういや、お前も姉ちゃん居るんだっけ？確か男女の姉ちゃんと仲良かったよな？やつぱり織斑の姉ちゃんも変人なんじゃね？」

「姉ちゃんをバカにするな！」

お、よく手を出さなかったな。

「お前、好い加減ウザいんだよ！」

あ、殴った。

「つてえ…」

「いつつも、いつも、男女庇いやがって」

うわ、何その理不尽な理由。あ、六人がかりになった。

「ギャハハ！！普段からウザいと思ってたからちようど良いぜ！」

そろそろ不味いか…カメラを固定してと…

「ねえ君達、一人に対して六人でやるのは卑怯じゃない？」

「あん？氷川じゃねえか。こいつが邪魔するから悪いんだよ」

「邪魔つて、篠ノ之さんをイジめる事かい？」

「っ！てめえ…」

「そういう事はいけないよね…」

「るせえんだよ！」

お、殴りかかってくるか。だが、僕はその腕を掴んでそのまま背負い投げ。

「せい！」

「おうわ！？」ドンッ！

「ヤロー！」

残りの五人がかかってくる。

「コラ！あなた達！何やってるの！？」

「うげっ、先生だ！逃げる！」

ナイスタイミング、先生。

「あなた達大丈夫？特に織斑君と氷川君」

「僕は平気です。それより一夏と篠ノ之さんを」

「え、ええ…」

僕は教室の隅に置いてあった自分のランドセルを背負って教室を出て行く。

「それじゃ」

「あ、おい！」

セツトして置いたカメラは回収つと

帰り道の途中。

「さつきはよくもやってくれたな、氷川」

さつきの六人が居た。

「あれ、どうしたの君達？」

「オメエをぶちのめす為に待ってたんだよ」

「へえ、わざわざご丁寧な事だね」

「るせえんだよ！やっちまうぞ！お前ら！」

六人一気に走ってくる。そして、僕を取り囲む。僕はランドセルからリボルバーのついたガントレットの様なものを取り出す。

「なんだあ？そりゃ？」

「複数で来るんだからハンデ付けてもらってもいいでしょ？」

「は…この大人数に勝てるわきゃねえだろ！」

そう言つて周りの連中が僕にかかってくる。僕はそれを無視してリーダー格っぽい奴に走っていく。向こうは殴ろうとするが、僕はそれを避けて懷に飛び込み、ガントレットの様なものについている、杭を腹に突き付ける。

「威力は調節してあるけど、それでも痛いからね」

「はっ？」

そしてガントレットに付いている引き金を引く。

ズドンッ！！

リボルバーの火薬が破裂し杭、ステーキが勢いよく飛び出す。

「ゴッホオ！！？」

ステーキを打ち込まれたそいつはあまりの衝撃に胃の中身を吐き出す。僕はそのままそいつを投げ、次のターゲットを選定する。

「さて、次は誰かな…」

薄っすらと笑みを浮かべる僕。

「こ、こいつやべえよ！みんな、ずらかるぞ！」

倒れてる一人を除いてみんな逃げて行く。

「あ、あ…」

「あーあ、君を置いて行っちゃうなんて、酷い友達だね」

「ひ、ひい…」

「でも、安心して。止めは刺さないから  
僕はそのまま立ち去った。

その後家に着くと、帰りが遅いと親に怒られたが、篠ノ之さんがイジメられた事を話しそしてそれを止めた。という事を言っていると父親は褒めてくれた。

「お前はお前の正義を信じてやった事だ。誰も咎めねえよ。というわけで、帰りが遅かった事は不問だ！」

「ありがとう、父さん」

翌日、学校にあのイジメっ子の親が来て、先生を含めて話し合ったが、僕が撮っておいたイジメの現場を見せると何も言い返してこなかった。

その日の放課後、東さんに映像を見せたらひどく怒っていた。

そのまた次の日、篠ノ之さんをイジメていた六人は急な転校をしたという話を先生が言っていた。東さんおっかねえ…

## 第二話 どうしてこうなった…（後書き）

ちくせう…俺に文才さえあれば…もっとアクセス件数増やせるのに…  
因みに、ガントレットの様なものは、既に分かっていると思いますが  
リボルビングステーキもどきです。

**第三話** もう我慢の限界だ！原作ブレイクしてやる！え？もうしてる？（前書き）

第三話です。

千冬さんが初登場です。

### 第三話 もう我慢の限界だ！原作ブレイクしてやる！え？もうしてる？

篠ノ之事件（勝手に命名）から俺と一夏は篠ノ之の事を筈と呼ぶ様になった。

それから2年、高性能な宇宙服（仮）は完成し名前はIS、つまりインフィニットストラトスという正式名になり束さんは世界に向けて公表をした。無論、各国はそんなものあり得ないと鼻で笑った。それがいけなかった。束さんは日本が射程内にあるミサイル基地をハッキングし、2341発以上のミサイルを日本に向けて発射した。それをISですべて落とすという作戦を思いついたのだ。白騎士のパイロットは一夏のお姉さんこと千冬さん。千冬さんとは一夏の家遊びに行った時に少し挨拶したぐらいの関係ですね。

「それじゃ、千冬さん気を付けて」

「えー… ゆーくんの作ったISも完成してるし、何故か男のゆーくんも起動出来たんだから、ゆーくんも行つてよ」

僕はジト目で束さんを見る。

そう、僕のISは完成していた。束さんの白騎士を手伝いながら、IS発表直前に何とか完成させた。

「優人、お前も来てくれると助かるのだが…」

「う…」

男はこういう女の涙に弱い。いや、涙は流してないけどそんな寂しそうな声で言われたら… ねえ…

「はあ… わかりました、ですけど女性にしか使えないって束さんは公表してますから、バイザーとマントを付けて行きますよ」

「ありがとう！ ゆーくん、だいいきき！」 ダキッ！

「束さん、離れて下さい。ISの展開が出来ません」

「あ、ゴメン」

（来い… ブレイヴハーツ！）



念じると剣の形をしたネックレスが発光し、僕の体に機械の鎧が纏われる。腰には剣と銃。左肘には折り畳まれたファングスラッシャー。背中には光の剣で出来た翼がある。

優人はもしもの時のために用意しておいた黒いマントを羽織り、ヒュッケバイン風バイザーを付ける。これで顔がわからないはず。というか、この姿はサンドロック（EW版）を思い出すな。

「そんなので、戦えるのか…？」

「大丈夫ですよ。ほら早くしないとミサイルが飛んできちゃう」

「あ、ああ…」

「二人共ー！いつてらっしゃーい！」

束さんに見送られながら、僕達は飛び立った。

「これは…想像以上だな…」

360度すべてミサイルばっか、これはある意味珍しい体験かもな

「ああ…だが、私たちはやるしかない！」

そう言つて千冬さんはミサイルの海に飛び込んで行く

「ははっ…流石千冬さん…僕もやるか！」

腰の2丁の銃、ケルベロスショットを手に取りミサイルに向けて撃つ。

半数程落としたところで銃を連結させる。

「他のモードのテストをしますか。ショットガンモード」

引き金を引くと収束された粒子の弾が拡散する。ミサイルは一気に5機程減る。

「うつひゃあ…ここまで拡散するとは…次はランチャーモード」

また引き金を引く。ツインハンドガンモードよりも強力な収束された粒子が射出される。その粒子の通った先のミサイルはすべて爆発していた。

「これもまた結構な威力だな」

気が付くともう数える程しかミサイルは無くなっていた。

「うーん、エクスカリバーも試したかったけど、まあいいや。ウィングセイバー！」

翼の剣がミサイルに向かって行く。そして、ミサイルをすべて落とした。

「ふう…千冬さん終わりましたね」

ブライベートチャンネルで千冬さんに話掛ける。

「いや、まだだぞ。軍の連中が集まって来たようだ」

周りを見ると戦闘機やイージス艦などが僕達を囲んでいた。すっかり忘れてた。原作では確か無力化してたな。

「うーん、よし千冬さん。パイロットは殺さずに無力化しましょう！」

「何？」

「ここで現行兵器ではISは倒せないという認識をさせるべくミサイルを使っただけですから、丁度いい機会ですよ」

「なるほど…わかったやろう」

よかった、エクスカリバーを試すチャンスだ…っと、ファングスラッシャーを忘れてた。

性能を確かめながら戦ったら、数10分で片付いた。

「…呆気な…」

「そつだな…そろそろ戻るか…」

僕達はその後、ISのステルス機能を利用し束さんの家まで戻った。

「さっすがちーちゃんとゆうくん！早速話題になってるよ！」

そう言っただけでTVを見せる束さん。TVにはミサイルに迎え撃つ白騎士と黒いマントを羽織ったISが映っていた。

「あ、本当だ」

「幾らなんでも反応が小さ過ぎないか、優人？」

「アハハ…でも、やったの僕と千冬さんだし…」

「う…そう言われるとそつだな…」

「でも、これで束さんとゆーくんのISが凄いつて事が世界中に伝わったよ！ありがとうね、二人とも！」

「そうですね。って、もうこんな時間か。それじゃ束さん、千冬さんさよなら」

「ああ、またな」「バイバイゆーくん！」

次の日、僕は何故か束さんと一緒に国会に呼ばれた。困った事に束さんは僕の事を一緒に開発した者として公表していた。まあ、でもこれで好都合な展開になった…

「…では、ISはお二人の特許にすると云う形でよろしいですね？」

「はい」

束さんは殆ど話を聞いていない。というか寝てる。つまり、僕は只今束さんの秘書みたいなものかな…あ、そういやこの後色んな人達から追い回されるのか。…もう原作なんて知るか、原作ブレイク開始。つか、ISの開発協力した時点で原作ブレイクか…

「では、各国にこの製造されたコアという物をお送り致しますがよろしいですね？」

「あ、はい。ちゃんと各国に束さんが振り分けた通りの数が行く様にしてください。女性にしか扱えないという事も付け加えてね。それと、僕と束さんはISに関してどの国にも所属しませんので、自由国籍権を下さい」

ここで原作ブレイク、束さんが自由国籍権を手に入れば重要人物保護プログラムを受けずに済むはず。因みに、束さんと僕が作ったコアは467機。僕が秘密裏に作った1機とブレイヴハーツのコアを含めれば469機。

「ちよつ、ちよつと待って下さい！日本にもですか？」

「当たり前です、各国のパワーバランスを保つ為にもISのコアを各国に渡すんですから、開発者たる僕達がどこかの国に属せばパワ

「バランスはすっかり変わってしまいます。その為に自由国籍権が欲しいのです」

「…わかりました、明日、各国と緊急集会を行いますのでその際、あなた方が自由国籍権を手に入れる様に手配致します」

「絶対ですよ」

そう言つて隣で寝てる束さんを引きずりながら部屋を出て行つた。

この国会には行きも帰りも電車。束さんより背の低い僕が束さんを引きずりながら電車に乗る場面は非常にシユールだつたと思う…

次の日の夕方、僕の家之国から電話があり、自由国籍権を取得出来たらしい。だが、今後誘拐などの危険性を予測して僕と束さん&その家族は重要人物保護プログラムを受けなければならぬらしい…駄目だつたか…

第三話 もう我慢の限界だ！原作ブレイクしてやる！え？もうしてる？（後書き

ミサイルの戦闘シーン等をキングダムゾンしてしまった…

でも、IS学園編に入るまでには書ける様にします…

ミサイルの戦闘シーンをカットした理由は…かなり微妙というか  
…正直、書けなかった…

**第四話 旅立ち…高1になる手前辺りまで…（前書き）**

第四話です。

キングクリムゾンしくって原作に近付いてきました。

#### 第四話 旅立ち…高1になる手前辺りまで…

束さんの家には電話は行っていないだろうから僕は束さんに自由国籍権と重要人物保護プログラムの話をした。すると束さんは旅に出ると言う。そして次の日、幕から束さんが突然居なくなったと聞いた。僕は気になって束さんのラボに入らせてもらうと何もかも無くなっていた。

その後、親に重要人物保護プログラムについて話した。そして、束さんがそれが原因で束さんが旅に出たということも…

「…成る程、お前と篠ノ之さんの娘さんが作ったISっていうもののせいで、俺たち家族はその重要人物保護プログラムっていうのを受けなきゃなんねえのか」

「うん…ごめんなさい…」

「何謝ってたんだ？別に悪い事をしたわけじゃねえ。お前が熱中出来るもんがたまたまこんな事態になっただけじゃねえか」

「でも、僕のせいで父さん達はこの家を離れなくちゃならないんだよ！？」

「…そうだな、でも俺と莉緒が結婚しようとした時に比べりやどうつて事はねえ」

「え…あ…」

「だから、お前もお前の好きな様にしろ」

「…なら、僕は束さんみたいに自由に生きたい！」

「そうか…なら、フランスのここへ行け」

そう言って紙を差し出した父さん。

「ここ？」

「そこには、古くからの友人がいる。事前に連絡入れとくから荷物まとめて、明日にでも出発しろ」

「でも、保護プログラムのせいで飛行機とか使えないんじゃない」

「そこら辺は問題ねえ。友人のジェット機がお前を迎えに来るよう

に言つとくからよ」

父さんの友人って何者ー!?

「あ、ありがとう…そういえば父さん、僕に剣術を覚えてくれるって約束は?」

「あー、向こうの友人にでも習ってくれ。あいつも我流に近い剣術だし、お前の習いたい帯刀術も習えると思うぞ」

「そうなんだ…」

「話は終わりました?では、今日が家族全員での団欒の最後の日ですから、パーッとやりましょう!」

「お、そりゃいい!」

「ありがとう…父さん、母さん…」

「辛気臭えのは明日でいい!今は楽しむぞ!」

その後の夕食はとつても豪華だった。夕食後僕は荷物をまとめ、ISの工具などはISと一緒に量子化させて荷物を減らした。

翌日、土曜日。

家の前にて

「と言うわけで、僕も旅に出るよ一夏、箒」

「なんだよ!突然!」

「い、一夏…その…私も重要人物保護プログラムとか言つやつので明日にここを発つ…」

「えっ…」

「そうだったのか…因みにどこ行くんだ?」

「京都らしい…その後も転校はあるかもしれないと政府の人に言われた…」

「あーあ、一気に友達2人も居なくなっちゃうのかよ…つまんね」  
「そう言わないでよ。同じ星にいる限りいつか会えるでしょ?」

「なんだよ、そのクサイセリフ」

「そうだね、クサかったよ…そうだ、(箒、明日引越す前に告白したらどう?)」



「な、な、な、何を言う!?!」

「ん?どうした? 箒」

「いや、なんでも無いぞ! そうだなんでもない…」

「変な箒…」

「(鈍感王一夏だから直ぐには彼女は出来ないと思けど、気持ちちは伝えられるうちに伝えときなよ? しかも、明日の大会が引越しのせいで無くなつて、優勝したら付き合うつていう約束はもう果たせないんだからね)」

「(あ、ああ…)」

「なんだよ、さっきからヒソヒソと…もしかして…愛の告白とか?」

「はあ…違うよ。そろそろ時間か…またね、一夏、箒!」

「ああ、またな!」

「ふん! またな…」

2人に見送られながら俺はタクシーに乗り込んだ。

1時間ぐらいで空港に到着。そして、メモに書かれた場所を目指す。

「すごい…本当にあった…」

そこには真っ白なジェット機があった。思いつきマフィアっぽいおっさんが待機してる…

「氷川優人様ですね?」

「あ、はい」

「あなたのご両親の氷川勇利様より話を承りお迎えに上がりました。こちらへ」

「どうも、お邪魔します。つてえ、すごい!」

中はかなり凄かった。アニメで見たようなリムジンの中みたいに冷蔵庫やらTVやら高級ホテル顔負けの施設だった。

「優人様、お席にお座り下さい」

「あ、はい」

「それでは出発致します」

ここから僕の旅物語の始まりだ!

**第五話 神様と再会して増えるチート…っておい。（前書き）**

今回は同じ二次創作小説を書いている方々を参考に行を開けてみました。

## 第五話 神様と再会して増えるチート…っておい。

「では、優人様ごゆっくりと」

そう言つてマフィアっぽいおっさんは去つて行く。

…そついや、ガンダムのIS作るつもりだったけど結局、オリジナルISになつちまつたな…ファングスラッシャーは付けたけど。

よし、フランスに着いたら二機目のISを作ろう。それで、専用パッケージで色んな機体になれるように作ろう！

ん…待てよ…肝心の00系ガンダムのGNドライブ作れねえ…一度前に設計してみたけど、モノポールが無いから半永久的機関にならないんだよな…木星まで行つてもモノポールを必要分採取するのに何年掛かるか…

『大丈夫！まかせて！』

あれ？今声がした…ぞ…

そこで僕の意識は切れた。

目を開けると、真っ白な空間に僕は浮かんでいた。

「ここは…？」

『ここは天界…いや、君と私だけの空間なんだけど』

聞いた事のある声だ。

「何故僕をここに？」

『君が願いごとを決めたからそれを叶えてあげようと思って』

ああ、思い出した。この人、神様だ。また豊崎ボイスだよ。

―僕の願いごとってまさか…

『オリジナルのGNドライブが欲しいんでしょう？ISサイズの』

―…はい

『私があげるよ』

―何故です？

『転生した際、君の願いごとが少なかったからかな？』

―結構頼みましたよね？

『でも、大きな願いごとって天才ってスキルだけじゃない？』

―記憶の消去は？

『あんなもの、全然力使わないし』

―因果律の書き加えは？

『あれもノープロブレムだね、実際力を使うのクオヴレー君だし』

―…成る程、分かりました

『ならよろしい。という訳でGNドライブあげるね。しかも、二つ！他に何か願いごと無い？今後一切会えないと思うけど？』

「なら、純粹種のイノベーターの力を下さい。あの力が無いとツインドライブを使いこなせませんから。後、他のガンダムやスパロボの機体の作り方を下さい。特にスパロボ系統はエンジンが特殊だったりしますから。」

『そうだね、じゃあ純粹種の力と設計のスキルを加えるね』

「大丈夫なんですか？」

『ちょいギリギリだけど、叶えられるよ』

「あ、武器とかの足りない素材は何処かにありませんか？」

『そう言うと思って、月のある場所に特殊な素材類を置いておいたから。あなたが今後作るうとしてしているダブルオークアンタの量子テレポートで月を探してみて』

「あの時と同じ神様とは思えない程有能だ…」

『んなあ！？失礼だね！オマケとして、GNドライブの他に00系統の機体を作る為の素材も一緒にしてあげようと思ったのにやめようかな？』

「わー！ごめんなさい！嘘です！神様は気の利く神様です！

『ふふん、そうでしょ？』

この神様…本当に天然というか…何と言うか…

『あ、そくだ最後にあなたのいる世界ではバグが起きたの』

「バグ？」

『そう。本来起きるはずの無い事が起こる可能性があるから気を付けて』

「分かりました…肝に銘じておきます…」

『それじゃ、そろそろ時間だね。またいつてらっしゃい、そしてさようなら…』

「ありがとうございます  
そう言っ僕は消えた…」

『チート付けて原作通りに進んだらつまらないからね、少し意地悪しちゃった』

「ゆ…………ま…………ゆう…さ…………優人…ま！…………優人様！」

「んあ？」

目を覚ますとジェット機は既に着陸しているようだ。  
俺…12時間近く寝てたのか…

「ふう…やっと起きられましたか。夕食時になっても起きないので、

とても心配しましたよ」

「すみません…」

「既に本家に到着していますので、そちらで朝食を摂っていただけますでしょうか？」

因みに、現時刻6時である

「分かりました」

「では、こちらへ。寝ていたとはいえ、お腹が空いているでしょうから急いでご案内致します」

「よろしく願います」

グウ

あ。

「やはりお腹が空いているのですね、ご主人様の挨拶より先に朝食を摂ったほうがいいですね」

そう言つてマフィア風のおじさんは僕を先導する。

腹の虫を人に聞かせるのがこんなに恥ずかしいとは思わなかった…

「あ、申し遅れました。私、オーベル・クロードと申します」

「あ、よろしく願います、オーベルさん。そういえばオーベルさんって日本語上手いですね、どうしてです？」

「それは私の初恋の女性が日本人だったからです」

「へえ…」

うわ、すげえ努力家だな。好きな人の為に日本語覚えるとか。

「当時の話はあまりしたくないのでこれぐらいで。あ、着きましたよ」

流石に振られた話はしたくないか…そうこうしているうちに食堂に着いたみたいだ。

「こちらへどうぞ」

そう言って椅子を引いて座り易くしてくれるオーベルさん。

「どうも」

「君が勇利の息子か！」

左のほうから声が聞こえた。しかも、めちゃくちゃ櫻井孝宏ボイスだわ。

「あなたが父の友人の？」

「自己紹介がまだだったね。俺はアスベル・ドレلم、よろしく」

ウッソーン、思いつきりTOGのアスベルやん。姓が違うけど。外見はそのままアスベルだ。

でも、流石に左眼にラムダは宿っていないようだ。



僕も自己紹介しなくてはと立ち上がろうとするが…

「座ったままでいいよ、優人君」

「はい、では改めまして。ゴホン…父、勇利の息子の氷川優人です。これからお世話になります」

「あまり堅くならないでくれ、自然体で構わない」

「はい」

「それじゃ、まず食事にしよう」

その後僕はアスベルさんと一緒に食事を摂った。

## 第五話 神様と再会して増えるチート…っておい。（後書き）

今回はテイルズオブシリーズよりアスベル・ラントをモデルにしたキャラを登場させました。フランス編はまたキングダムゾンを使つて3話程で終わらせて原作に入っていくつもりです。

伏線を張つてみたが、上手く回収出来るか不安です…

## 第六話 迷子の迷子の女の子（前書き）

第六話です。

今回、結構日本語がおかしいところがおおいかも…

って、前の話でもおかしいところがあったよな…

## 第六話 迷子の迷子の女の子

朝食を取り終えて、アスベルさんが僕に話をしてきた。

「優人君、勇利から話は聞いている。君は政府の重要人物保護プログラムから逃れる為にフランスに来たんだよね？」

「はい、父さんがここに来れば友人が力を貸してくれると。そして剣術を教えてくれるという事も」

「ああ、勇利の言う通り俺達は君を政府から逃れる為に力を貸そうと思っている。勿論、剣術も俺が直々に教える」

「本当ですか！？ありがとうございます！あ…でも、僕を匿うと言う事は政府を騙すということになってバレた時にアスベルさんの家の立場を悪くしてまうのでは？」

「安心してくれ、既に政府とは仲が悪い。それにここら辺の地域は俺が統括している。隣町もね。だから政府の人が来て、君を連れて行こうとしても追い返したりする事は可能だ」

この人の家すご過ぎだろ…

「凄いと思っただろ？でも実際はあまり良くないんだ。おかげでこの町が密入国者が多いと変な噂を流されているんだ」

「そんな…って僕が密入国者か…」

「あはは、気にしなくても偽装パスポートで正規入国扱いになって

いるよ。名前と顔を少し変えてね」

「へえ、準備がいいですね。…因みに名前と僕の顔はどうなってるんです？」

「はい、これ偽装パスポート」

そこには顔は僕だけど、髪形が天然パーマじゃなくてストレート、名前はリョウト・ドレルム。それだけなのにバレないって…政府アホ過ぎ…

「政府が馬鹿なんじゃないかと思っているだろうけど、うちの部下が整形して撮った写真だからバレてないんだよ」

「つまり、政府は僕が入国したのではなくその部下が入国したと思っ  
っているんですね？」

「ちょっと分かりにくかったね、そう言う事だよ」

この人、結構凄いな…

「さて、剣術の事だけど明日からにしよう」

「何故です？」

「ここに来て間も無いからね。今日は荷物を整理して観光でもしてくるといい」

「でも！」

「焦りは禁物だ。今は観光でもしてきて、ここでの生活に少しでも慣らしておいた方がいい」

「…わかりました。ですが、僕は自動翻訳機のおかげでフランス語を理解する事は出来るんですけど、喋れないんです…」

「その点については心配ない。オーベルが着いて行く」

「ありがとうございます。そして、よろしくお願いします、オーベルさん」

「よろしく頼むよ、優人君」

「それじゃ、楽しんできてくれ」

そう言つてアスベルさんは立ち上がり、早々と食堂を出て行つてしまった。

「それじゃあ、優人君。私がフランスを案内してしんぜよう！」

「よろしくお願いします！」

それから僕はオーベルさんと共にリムジンに乗ってフランスの名所を巡り続けた。

それから夕方になり、僕は観光を終え、ドレルム家の管理する地区の隣町の公園にいた。

ボーツとベンチに座りながら公園中を見回すと僕と同年ぐらいの女の子が噴水の近くで座り込んで俯いていた。

僕はその子がどうしたのか気になって近付いて話し掛けた。

「どうしたの？」

しまった、日本語で話し掛けてしまった。

「え？」

俯いていた女の子は僕を見上げた。その瞳はエメラルド色で震えていた。というか、この子日本語分かるのか？

「えーっと、日本語分かるの？」

その女の子はコクコクと頷いた。

「そうなんだ、それじゃあ改めて聞くよ？どうしたの？」

「あのね…お母さんと一緒にここの近くに散歩に来ただけど、お母さんとはぐれちゃって…」

成る程、成る程。それで寂しくなって泣きそうになっていたと。

「そうだね…はぐれたのはこの辺？」

「うん…」

「なら、僕も君の母さんを探してあげるよ！」

「え、でも…」

「でも何もあるもんか。人が困った時はお互い様だよ」

「…そうだね、ありがとう」

その後、僕と女の子はその子のお母さんを探したが、一向に見つからなかった。そして少し経ってから女の子から腹の虫の鳴き声が聞こえた。

「あつ…／＼／」

女の子は恥ずかしそうに俯く。

「えーっと…ちょっとそこのベンチで待ってて」

僕は女の子をベンチに座らせ、近くにあったクレープの屋台でクレープを2つ買ってその子に渡した。

「はい」

「え、でも…」

「僕もお腹が空いてたんだ。それに、一人で食べるのは美味しくないから」

「う、うん…いただきます」

「召し上がれ」

「甘くて、美味しい…」

「本当だね…」



そして、クレープを食べていると声が聞こえた、女の人の。

「シャルロット！シャルロット！どこに居るの！？」

「あ、お母さん！」

「あの人が？」

「うん！」

女の子はシャルロットと叫んでいた女性の所へと走っていった。僕はその光景を見守っていた。

「ありがとう！自己紹介がまだだったね。私はシャルロット！君、名前は？」

女の子はお母さんと手を繋ぎながら僕に聞いてきた。

「って、シャルロット！？おいおい、一夏君のハーレム候補ジャマイカ！こんな所で会って大丈夫なのか！？」

そんな事を考えながら僕は自己紹介をした。

「僕は優人」

「ユウト！ありがとう！」

僕にお礼を告げるとその子のお母さんもお辞儀をして日本語でお礼を告げてきた。

「娘がお世話になりました…」

「人として当然の事をしたまでです。それじゃあ僕はこれで」

「バイバイ！ユウト！」

「バイバイ、シャルロット」

お互い、別れの挨拶を済ませてそれぞれの帰路に着いた。

その後、僕はシャルロットとフランスで会う事はなかった。

そう…フランスでは…

## 第六話 迷子の迷子の女の子（後書き）

はい、ヒロイン登場回でした。

フラグの建て方が難しい…これで本当にシャルロットが優人君に惚れたという理由になるのか不安です…

だれか…私にアドバイスを…ガクッ…

## 第七話 成長しました。高1ぐらい（前書き）

第七話です。

こんな駄文の二次創作小説でも読んでくれる人が居てくれてありがたいです。

でも、評価は一向に上がらない…

## 第七話 成長しました。高1ぐらい

僕がフランスに来て二日目以降、剣の稽古が始まった。アスベルさんの剣技はまんまアスベル・ラントそのものの太刀筋だった。でも、流石に旋狼牙や極光蓮華は出来なかったけど、葬刃は眼にも止まらぬ居合切りだったり、裂震虎砲は全身の体重を相手にぶつけて吹き飛ばす技だったりと色々の違いはあったものの、アスベルの剣技を習う事が出来た。

それから5年とちょっと、僕は高1になろうとしていた。原作の時期的にはそろそろ一夏がISを起動させる辺りだな。

そんな事を考えながら僕は新しいISを完成させた。その名もプライムフィールド（以降PF）。訳すと英語で素体。フランスで作ったからフランス語にしたかったけど、語呂が悪かったんでやめた。…例えば、僕の最初のISのブレイヴハーツも名前が厨二っぽいな…しかもブレイヴなんて名前なのに銃の名前がケルベロスとかね…うん、おかしいね…まあ、考えても仕方ない！

今回作ったPFは既にフィッティングを済ませた。単一仕様能力も発動している。ただ、その単一仕様能力が専用パッケージを装備しなければ発動しないが、パッケージによって単一仕様能力を変えるという代物なので別に気にしていない。むしろチート過ぎたと思った。

それから一週間後、僕は神様から貰ったGNドライブをブレイヴハーツから取り出した。あの神様は僕のブレイヴハーツに量子化させて入れていたのだ。しかもガンダムパーツと共に。おかげで、工具を取り出すのが大変だった。

僕は取り出したGNドライブの動作を確認し、あらかじめ作っていたPF専用パッケージ、クアンタに二機のGNドライブを積んだ。そして、もう一個の専用パッケージ、サバーニャに一機のGNドライブを登録しておいた。これで、クアンタを起動してもサバーニャを起動してもGNドライブ搭載型として出撃可能になった。

僕がクアンタとサバーニャを完成させた直後TVから速報が聞こえた。

『速報です！男性がISを起動させたそうです！名前は織斑一夏、15歳…』

「お、始まったか…再会が楽しみだね、一夏…」

独り言をつぶやき僕はTVを消して、PF専用パッケージの起動テストを行った。

「GNドライブ、マッチング・クリア…ツインドライブ、安定領域…トランザムテスト開始…オーバーロードの危険性ゼロ…トランザム停止…確認…テスト終了…」

なんとかGNドライブは安定しているみたいだ。この分なら行けるな。

「よし！完成！これから日本に戻ろうかな」

既にアスベルさんには話を付けてある。なので、PFが完成次第出て行くつもりだったのだ。でも、流石に挨拶ぐらいしていかなくちゃ。

着いた、アスベルさんの書斎だ。

コンコン。

『入れ』

「失礼します、アスベルさん」

「なんだ、優人か。その様子だとISが完成したんだな？」

「はい。なので、別れの挨拶に来ました。アスベルさん、いえ、教官。今まで、お世話になりました」

「ああ、これからも剣技に磨きをかけるんだぞ」

「はい！」

別れの挨拶が済ませた後、僕はドレルム邸の屋根の上に立ち、PFをクアンタで起動した。

「GNドライブ安定…ツインドライブシステム…オールクリア…量子ワープシステム、起動」

あの神様は脳内設計の中にちゃんと量子ワープシステムの設計も入れていてくれたので、この機体はサイズが違うだけのダブルオークアンタになっている。無論、クアンタシステムも組み込んである。肩のシールドからソードビットが5つ離れ、前方に量子ゲートを形成する。

「座標確認…」

座標は日本。これでOK。

そして僕は量子ゲートに入った。

「…ここは…日本か…」

一瞬目の前が眩しくなったと思うと、目の前に見覚えのある神社があった。篠ノ之神社だ。ここで一夏と筭が剣道を習っていたのだ。

「つと…」

誰かがくる前にとPFを待機状態にする。PFの待機形態はブレイヴハーツのようなネックレスでなく、花の形をしたバッチが胸ポケットに着いている。

「確か事前に調べた情報だと、父さんと母さんは元の家から動いて無いんだっとな」

最初に日本に着いたら両親に挨拶すると決めていたので、情報を集めていたのだが、この情報を知った時、かなり驚いた。保護プログラムを受けてるものだと思っていたのだが、どうやらアスベルさん達の配慮で移動せずに済んだらしい。改めてアスベルさんが凄い事が分かった。

そんな事を考えながら歩いていると家に着いた。現時刻、深夜2時。アスベルさんが政府に見つかってはマズいとアドバイスをくれたので、両親に連絡してこの時間に來たのだ。実際、量子ワープは失敗



するか小刻みにしかワープ出来ないと思っていたので、こんなに早く着くと思わなかった。ドアに手を掛け開けると…

「優人？優人なんですね？」

「う、うん。ただいま、母さん、父さん」

「ああ、おかえり」

「おかえりですね、優人！」

その後、一旦就寝。僕の部屋はあの時のままだった。

次の日

「はい、これ」

「何これ？預金通帳？」

母さんの手には5枚の預金通帳があった。

「はい、優人がISの特許を取っていたのでお金がドンドン貯まっていたんです。幾らか現金を下ろして限度額にならないようにしてはいたんですが、足りなくなってしまつて五枚ぐらい作ってしまいました…」

「因みにその現金は使つた？」

「はい、優人のお金を管理する金庫を買う為に！」

母さんに手を引かれ、両親の部屋に入ると、でかい金庫があった。

「でかい!」

「これぐらい大きく無ければ入りきらなかったんです!」

「は、はは…母さん、この現金は母さん達で使って」

「でも…」

「今までとこれからの養育費だと思って!」

「…わかりました。ところで優人はこれから何処へ行こうとしてたんです?」

「ん?一夏の家だよ」

そして、一夏の家。

ピンポン。

「はいはい、今でまーす」ガチャッ

「やあ!久しぶり、一夏!」

「優人?優人なんだな!?お前、いつ旅から帰ってたんだよ?」

「ん?昨日だよ」

「まあ、とりあえず入れよ!」

僕は一夏の家へ久しぶりに入りフランスの土産話をした後、一夏のIS学園入学について話をした。

「そりゃ、大変なことになったねえ」ニヤニヤ

「何ニヤニヤしてんだよ。おかげで、こっちは珍獣を見る様な目で見られるんだぞ!？」

「まあまあ。とりあえず、試験つてのはいつなんだ？」

「明日だよ。はあ…嫌だな…」

「それじゃあ僕は見学に行こうかな？」

「ん？部外者は入れないと思うぞ？」

「これを見せればいいでしょ？」

そう言つてカードを取り出す優人。

「これは？」

「IS開発者証明証、これがあればISに関する事ならいかなる場合でも介入できる様になる優れ物だよ」

ついでに、この証明証を作ってもらついでにどの国の法律も適用されないという約束もしてもらつていて、この証明証がそれを証明する物にもなっている。え？なんでそんな事をして貰ったかつて？そうでもしなきゃISを自由に使えないし、女尊男卑の世の中になつていくこの世界で冤罪にかけられたらやだし。

「すげえ！んじゃ、ISの開発者として何かアドバイスをくれよ！」

「相手の動きを良く見て」

「それだけかよ！」

「一夏なら出来るさ」

原作でも山田先生だったし大丈夫だろ。

そして、次の日…

試験の日が来た。でもここで一夏が負けても勝っても結局入学なんだよな。

第七話 成長しました。高1ぐらい（後書き）

もうすぐ原作突入ですよ！猿渡さん！

ミストさんのモノマネでした

## 第八話 抜刀！研ぎ澄ませ！…たらしいのにな…（前書き）

第八話です。

今回は千冬ファンごめんなさいの回です。

こんなに千冬さんが弱いわけがないと思った方は即回れ右してください。

何時の間にかPV20・000&ユニークアクセス4・000突破してたんですね。

こんな駄作なのにありがとうございます。

ではどーぞ。

## 第八話 抜刀！研ぎ澄ませ！…たらしいのにな…

「一夏ー頑張れー」

僕が今いる場所はIS学園の第3アリーナである。ここで一夏の試験を行うそうだ。

「たつく…あいつ、他人事みたいに…」

あ、一夏が何かぶつくさ言ってる。

「お前…優人か？」

不意に後ろから声を掛けられる。振り向くと黒いスーツを着た一夏の姉、織斑千冬が立っていた。

「あ、ども。お久しぶりです」

「いつ日本に戻ってきた？」

「日本には一昨日戻って来ました」

「そうか…それでここで一夏の応援をしているというわけか」

「その通りです。ところで僕もこの学園に受験したいんですけど？」

「…本気で言ってるのか？」

「はい、ISは動かせるから問題無いでしょう？」

「それはそうだが…」

「…あ、女子ばつかでも気にしませんよ。僕は一夏を観察したいななんて思ってるだけですから」

「そういう問題ではなかつ…」

「それに、この学園に入ってしまったえば政府もうるさく無くなるだろうし…」

「…なるほど、それは一理あるな…」

「でしょう？つて、あれ？一夏の相手が勝手に壁に激突しましたけど？」

「山田先生…」

あ、やっぱり山田先生が相手だったのか。

「まあ、分かった。私が申請を出しておこう。恐らくお前は今日の午後には試験を受ける事になるだろう」

「ありがとうございます」

フフフ…これで一夏のハーレムを見届ける事が出来る…

そんな事を考えているうちに千冬さんが居なくなり、入れ替わるように一夏がこっちに来了。



「やあ、お疲れ様、一夏。俺の言った通り相手を見てれば勝てたでしょ？」

「ああ、まさか勝手に突っ込んで勝手に負けてくれるとは思わなかったぜ。そっぴや、さっき千冬姉と話をしてみたんだけど？」

「ああ、僕もIS学園を受験するよう手配してもらってた」

「はあ！？」

「あ、言ってなかったね、僕もIS動かせるんだ」

「お、俺一人じゃなかったんだな…」

「うん」

「優人」

「あ、千冬さん」

「申請を終えた。午後1時30分にお前の試験を始める。場所はここ、第3アリーナだ。そして相手は私だ」

「えっ！？」

「お前は一応専用機持ちでベテランだからな。相手に不足は無かるう？」

「いや、そりゃそうですけど…だからって千冬さんが相手じゃなくてもいいじゃないですか！」

「…ちよつと待て、優人。お前、ずっと前からIS使えたのか!？」

「え? うん」

一夏がポカーンとしてる。どうしたんだろ?

「とりあえず、一夏。応援してよね」

「あ、ああ…」

「話は纏まったな。優人と一夏はこれから案内する食堂で昼食を取れ。優人は時間に遅れるなよ」

「はい」「分かった」

その後、僕達は千冬さんの案内の元、原作でも美味すぎると原作一夏に評判だった食堂で昼食を取った。一夏は日替わり定食で、僕はカルボナーラを頼んだのだがそこら辺の料理店で食べるものより美味しかった。

そして時は移り試験時間、もとい運命の時が迫る。千冬さんが相手とかマジ無理…

それでもやるしかない…空中に浮かんだディスプレイを見ながらそう考えた。

「なあ、お前が使うISって訓練機じゃねーの?」

「ん? ああ。僕のISは専用機だよ。自作したね」

「なんかズルいな…」

「そう拗ねないでよ、イイじゃない。試験で勝てたし、多分、入学すれば専用機を貰えるんじゃない？」

「どうしてだよ？」

「世界で唯一男でISを動かせる男。そんな事言われたらデータを取りたがる連中が多いだろうからね」

「へえ…」

ま、原作で白式貰ってたし、大丈夫だろ。

『優人さん、ISを装着してアリーナ中央まで移動してください』

「時間か…一夏、応援頼むよ」

「ああ、頑張れよ！」

「うん。来い…ブレイヴハーツ！」

僕は光に包まれ、光が消えると一夏が試験で使った打鉄より一回り小さいISが装着されていた。それはまるで鎧を纏うように。顔には後ろにアンテナが伸びたヘッドバンド型のハイパーセンサーが取り付けられ、左肘に二つの細長い鉄の棒が付いている。腰には鞘に納められた剣と2対の銃が付いており、背中には非固定武装の翼が付いていて、そこから光で出来た剣が左右、3本ずつで翼を形成していた。

「へえ…優人のIS、かつこいいな…」

「ありがと…それじゃ、行ってくる！」

「応！」

カタパルトに足を固定し、火花を散らしながらカタパルトから射出された。

アリーナに出ると、目の前に打鉄を纏う千冬さんがいた。

「ほう…懐かしいな…」

「あの事件から5年経ってますからね」

「あれでお前と手合わせしたかったものだな」

「ははっ…冗談は…」チャキッ…

腰から2対の銃を手に取り…

「言わないで下さい！」ババン！

2つ同時に引き金を引いて、二発のビームが飛んで行く。

しかし、千冬さんはそれを最小限の動きで躲し、僕に接近してくる。

僕も負けじと銃の引き金を引き続け弾幕を張るが、あっさりと躲される。

そのまま千冬さんは僕に一気に接近して、打鉄の近接ブレードで斬りつけてきた。

「ハア！」

「！！！」

僕は咄嗟に2対の銃を交差させて剣を受け止めるが、千冬さんの力が強く、押されて行く。

このままでは…と僕は思い、背中の光の剣に命令を送った。

「目標を斬り裂け！」

そう僕が命令すると二本の光の剣が背中の翼から離れて千冬さんへ飛んで行く。

「チッ！」

千冬さんは慌てて距離を取り、近接ブレード一本で様々な方向から斬りつける光の剣を捌いていた。

「隙だらけですよ！」

僕は千冬さんが光の剣を捌いているうちに、左肘から細長い鉄の棒を二本とも取ってX字に合体させて、ブーメランの様に投げる。

「フアングスラッシャー！」

「何！？」

千冬さんは光の剣を捌きつつ、回避行動を取る。おかげで、光の剣は振り切ったが、ファンゲスラッシャーは自動追尾モードで千冬さんを追い詰める。

「自動で追尾してくるのか！ならば！」

突然、千冬さんが姿を消した。いや、正確には瞬間加速イクニッション・ブーストを使ってこちに迫って来たのだ。

「イクニッション・ブーストか…ってダブル！？」

ダブル・イクニッション・ブースト  
二段階瞬間加速は通常、スラスタが多い機体で無ければ使う事が困難なのだが、千冬さんは平然とそれをやったのけた。

おかげで、距離は詰められ、ファンゲスラッシャーは目標が消えた  
と判断され、空中を飛び回ってしまっている。僕は千冬さんの速さに  
翻弄され、まともな防御も出来ず…

「ハア！！！！！」

「うわあああ！！！」

咄嗟に腕を前に構えたが、近接ブレードで斬りつけられ、シールド  
エネルギーが削られる。

僕は二撃目がくる前に瞬間加速イクニッション・ブーストで一時離脱をした。

ハイパーセンサーに映るシールドエネルギーを見ると、残り254  
だった。それに比べ、千冬さんは残り298。僅差に近いが、僕は

攻撃を入れる事が出来ずに削られている為、千冬さんが有利と言っても過言ではない。

「流石ですね…千冬さん…」

「フツ…お前もな…」

このままではと思い、僕は腰の剣を鞘ごと手に持ち、帯刀術の構えを取った。

「ほう…やっと近接戦闘を見せるか…」

「相手が相手だから避けてましたけどね。でも、もう攻め方がこれしか無いので」

「フツ…ならばお前の剣技、私に見せてみる！」

そう言っ僕に近づいてくる千冬さん。僕も立ち向かって行き、近接ブレードと鞘がぶつかり合い火花を散らした。

そのまま鞘で近接ブレードを流し、鞘で殴った後千冬さんに蹴りを入れた。

「なっ…！」

「まだまだ…！」

僕は瞬時加速を使って力を強めた全体重を乗せるタックルをお見舞いする。

「斬るっ!!」

吹き飛んで行く千冬さんを通り過ぎながら抜刀し斬りつけ、そのま  
ま鞘へ収める。これで結構削ったはず…

振り向く途中、ハイパーセンサーを確認すると、僕は残り98。千  
冬さんが残り97。差は1だが、かなり減らせたほうだ。

「クッ…フランスで面白い剣技を習って来たようだな…」

「あ、あれ、僕、千冬さんに、言って…ませんよね…」ハアハア…

「束から聞いたからな…」

納得だ…あの人なら俺の事を知っても不思議じゃない…

「では、決着を付けるぞ!」

「はい!」

「うおおおおお!!!」

二人が衝突する…結果は…

「惜しかったな、優人!」

「そうでもないさ、向こうはかなりハンデ付けてくれてたし、こっ  
ちの機体がよかったただけだ」



「それでも、あの千冬姉を追い詰めるなんてすげえよ、あの一太刀が届いてりゃな…」

そう、僕は負けた。最後の一振りは千冬さんが早かったのだ。

「だが、優人、お前もなかなかよかったぞ？」

「あ、千冬姉！」

「ありがとうございます。でも、やはり僕にもまだまだ鍛錬が足りないと感じることが出来ました。千冬さん、ご指導ありがとうございます！」

「指導などしたつもりは無いがな…まあいい…入学までにこれを読んでおけよ？まあ、優人はいらないかもしれないが」

そう言つて一夏と僕は分厚いISの参考書を渡される。

「うげえ…」

「入学までに勉強して来い」

「はい…」 「はい！」

その後は通常通り帰宅。夕食は一夏の家で食べた。

## 第八話 抜刀！研ぎ澄ませ！…たらしいのにな…（後書き）

初戦闘シーンです。

因みに、後の話でやる予定でしたが補足するとオリ主のISのファングスラッシャーはゾル・オリハルコニウム製では無いので、打鉄の近接ブレードで切り裂くことが出来る設定です。正直、今回の話でやって見たかったけどISの3巻読んでたら千冬さんの二段階瞬時加速をしてるシーンを書いて見たかったので没にしました…

後、サブタイトルの元ネタは作者が最近再燃し始めたTOGFの戦闘BGMの題名です。

第九話 入学初日から授業とかね、きついね（前書き）

第九話です。

基本、原作丸写しです…申し訳ない…

気が付くと、お気に入りが一件減っていた…駄文だからですね…精進します…

## 第九話 入学初日から授業とかね、きついね

「ふぁあゝあ…」

現在、早朝5時。今日からIS学園へ登校だ。明日から寮での生活なので、部屋は小ざっぱりしている。両親は僕とアスベルさんが政府に圧力を掛けたら自由に動けるようになり、昨日フランスへと向かった。なんでも、僕が養育費と言って渡したお金で世界一周をしてくるそうだ。

僕は重たい体を持ち上げ、洗面所に行き、顔を洗って目を覚ます。そして服を脱いでそのまま朝風呂をする。朝風呂を終え、IS学園の制服を着る。その後リビングへ行って朝食を食べる。

朝食を食べ終える頃には6時になっていた。まだ時間があるので、暫く離れるこの家の掃除をした。

掃除が終わり、戸締りをして僕は鞆を持って外に出た。

外に出ると一夏が待っていた。

「おー、優人。おはよー」

「うん、おはよう」

「お前の事だから集合時間の5分前に来てると思ったら時間ジャストとはな」

「家の掃除を軽くやってたんだ。暫く誰もいないしね」

「あれ？勇利さん達は？」

「昨日から旅行だからいないよ」

「へえ……」

「そろそろ行こう一夏。電車に乗り遅れると遅刻して千冬さんに殺されるよ?」

「それだけは勘弁だ……」

そんな会話をしながら僕達はIS学園の前に着いた。ここで千冬さんと待ち合わせなのだ。なんでも僕達男子は異例なので、普通に入るのはマズイという事で千冬さんと一緒に入るという事になった。一夏はソワソワして落ち着かないが僕は両耳にイヤホンを付け、音楽を聴いている。聴いているのは、神様がこちらの世界でも見れるように準備してくれたあのアニメ『けいおん!』のオリジナルメドレーだ。

(はあ、唯ちゃんのまったりボイスは落ち着くな)

少し顔が緩んでる気がした……

「織斑、氷川、待たせたな」

「あ、千冬姉……っていつて!?!」

千冬のげんこつが炸裂!

「ここでは織斑先生と呼べ、馬鹿者……」

僕はイヤホンを取り、姿勢を正して

「今日からよろしくお願いします、織斑教官！」

「教官では無い、先生だ」

その後僕達はクラスに案内された。同じクラスの方が監視がし易いと僕と一夏は1組となった。

「私が案内出来るのはここまでだ。すぐにSHRが始まるから席に着いておけ」

それぞれの席に着くと本当にすぐSHRが始まった。

「皆さん、入学おめでとうございます！副担任の山田真耶です！」

シーン…

ありや？誰か反応してあげなよ？って僕もか…

「あ、あれ…？」

山田先生がなんだか焦ってるみたいだ。つか、原作でもこんな流れだったか…

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

一夏視点移行…

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺と優人二人という点だ。

（これは……想像以上にきつい……）

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、席も悪い。なんで真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。  
俺は窓側の方に目をやる。

「……………」

何かしらの救いを求めての視線だったんだが、薄情なことに幼馴染の篠ノ之箒はふいつと窓の外に顔をそらした。なんて奴だ。これが六年ぶりに再会した幼馴染に対する態度だろうか。……いや、もしかして俺嫌われてるんじゃないか？

試しに箒と反対側に居る、優人にも視線を送ったが何故かニコニコした顔で俺を見てる。もしかして、あいつ俺の反応を楽しんでる…？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、

「ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから。先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

優人視点移行：

先生と少し漫才をした一夏が立ち上がり、自己紹介を始めた。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は儀礼的に頭を下げて、上げる。女子達は『もつと色々喋ってよ』的な視線を送りつつ、『これで終わりじゃないよね？』的な空気を作った。

そして、一夏は大きく息を吸い…

「以上です」

ギャグ漫画みたいにずっとこける女子数名が居た。僕も笑いを堪えるのに必死だった。

すると、千冬さんがクラスに入ってきて来て、一夏が頭に？マークを出してるところにスパァン！と出席簿が叩きつけられた。

「いつー！？」

一夏が振り向くと…



「げえっ、関羽!？」

スパアン!とまたまた爽快な音が響く。響く?仮面ライダー響鬼?そうだ、前世で見てなかったから見よう。

謎の決心を僕が決めたと同時に千冬さんが口を開いた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

千冬さん、ナイス突っ込み!

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これ位はしないと…」

あれ?山田先生、千冬さん来た途端に涙声じゃなくなったぞ?僕がそんな事を考えてるうちに千冬さんが自己紹介を始める。あ、耳栓よーい。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬さんの話が終わると同時に耳栓を装着。耳栓をしていて分からないが、黄色い声援が響いてるに違いない。だって一夏が驚いてるんだもん。

暫くしたら僕の前に千冬さんが来て、何かなー？って思ったら出席簿アタックが飛んで来た。僕は咄嗟に机脇に置いておいた木刀で防いだ。片手で耳栓を外し、千冬さんに話掛ける。

「ど、どうしたんですか？ち…織斑先生…？」

かなりきつい…木刀と出席簿だつてのになんでこんなに押されてるんだよ…

「自己紹介がお前の番だと言うのに、自己紹介をしないからな。私が知らせに来てやった。どうだ？嬉しいだろ？」

「ははっ…そりゃありがたいです…」

ヤバイ…左腕がそろそろ限界…

「わかつたら、さっさと自己紹介をしろ」

それから初めて力が緩み、出席簿を離す。

流石に一夏の二の舞は避けたいね…僕は深呼吸して自己紹介をする。

「氷川優人です。織斑くんの次にISを起動出来たと言う事でこちらに入学させられました。一年間よろしくお願いします」

無難な自己紹介だ。これで満点…って、一夏の時のような空気にならないでくれ…

だが、僕にはこれ以上言う事はない。

僕はそのまま座った。

「ふん…まあいい、次」

よ、よかったあああ！満点では無いが、出席簿アタックが来なかった…次来たら左腕が死んでいたぜ…

SHRが終わり、僕は一時間目の授業を受けた。今はその一時間目が終わった後の休み時間。

「なあ、優人。お前、一時間目の授業…わかってるよな…」

「当たり前さ、製作者だしね」

「はあ、俺にISの事を教えてくれよ…」

「高級料亭の飯を奢ってくれるなら」

「酷っ！」

「何を言ってるの？等価交換だよ？」

「はあ…ところでさっきから女子からの視線が気になって仕方ないんだけど…お前は？」

「それは、無視しろ」

だが、しかし、これは想像以上にきついと思った一夏の気持ちはよくわかった。誰だ、ハーレムは天国とか言ったやつ。そんな考えの中、凜とした声が聞こえた。

「ちょっといいか、二人とも…」

見上げると六年ぶりの幼馴染、篠ノ之箒が立っていた。

「……箒？」

一夏が名前を呼ぶ。すると箒は

「屋上でいいか？」

あり？原作だと廊下だったよな？ああ、アニメ版か。幸い、ここは屋上が一階上のためすぐに行くことができる。

「早く来い……」

何時の間にか出口に立っている箒。

「うん、わかった」

「あ、待ってくれよ二人とも！」

屋上に出ると、一時の沈黙が訪れるが、一夏の一言で沈黙は破れる。

「そつえば」

「何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………」

あり？ 箒だんまりか？

「なんでそんな事知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし…」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

「え、それ理不尽過ぎない？」

思わず突っ込んでしまった。

「……………」

あー、また沈黙を作ってしまった…

「あー、あと」

サンキュー、一夏！ ナイスフォロー！

「な、何だ！？」

「……………」

「あ、いや……………」

自分の剣幕に気づいたのか、ばつが悪そうにする箒。一夏に会えたのが嬉しいのか、妙に興奮してる。

「久しぶり。六年ぶりだけど、筭ってすぐわかったぞ」

「ああ、僕も」

「え……」

「ほら、髪型一緒だし。なあ、優人」

「ああ」

「よ、よく覚えているものだな……」

「いや、忘れないだろ、幼馴染のことくらい」

「……………」

あー、一夏が睨まれた……

僕は無言で筭の肩に手を置き、励ます……

「一夏だからね……抑えるんだ、筭……」

「う、うむ……分かってる、優人……」

キンコンカーンコン。  
おっと、タイムアップだな。

「二人とも、教室もどるよ。千冬さんに殴られる前に」

「お、おう」「う、うむ」

二人の声が八モる。教室に戻ると僕と箒はすぐに席に着いたが、一夏は何故か席の前に行くとか何かを考え始め、千冬さんに叩かれた。

「とつとと席に着け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

一夏の脳細胞、二万個死んだのか……南無……

一夏視点移行……

二時間目……すらすらと教科書を読んでいく山田先生。しかし、俺は全くついて行けなかった。

「……………」

どつかりと積まれた教科書五冊。その一番上のものをぱらりとめくるが、意味不明の単語の羅列にしか見えない。

（お、俺だけか？俺だけなのか？みんなわかるのか？いや、優人はわかるけど……このアクティブなんちゃらとか広域うんたらとか、どいう意味なんだ？というかこれ、まさか全部覚ええないといけないのか……？）

ちらつと優人の方を見ると、あいつは授業を聞かずに何か絵を描いてる。時々頷いてはニコニコしてる。視点を少し右に動かし、隣の席の女子を見ると、こっちは山田先生の話に時々頷いてはノートを取っている。

（ぐぬぬ……。しかしこのIS学園に入るやつって事前学習してるってというのは本当なんだな……）

IS操縦者が国防力に直結する昨今、いわばこの学園はエリートを育てるための機関だ。そして入学試験でもものすごい倍率を勝ち上がって来た優等生でもある。

（エリートには興味が無いが……。うーん、このままではいかん。要勉強だ。今月きついけど、優人に飯を奢って教えてもらおう）

かなりの劣等感に頭をたれながら、俺はついてきぱきノートを取る女子を注視してしまっていた。

「な、なに？」

案の定、視線に気づいた女子が驚いたような緊張しているようなその上なにか期待しているよう、引きつった作り笑顔で聞いてきた。

「あ、いや。何でもないんだ。ゴメン」

「そ、そう」

ホッとする様にノート記入に戻る女子。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

俺と女子のやり取りに山田先生が気づいてわざわざ訊いてきてくれた。

「あ、えっと……」



「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

（んー、先生なら分かりやすいよな。それにここで聞けば優人に飯を奢らずに済む…よし！）

俺は意を決して…

優人視点移行…

「先生！」

一夏が山田先生に言われ、質問する。

「はい、織斑くん！」

やる気に満ちた山田先生が返事をする。

「殆ど全部わかりません」

「ブツ！！」

わ、わかっていたのに吹いてしまった…ククッ…

「え……。ぜ、全部ですか……？そ、それと氷川くん大丈夫ですか？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつり、僕に心配そうに声を掛けてきた。

「プククッ…だ、大丈夫です…」

「そ、そうですか…え、えっと…織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を促す山田先生。

シーン……。

ですよねー、このぐらい常識の範疇だもん。  
教室の端で控えていた千冬さんが少し眉をピクつかせながら一夏に質問をする。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました！」

いい笑顔で一夏が答える。そんな一夏にプレゼントされるのは…  
スパァン！

そう、出席簿アタック！

「必読と書いてるあつただろうが馬鹿者」

あそこで、一夏が『殴ったね！？親父にも殴られたこと無いのに！』  
って言えば完璧なんだけどな

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者。……氷川、お前のはどうした？」

「あー、いい火種になりました！」

僕は少しパラパラと読んだ後、季節外れな焼き芋が食べたくなり、火種にした。そんな答えをすれば当たり前のように…

スパアン！

僕が木刀を構えるより早く出席簿が飛んできた。ちくせう…防げなかった…

「氷川は…まあいいか…織斑、後で再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間で「やれと言っている」…はい」

そんな怒涛の二時間目でした

第十話 セシリアに決闘申し込まれた…（前書き）

第十話です。

サバーニヤを出すタイミングをどうするか迷う今日この頃

## 第十話 セシリアに決闘申し込まれた…

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」「え？」

二時間目の休み時間、僕と一夏が雑談をしていると金髪で僅かに口  
ールがかった髪はいかにも高貴なオーラを出している。あー、セシ  
リア・オルコットか。

「訊いています？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どついう用件だ？」

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけ  
でも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんではな  
いかしら？」

「……………」

「…一夏、さっきのところもう一回やろうか」

「おう」

無視して一夏にESの基礎知識を叩き込む手伝いを再開…

「無視とはどついうことですよ！？」

「あー、めんどくさいから？」

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、氷川センサー、質問です」

「はい、織斑くん」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がまたずっこけた。セシリアに関してはプルプル震えてる。携帯のバイブレーションみ  
たいに。

「あ、あ、あ……」

「ん？『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん！」

「誇らしげに言わないでよ。文字通り、国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートだよ」

「そう！エリートなのですわ！」

「まあ、国の代表になったわけでもないからそこまで威張れるよう

なもんじゃないよ」

「ぐっ……」

おー、セシリアが苦虫を噛み潰したような顔してる。

「ほ、本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラス。同じすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「…馬鹿にしていますの？」

（（お前が幸運だつて言っただんじやないか））

「大体、こちらの方は違いますが…」

そう言つて僕を指差し、次に一夏に指差しこつ言つた。

「あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。世界で二人だけの男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「いや、一夏に期待してもね」

「優人…相変わらずお前酷いな…」

「ISのことではわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれた

ら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？ESを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「優人は千…織斑先生が相手だったからな」勝てなくてもおかしく無いよな」

「…勝てたら凄すぎるよ」

「勝ったのはわたくしだけと聞きましたが？しかもあなたはあの『ブリュンヒルデ』の織斑先生と？」

「勝ったって話は女子だけってオチじゃないのか？あと、優人の話は織斑先生や、山田先生に聞けば本当だってわかるよ」

「つまり、勝ったのはわたくしだけでないと……？」

「いや、知らないけど」

あ、ハモった

「あなた！あなたも教官を倒したっていうの!？」



「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられー」

キンコンカーンコン。

三時間目の開始のチャイムだ。

今の僕らにとって福音に聞こえる。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

ええ……めんどくさ……言ったら怒るだろうから言わないけど。あ、三時間目は千冬さんが授業をするのか。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。ああ、その前に再来週行なわれるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

代表者か……原作だと珍しいからって一夏が推薦されてたな……僕も推薦されるのだろうか……でも、そうなるとセシリアが決闘挑んでくるんだっけ？そんな事を考えているうちに千冬さんがクラス代表者についての説明を終えていて……

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

つと原作通り

「じゃあ、私は氷川くんを！」

Oh…前世で読んでいた二次創作のISの主人公と同じ展開を味わうとは…

「では候補者は織斑一夏と氷川優人……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

一夏が驚いて立ち上がった。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないならこいつらで決めてしまっぞ」

「ちよっ、ちよっと待った俺はそんなのやらな」「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権はなどない。選ばれた以上は覚悟をしろ。氷川の様にな」……」

僕は面倒事にならないように黙ってるだけだけど…

「い、いやでもー」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

はあ？だったらすっさと立候補しなよ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までES技術の修練に来てるのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

あーはいはいそうですね。

「いいですか！？クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐え難い苦痛でー「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」なつ……！？」

おー一夏！よく言った！

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

はあ？流石に黙ってられん。

「先に侮辱したの、そっちでしょ？人様の国を散々侮辱しておいて自分の国を侮辱されると怒るって大した御身分な事だねえ？」

「くつ……！わかりましたお二方、決闘ですわ！」

ええ…

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

「いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。俺と優人は真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね」

あつるえー？僕の意思に関係無く話が進んでるけどまあいいか。つか、セシリアって自己紹介が多いな。まあ、原作ブレイク開始だな。あのセリフを僕が言おう。

「勝負するにあたって、ハンデはどの位つける？」

「あら、早速お願い事かしら？」

「いや、僕がハンデをどの位つけようか言ってるんだけど？」

クラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「日本の殿方はジョークセンスがありますのね」

「氷川くん、それ本気で言ってるの？男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「うん、僕は本気だよ。だって僕もISの開発者だし」

笑いが止まり、全員が固まる。

「あ、あなたがISを作った…？」

「正確には篠ノ之東博士が基礎理論やら何やらで、僕が武装とシステム構築とかだけだ」

「ええええええええ!!?」

うるさ...って、当たり前か。こんな事聞いたら驚くのは無理もない。

「待つ、待って！？篠ノ之博士って篠ノ之さんと何か関係があるの！？」

咄嗟にそんな声が聞こえた。そんな質問に千冬さんが冷静に答える

「そうだ。篠ノ之は篠ノ之博士の妹だ」

またクラスがざわつく。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内がふたりと有名人がひとりいるの！？」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ISSの操縦教えてよっ」

クラスの女子達が箒に質問攻め。僕の方にも来てるが軽く流している。

「あの人は関係ない！」

突然大声をあげる筈。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言つて窓に顔を向ける篤。まあ、あの人と比べられるのは嫌だもんな。

「おい、盛り上がるのはいいがクラス代表決定戦は一週間後に行う。三人共、いいな？」

「「はい」」

「ところでオルコットさん？ハンデはどうする？」

「い、入りませんわ！そんなもの！」

「ふーん…」

そんな事があつた三時間目も終了。

以後、昼に僕と一夏が昼食を食べに行く際にモーゼの海割りが起こった事以外普通に終了し、放課後に。

僕と一夏は教室に残り、山田先生を待っていた。用件は部屋割りについてだ。

「お待たせしました。お二人の部屋何ですけど…」

「どうしたんですか？」

「相部屋があれば良かったのですが…都合が悪く、どちらかが女子

と同じ部屋になってしまっんです…」

「「えっ」」

「そこでお二人が相談し合って、どちらが女子と相部屋になるか決めて下さい。あ、もちろん、女子と相部屋にならなかった方は一人部屋をご用意させて頂いてありますので」

「…一夏」

「…優人」

二人で睨み合い…

「「勝負だ!!」」

二人で叫んで…

「「最初はグー!!ジャンケン…ポン!!」」

僕がパー、一夏がグーで僕の勝ち!

「よし!」

「む、無念…」

「山田先生!僕が一人部屋で!」

山田先生は僕のテンションに驚いくがすぐに鍵を渡してくれた。

「は、はい。これが織斑くんの1025室の鍵で、これが氷川くんの1026室の鍵です。それぞれの荷物は後で届くと思いますので」

「「はい」」

「あ、大浴場は男子は使えないので気をつけて下さい！」

「え、なんですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

どこから出て来たんだ…千冬さん…

「あー……」

「一夏、そう言う事はもっと考えてから言おう」

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だつ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」

「一夏、山田先生が暴走している。さっさと寮に行こう」

「あ、ああ……」



「ふ、ふたりとも！寄り道はダメですよ！」

教室を出て行く僕達に言ってくる。寮まで50mほどだから寄り道のしようがないが…

「それじゃ、一夏。また後で」

「おう、夕食の時にな」

一夏は隣の部屋だった。原作通りなら筈が一緒の部屋だな。

「しかし、この部屋、本当に高級ホテルそのものだな。高級な設備ばかりだし」

料理器具からパソコン、シャワールーム、ベッドなどすべてが高級品だ。特に料理器具なんか、どっかの料理亭で使われてるだろ。

ドタドタッ！！

隣が騒がしい…一夏と筈だな。原作でも喧嘩してたし、あれは理不尽だな…

まあ、そんなことは気にせず、僕はパソコンを起動し、P.Fのサーバーニアのシステムを起動する。今回やろうとしている事はビット系統の操作を行うAIの作成だ。流石に僕も28機ものビットを同時に扱うのは無理なので、原作と同じように八口のようなAIにビットの操作を手伝ってもらおうと考えている。あ、そういや僕ってイノベーターなのか。そうか、だから千冬さんと互角に戦えたのか！

すっかり自分がイノベーターだと忘れていた！まあ、いいや。今はAIの作成に集中だ。その後、休憩のような形で一夏と夕食を取り、一日を終えた。

次の日の授業では一夏に専用機があると言つ事が告げられた。やったね、一夏！その日の昼。

「なあ、優人。箒誘って飯行こうぜ！」

「わかった。じゃあ、先に行って席を取っておくよ」

「頼む！」

そう言つて箒のところへ行く一夏。僕は先に席を取って待っていると、少し一夏がボロボロだった。

「一夏、どうして少しだけボロボロなの？」

「ん、あー何でもない」

「…箒がやったのか」

「…何故そう思う？」

「一夏だから」

「なるほどな…」

「何の話だよ…それより、優人！俺にISのこと教えてくれ！」

「嫌だ」

「即答かよ!」

「あ、でも、操縦は教えないけど基礎知識なら教えるよ」

「それだけでもいい、サンキュ…なら箒!お前が操縦のコーチを頼む!」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

「そこを何とか!」

箒は無視してほうれん草のおひたしを食べてる。すごいスルースキルだ。そんなところに先輩が来た。

「ねえ。君たちって噂のコでしょ?」

「はあ、たぶん」

「私がISの事、教えてあげようか?」

「それはぜー」結構です。私と優人が教える事になっていますのでえ?」

箒が大胆な行動にでたなー原作通りだけど。

「でも、あなたたち一年生でしょ?私は三年生だからあなたよりうまく説明出来るよ?」

「心配には及びません。私は篠ノ之束の妹ですから」

「篠ノ之つてまさか！？ええっ！……なら仕方ないわね……」

先輩は立ち去って行く。一夏はどうあっても渡したくないか…僕は昼食のラーメンをスープまで綺麗に飲み干した。

「それじゃ、ふたりとも。練習頑張つて。僕も頑張るから」

「あ、ああ。箒、本当に教えてくれるのか？」

「放課後、剣道場に来い」

「え、でも俺はISの事を…」

「いいな!？」

「あ、ああ…」

「（箒、折角ふたりつきりになれるチャンスなんだから頑張れよ。その様子だとあの時告白出来てないみたいだし）」

「う、うむ……」

僕は箒に少しアドバイスをしてその場を立ち去る。

そして、一週間がたった…

**第十一話 セシリア・オルコットに後悔する間も与えない！（前書き）**

第十一話です。

お気に入り登録件数は増えているのに評価が上がらない…

文才が欲しい…

## 第十一話 セシリア・オルコットに後悔する間も与えない！

クラス代表決定戦当日

「で？剣道の練習ばっかでISの操縦を教えてもらえなかったって？」

「おう。筈はずっと剣道ばっかだったんだ」

「し、仕方ないだろう。お前があんなに腕が鈍っているとは思わなかったんだ。何よりお前のISは届いて無いじゃないか」

「うつ……」

そう言われると確かに一夏のISはまだ届かない。原作通り白式が来るらしいのだが、やはり遅れて届くらしい。

「お、織斑くん！織斑くん！来ました、織斑くんの専用IS！」

一夏視点移行…

山田先生の声が聞こえた後、後ろのハッチが開いた。

「ーそこに、『白』が、いた。」

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「はい！織斑くんの専用IS『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。氷川が戦っているうちにフォーマットとフィッティングをやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

「一夏、三十分稼ぐよ。それでフォーマットとフィッティングを済ませてオルコットさんの弱点を見極めるんだ」

「ああ！」

そして俺は純白のISに触れる。

「あれ……？」

試験の時に感じたあの電撃のような感覚はない。ただ、馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。——わかる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

そして俺は白式を装着した……

優人視点移行……

「へえ……武装は近接ブレード一つ」

「マジかよ！？」

「おい、氷川。アリーナを使う時間は限られている。さっさと行け」

「了解です」

そう言ってブレイヴハーツを起動する僕。

「優人…」

「何？ 箒」

「勝ってこい！」

「うん！」

そしてカタパルトから射出された。

「あら、逃げずに来ましたのね」

オルコットさんはまた腰に手を当てたポーズで待っていたようだ。

「君如きに逃げる僕じゃないよ」

そう言いながら腰の2丁拳銃を手に持つ。

「ぐっ…言ってくれますわね！」

ハイパーセンサーに『警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認』と映しだされる。

「それなら…」



『警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填』

「お別れですわね！」

キュインッ！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が向かってくる。が、僕はそれを軽々と避ける。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズが奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>で！」

「悪いけど、僕は踊りが苦手なんだよね！」

—夏視点移行—

「すげえ…これが…IS…」

モニターの向こうに映る優人とオルコットの試合は一見、オルコットの方が押してるように見える。

「一見、オルコットの方が押してるように見えるが、あれは完璧に氷川のリズムに乗せられている」

やっぱりか。千冬姉が言うんだ、間違いない。

「確かに：オルコットさんは攻撃を続けていますが、氷川くんは攻撃せずにしかも一撃も当たらずに避けていますね」

「織斑、さっさとフォーマットを終わらせろ」

「は、はい！」

優人視点移行：

おお、焦ってる焦ってる。僕の方から一切攻撃せずに避け続けて相手を焦らせ、相手の切り札を出させる。と、同時に一夏のフォーマットとフィッティングの時間を稼ぐ。…まあ、予備知識があるからブルーティアーズの切り札はわかっているんだが。そうこうしてるうちに二十分が経とうとしていた。

「ああん！ちょこまかとうっとおしいですね！」

「おや？もう終わりかい？」

「うるさいですわ！わかりました…フィナーレ閉幕と参りましょう」

そう言うとき、アンロックユニット非固定武装の四つのフィン・アーマーが一気に離れ、こちらに飛んでくる。

「へえ…」

そしてその四つのフィンの先端が光るとこちらにビームが飛んでくる。僕はそんなものを気にせず、イグニッションブーストオルコットに瞬時加速で突っ込んで行く。そして、オルコットの肩を掴みながら押して行く。

「なあ！？」

「この兵器は君が指示してる間は君自身が動けないみたいだね。逆の場合もそうだ」

「ぐっ…」

図星…というよりわかってたけど。そのまま僕はオルコットさんを地面に衝突させる。

「ぐう！」

僕はオルコットさんから離れ、上昇し、動かなくなっているブルーティアーズを四つすべて落とした。

「さあ、これで君を守るものは無くなった。そろそろ終わらせようか？」

「まだですわ！」

へえ…やっぱり勝つことに執着があるのか。僕はケルベロスショットを閉まって、エクスカリバーを抜く。そのまま何時の間にか上昇していたオルコットさんに突っ込んで行く。

「残念ですわね！」

オルコットの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。そこからミサイルが二機発射された。

「どうかな！」

僕は横一闪し、ミサイル二機を同時に切り裂く。そしてそのままオルコットを通り過ぎながら切り裂き、納刀した。

『試合終了。勝者、氷川優人』

ふう…終わった…つてえ！！？オルコットさんがISの展開解除されて落ち始めていた。僕はそれを急いで助けに行く。

（くっそお…間に合え…！！）

何とかオルコットさんを抱きとめた。だがしかし、その抱きとめた形がいけなかった。そう、お姫様抱っこだったのだ。周りから黄色い歓声があがる。

「あー、えっと…オルコットさん、大丈夫？」

「う、ん…あれ…何故わたくし…あなたに抱きとめ…！！」

途端に顔が赤くなるオルコットさん。

「あ、あの…！そろそろ降ろして下さいまし…」

「あ、ああごめん…」

そのままオルコットさんのピットに行き、オルコットさんを降ろす。

「あの！何故…わたくしを助けたの…？あなたをあんなにも軽蔑したのに…」

「うーん、誰かを助けるのに理由があるかな？それに目の前で誰かが死ぬのは後味悪いし」

しまった…FF9のジタンの物真似だ…

「そ、そうですか…ありがとうございます…」

それだけ聞くと僕は自分のピットに戻った。

「すごいな！優人！きっかり三十分だ！」

「そうじゃないでしょ！？フォーマットとフィッティングを終わらせたの？」

「フォーマットは終わったけど、フィッティングがまだ…」

「はぁ…もつぶっつけ本番でもにしくちやいけないじゃないか」

「ぶっつけ本番でものにしてやるさ！」

「そうか、僕の戦い見ていたならオルコットさんの弱点分かるよね？」

「おう！あの遠隔操作の武器は自分と同時に動かせないんだろ？」

「ご名答。なら勝ってこい！」

「おう！」

そのまま、一夏はピットから出て行った。

セシリア視点移行…

「あのお方…」

優人が居なくなっただ後、ブルーティアーズの予備パーツを呼び出し、次の試合の準備をするセシリアだったが、殆ど上の空である。

（氷川：優人…）

あの男子のことを思い出す。あの瞳に宿っている強い意志を。他者に媚びることのない眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった……）

名家に婿入りした父。母には引け目を感じていただろう。幼少の頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにいらなかった。

そして、ISが発表されてから父の態度は益々弱いものになった。

母は強い人だった。女尊男卑社会以前から女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めたセシリアにとって憧れの人だった。

だがしかし、そんな両親はもういない。三年前に事故で他界した。莫大な遺産を残して…

そしてその残った莫大な遺産を守る為にあらゆる勉強をし、その一環で受けたIS適性テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。両親の遺産を守る為、即断し、ブルーティアーズの稼働データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。そして出会ってしまった。氷川優人と。理想の、強い瞳をした男と。

気がつくとブルーティアーズの整備を終えていた。

「氷川…優人…」

思わずその人の名前を出してしまう。

「オルコットさん！オルコットさん！急いで下さい！もう時間が無いんです！」

そんな事を考えていると既に時間が押しまっているようだった。

「す、すみません！」

そのままブルーティアーズを装着し、ピットから出ていった。

その後、セシリアと一夏の試合は原作以上に善戦した一夏だったが、単一仕様能力の零落白夜の特性を理解せず、一夏の自爆に近い形で幕を閉じた。

第十一話 セシリア・オルコットに後悔する間も与えない！（後書き）

一夏対セシリア戦をキンクリして申し訳ない…

優人対セシリア戦ですらうまく書けてる自信がないのに…一夏対セシリア戦は自分なりに上手く書けなかったので消しました…

9 / 2 4 優人対セシリア戦を少し修正をくわえました。



## 第十二話 代表者は一夏で俺は宇宙に（前書き）

まよチキ、昨日で実質最終回でしたね。原作もクライマックスに近づいて来てるし…ISの最新刊、でないかな…

では、十二話をどうぞ。

## 第十二話 代表者は一夏で俺は宇宙に

一夏視点移行：

代表者決定戦から翌日、朝のSHR。あり得ないことが起きていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

女子達は盛り上がっているが俺は納得出来なかった。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「何故俺は昨日負けた上に優人と戦っていないのにクラス代表になっているんでしょうか？ていうか優人居ないし」

「それはー」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。様になってる…はもういいや。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。何せわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですね。それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

しまして？

「“一夏さん”か“優人さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ」

「へえ！つてじゃあ尚更俺と優人は戦わなくちゃならないんじゃない？」

「氷川くんなんですけど…今日から暫く休むから伝言をと…」

「伝言？暫く休む？」

「はい…なんでも急ぎの用があるらしく、今朝出て行きました…それで伝言なんですけど読めますね」

山田先生が紙を広げ、読み始める

「ゴホン『親友の一夏へ。僕は暫くここを離れる。だからクラス代表決定戦は君の不戦勝という事で頼む。というわけでクラス代表の件は任せた！コーチに織斑先生に任せておいたから心配無いよ。じゃ！P・S・問題です。この伝言が読まれている時、僕は何処にいるでしょう？答えは山田先生が知っています』…以上です」

「えーっと、山田先生…優人は何処に？」

「それが…そ、その…う、宇宙だそうです…」

『は？』

クラス全体がそんな声を出す。

『ええええええ！！？』

「み、みなさん、静かにしてください！」

それでも騒ぎが収まらず、最終的に千冬姉が止める形になった。

その後、セシリアと篤が喧嘩しかけたが、セシリアの一言でその場は収まった。何言っただろ？

ていうか、成り行きでクラス代表かよ……

優人視点移行:

僕が今いるのは宇宙：P Fのクアンタを起動し、量子ワープしてきた。目的地は月。神様の言うパーツ置き場を目指している。暫く飛び続けていると月が見えた。

月に近づくとかクアントのハイパーセンサーが何かに反応した。そして、月のある座標を示し始めた。僕がそこに向かうとクレーターでカモフラージュにしたハッチが開き、そこに入ると酸素があった。そこはまるで月のムーンレイスのような場所だった。一旦緑の多い場所で休憩をする。食糧は一応一ヶ月分。IS装備状態でも食べられるようにゼリー状のものもある。休憩を終え、暫く歩き続けるとある建物の中に巨大な端末と巨大なカプセルがあった。その端末を起動すると、僕の求めるパーツすべてがあつた。でも、流石にデンプラー・シリンダーやデイス・レヴとかは無かつたけど……

とりあえず、僕はゾル・オリハルコニウムとTEエンジン、S?Iパーツと言うものを取り出した。そうするとカプセルの中にパーツが出来上がった。どうやらTEエンジンとセットで取り出すよう推

奨られていたS？Iというのはサーベラス・イグナイトのパーツのようだ。とりあえず僕は数日掛けてゾル・オリハルコニウム製のフアングスラッシャーを作り上げた。そろそろIS学園に提出した休暇届の期限のはず…僕はTEエンジンとサーベラス・イグナイトのパーツを量子変換させておいた。と同時にブレイヴハーツに新しいフアングスラッシャーをインストールした。

あ、そういや鳳鈴音が転校してくるんだっけ？で、次に…あれ？誰がくるんだ？確か…金髪の…あ、あれ？フランスで会った子…そうだ！シャルロットだ…で、後…銀髪の……思い出せない…原作の知識が段々抜けていつてる…まさか、これが神様の言っていたバグ…？今は深く考えない方がいいか…

僕はクアンタを起動し、量子ワープをした。

目の前にはIS学園。だが、様子がおかしい…第二アリーナだ！僕はクアンタのままその場へ向かった。

アリーナの真上に着くと一夏と鈴が無人ISと戦っていた。ちくしように…なんで忘れてたんだ…まあ、いいか、束さんの作ったやつだし。だけど、友達は見捨てないさ！

僕はGNソード？をライフルモードにして、高濃度圧縮粒子のビームを遮断シールドへ向けて放った。

一夏視点移行…

くっそ！何なんだこいつ！いきなり試合の邪魔してきたと思ったら攻撃してきやがって…！上空からまた粒子ビーム…？

「鈴！気を付けろ！また上から何かくる！」

「ちよっ！嘘お！？」

だが、しかしその粒子ビームは俺と鈴を射抜く事はなく謎のISに降り注いだ。が、謎のISはそれを回避した。

そして、遮断シールドの壊れた部分からもう一機の全身装甲のISフルスキンが入ってきた。その機体は青と白を基調とし、左肩には大きな盾がある。そして、緑色の粒子を放出していた。

「新手！？」

だが、俺達の盾になるように立っている。

「いや、あれは…多分、味方だ！」

突然、あのISから二人に通信が来た。

「そのIS！下がれ！後は俺がやる！」

男の声だけど、優人じゃ…ない！？

千冬視点移行…

（何だあのISは…？）

突然、謎のISが学園に侵入したと思ったらまた新たなISが乱入してきたのだ。驚くのは無理もない。

「お、織斑先生!!」

「どうした？」

山田先生が妙に慌てている。確かに慌てる事態だが…

「あのもう一機のISが入ってきてから、センサー、及びその他の機械が障害を起こしています!」

「何だと!？」

…真耶の言うとおりだ…センサーにはあのISだけ反応していない  
上センサーが機能していないし、モニターには激しいノイズが入っ  
ている…どう言う事だ…

優人視点移行…

ふふ…一夏が驚いてる…さてと、いっちょやりますか!

僕はGNソード?のライフルで無人ISを牽制する。

そのままソードビットを展開。

「!」

無人ISはビームでソードビットと僕を落とそうとするけど、当た  
りはしない。そのまま近づいて行き、GNソード?をライフルモー  
ドからソードモードに戻して斬りつける。そのままソードビットを  
GNソード?と合体させてバスターソードで無人ISを斬りつける  
がギリギリで躲された。が、僕は手を休めずクアンタの単一仕様能  
イ

力、トランザムを発動。

無人ISが止まったところにそのままライザーソードを叩き込む。  
決着はついた。トランザムを解除して着陸した。すると、教員組のISに取り囲まれた。

「そのIS。動くな」

僕は黙って従う。

「ISを解除しろ」

解除すると教員組とその場に居た一夏が驚いていた。

「ゆ、優人!？」

「やあ、帰ってきたよ」

その後、事情聴取をされたが、少しで済んだ。あの証明証のお陰でね。

その後、千冬さんに連れられ、地下へと連れていかれた。

そこは薄暗く、僕が粉々にした無人ISがあつた。

「よくまあ、こんなになるまでやってくれたものだ…」

「す、すみません…」

「中に人がいたらどうするつもりだったんだ？」



「それは中に人が居ないと確信していましたから」

「何？」

「僕が使っていたあのIS、クアンタは人々の意識を拡張させる機能があるんです。その機能を低出力ながら使用してみたらあのISからは人の意思が感じ取られなかったので無人だと確信していました」

クアンタシステム積んでおいてよかった…実際、使っていないが…

「ほう…」

「織斑先生、あのISの解析結果が出ました」

「どうだった？」

「氷川くんの言うとおり無人機でした。機能中枢はもはや影も形もありませんでした…」

「コアは？」

「破片から解析したんですが、登録されていないコアでした」

「そうか」

「何か、心当たりが？」

「いや、ない。今はまだーな」

その時の織斑先生の顔は何か思い詰めたような顔だった。

第十二話 代表者は一夏で俺は宇宙に（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

**閑話 優人の趣味、洗脳される一夏（前書き）**

一部、本編と後に関係します。

完璧に作者の趣味回です。

あ、キャラ崩壊注意です。

正直な話、最後の部分をやりたかっただけかもしれない…

## 閑話 優人の趣味、洗脳される一夏

「ククク…遂に…遂に届いた！某密林からまよチキ、はがないのラノベとけいおん！とその他諸々のBD全巻が！」

僕は一人部屋で絶叫していた。折角の日曜日だと言うのに外にも出ず…

コンコン…

「誰だあ！？」

「うお！優人…だよな…？一夏だ」

「何だ…一夏か…入れ」

「お邪魔しまー…って！？何だこの段ボールの山！」

「これは、通販で頼んだものだ！」

「へえ…って、アニメばかりじゃんか」

「で？用件は？」

「そうだった。あのクラス対抗戦の時に使ってたIS何なのか聞きたくてな」

「ああ、あれか。あれは秘密だ」

「何だよ…」

「そつだ、お前は今日何か予定はあるか？」

「ん？無いが？」

「ならば、僕とけいおん！のBDを制覇しようではないか！異論は認めん！！」

「はあ…わかったよ…お前がそれ言つと絶対だかな…」

そう、一夏達と一緒にいた時には僕が異論は認めんというと強制的に一夏を拘束していたのだ。

では早速、テレビにPSS3を接続してと…

「第一期からだからな！」

現時刻、10時である。

途中、昼食を取り、第一期視聴終了。

現時刻、18時。

「うわああああ！零ちゃあああん！」

「そうか…一夏は零スキーになったのか…」

「零だけじゃなくてみんな好きだけど…今は…零が一番気になるんだ…」

「フ…流石ぞだな…だが、僕は唯が一番だあ!!」

「優人!早く二期を!!」

「ああ、だが、その前に…これを忘れるな!」

「こ、これは!?!」

「そう!ライブBD!レッツゴー!だ!!」

「うおおおお!!行きたかったああ!!」

「だが、今は夕食の時間だ!夕食を取ってからにしよう。だが、一夏、ライブBDを見る上で注意すべきことは?」

「うーん、サイリウムの準備か?」

「それは用意済みだ。ちゃんと全員分。だが、それ以上に大事な事がある」

「そうか、わかったぞ!予習だ!!」

「その通り!!ここにウォークマンがある。この中に一期のキャラクターを含む全曲が入っている。食事中、これを聴きながら食べるんだ!」

「行儀が悪いが…やるしかないな…」

「ああ、では行くぞ!」

その後、食堂でイヤホンを着けながら僕と一夏は食事を取った。途中、一夏が鈴に呼び止められたが何とか説得し、部屋に戻れた。

「うおおおお！ムギiiiiiii！」

「ああ…ムギのキャラソンは最高だ…」

「りっちやあああん！！！」

「流石元気いっぱいみんなのアイドルりっちゃんやで…」

視聴終了…

「ああ…こんな事なら弾も居りゃよかったのにな…」

「弾？誰なのその人」

「ん？ああ、俺が中学ん時の知り合い。そいつもけいおんが好きでさ、よくけいおん見ろって言われてたんだが、見てなかった…クソッ不覚だぜ…」

「過ちを気に病むことはない。ただ認めて、次の糧とすればいい。それが大人の特権だ」

「そのセリフは？」

「ガンダムUCのフル・フロンタルのセリフだ。丁度いい、流石にもうけいおんの二期を見るには時間が時間だから、ガンダムUCを見よう」



「でも、それって前の作品見ておいたほうが楽しめるってお前が…」

「見ていなくても楽しめるのがユニコーンだ、今のところ part  
3 まで出てるからな」

「ああ…」

視聴開始…

『父さん…母さん、ごめん…俺は…行くよ…!!』

「ゆ、ユニコーンが動く…」

「ここから鳥肌ものだ…」

『ここから…ここから出ていけー!!』

「バナージかけええええ！」

「ああ…」

『落とせるっ!』

「バナージ、危ない! って何だこれ!？」

「NT-D、ニュータイプドライブって言うんだけど、実際はニュータイプデストロイヤーって言ってニュータイプだけを駆逐するシステムさ」

「へえ…で、そのニュータイプはこのマリィダなのか？」

「いや、マリィダさんは強化人間でバナージがニュータイプ」

「そうなのか…」

「さて、part 2だ」

視聴開始…

『強制解除！！』

「ここかつこいいな！」

「だろ？」

『すごい…』

「何だこれ…すごい威力じゃないか！」

「ビームマグナム、従来のビームライフル四発分だったかな？そんなぐらいの威力が一発に込められているんだ」

「へえ…」

『今度は…ここが戦場になるのか…？』

「うはあああ！やべえええ！続き気になる！あ、そういや、思ったんだけどセシリアのビットとあの四枚羽のクシャトリアだっけ？あれのファンネル似てるよな」

「そうだな。似てるといえば一夏の声とバナージの声似てるよな」

まあ中の人と一緒にただけだけど。

「そうか？じゃあモノマネしてみる。リクエストは？」

「そうだな…フル・フロンタル戦の鏖迫り合いのシーンのモノマネで。僕がこの変声機でフル・フロンタルをやるよ」

「わかった」

「じゃあ行くよ？んん、『また敵となるか！ガンダム！』」

「んん、『下がれよ！下がってくれないとオードリーが！』」

「やっぱり似てる！」

「言われてみるとそうだな…そうか…俺とバナージは一緒なのか…」  
すると突然ドアが開いた。

「お前らうるさいぞ、就寝時間はとくにすぎているんだ」

「げえ、千冬姉！」

「織斑先生と呼べ馬鹿者…む？ガンダムUCだと？」

「え、千冬…じゃなくて織斑先生も知ってるんですか？」

「ああ、まあな山田先生と一緒に一度見たことがある」

「へ？何で？」

「とあることでチケットを買ってな、それで見たんだ」

「チケット？優人、何でチケットなんだ？」

「それは劇場で先行上映してたりするからね、でもチケットがあるのは知らなかったな」

「へえ…あ、そっぴや織斑先生の声ってミヒロさんの声に似てない！？」

「言われてみれば…」

「なっ！お前達までそんな事を…」

「お前『達』？山田先生にも言われたんですか？」

「それ以上言うな！ええい、今回の件は不問にしてやるから、さっさと寝ろ！」

バタンッ

何故か千冬さんは勢いよくドアを閉めて出ていった。

「とりあえず、注意されたし今日はお開きだな」

「うん、そうしょうか」

「じゃ、また明日な優人！」

「うん、また明日」

次の日から僕と一夏はけいおんとユニコーンの話で持ちきりだった。それから一週間ぐらいして、一夏が箒の声が滲に似てるって言ってこんな事件が…

「なあ、箒。『痛い話はダメなんだ』って弱弱しい声で言ってみてくれないか？」

「…何故だ？」

「頼む！箒にしか頼めないんだ！」

「そ、そこまで言うなら…」

顔赤くしてる…

「んん…『い、痛い話はダメなんだ』」

「うおおおお！箒イイイイ！」ガバツ！

うお！箒に抱きついた！

「な、な、な、何をする一夏！！」ドンッ！

あ、突き飛ばされた。そして机の角に頭が…

「お、俺の生涯…一片の悔い無し…」ガクッ…

「「一夏アアアア！」」

その時、クラス中騒然とした。

一夏…いくらなんでも悔い無しはねえよ…

その後、保健室に運ばれた一夏だったが、一夏の命に別状はなかったが、その時の記憶が吹き飛んでた。

**閑話 優人の趣味、洗脳される一夏（後書き）**

本編の次の回は遂にあの二人が登場です。

第十三話 冷静に考えなくても転校生2人が同じクラスっておかしいよね(前書

第十三話です。

更新遅れてすみません…



### 第十三話 冷静に考えなくても転校生2人が同じクラスっておかしいよね

そつ、あれはクラス対抗戦から数日経ったある日の夜のことだった  
…隣からドタバタと音がした後、箒の愛の告白が聞こえたのだ。

「ら、来月行われる学年別トーナメントだが、わ、私が優勝したら  
つ、付き合ってもらおう!」

よく言った! 箒! でもあの朴念仁の一夏だからな…だめかな…

取り敢えず今日は作業をやめて寝るか…え? なんの作業かって? そ  
りゃ、P Fの専用パッケージ、サーベラス・イグナイトの組み立て  
だよ。でも、あんまりうまく行かないんだよな…今度どこかの研究  
室借りるか?

次の日。

「んんー! 今日もいい朝だ」

「お、優人」

朝食を取るため食堂に向かう途中、声を掛けられる。ふりかえると  
そこにいたのは一夏だった。

「お、一夏。おはよ」

「ああ、おはよう」

「ところで昨日何かあったの? ドタバタしてたけど」

「ん？まあ、色々あってな簾と部屋が別れたんだ」

「へえ〜でも何で？」

「何でも今度来る転校生が男らしい。で、山田先生が俺に気を配ってその転校生と俺が相部屋になるそうなんだ」

「成る程。この時期に転校生って事は恐らく代表候補生だな」

「何でだ？」

「いくらなんでも不自然過ぎる時期だ。恐らく国としては特異ケースの僕達と接触をしてISのデータを取るためだろう」

「成る程な…」

「だから、あんまり一夏や僕のISの事をペラペラとしゃべらないように」

「おう」

その後、僕達は朝食を取り、教室に向かうとクラスが騒々しかった。

「その話本当！？」

「あ、鈴の声だ。あいつなにやってんだ？」

「さあ？」

因みに僕は鈴とはクラス対抗戦の時位にしか話したことがない。

「よお！みんな何の話してるんだ？」

「あ、織斑ちゃんと氷川くんあの噂って本…むぐう！？」

む？噂だと？

「い、いや何でもないのよ。あははは……」

「ーバカ！秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人達だし……」

「ねえ、噂って何？」

僕が一夏より早く質問する。

「う、うん！？なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も365日って言うよね！」

「な、なにいつてるのよ…ヨは！四十九日だってば！」

ソレチガーウ……

「何か隠してないか？」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ!？」

謎の連携を決めてから即撤退。この間わずかに二秒。しかも、何時の間にか鈴がいなくなっている。さすがの僕達も状況が全く飲み込めずにぽかんとするしかない。

「と、取り敢えず席に着こうか、一夏」

「そ、そうだな」

それぞれの席に荷物を置いて僕は一夏の机のところに行く。

「あ、今日の訓練なんだけど僕も試したい事があるから第六アリーナに行ってくれる?そこで回避訓練も行うから」

僕が宇宙から帰って来てからは一夏の訓練を筈、セシリア、僕、鈴の順でローテーションを組んで教えている。おかげで負担が減って助かるばかりだ。正直、セシリアに一夏の練習に付き合ってとお願いした時、二つ返事で了承を貰えたのは驚いた。まあ、僕が彼女の訓練に付き合うという条件付きだが…どういうことだろう…一夏が好きだから了承したと思ったのだが…どうやらそうではないみたいだ。もしかして僕が開発者だから訓練を見てもらえば強くなれると踏んだのか?それとも、まさかとは思うが僕に好意を抱いているのか?いや、ないな。勘違いにも程がある。

「おう、いいぜ。でも、回避訓練って前みたいにお前が俺を追い掛けて撃ってくるのを俺が逃げながら避ける訓練か？」

「んー、この前は結構反応出来てたからね、今回は一对多を想定した回避訓練だよ」

「へえー」

キンコンカーンコン

一時間目の予鈴だ。僕は急いで席に着く。

「みなさん、おはようございます。今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

転校生か…シャルロットと…ドイツの人がだったな。やばい、ここから先の原作知識が消えてる。他の前世での記憶はあるのに。

「え……」

「『えええええっ！？』『』『』」

いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。それもそうだがこの三度の飯より噂好きの十代乙女、その情報網を掻い潜っていきなり転校生が現れたんだから驚きもする。しかもふたり。

（普通分散させるところだけど、特異ケースの僕達に接触するためにこのクラスに無理矢理でも来たか）

そんな推理をしていると教室のドアが開いて、一番起きて欲しくない事態が起きた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

それもそうだ。

だって、そのうちのひとりがー男子だったんだから。

しかも、僕は他の意味で哑然していた。その男子に見覚えがあったからだ。それは、フランスに居た時に会ったあのシャルロットという女の子にとっても似ていた。僕のあの時偶然会った子とこんな形で再会する…いや、まだあのシャルロットと決まった訳じゃない。多分大丈夫だ…

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

あつけをとられたのは僕と一夏以外のクラス全員だった。

「お、男……？」

誰かがつぶやく。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を  
ー」

僕はこの状況から推理して数秒後にソニックウェーブがくると考え、耳栓を差し込んで一夏にアイコンタクトを送るがボーッとしてこちらのアイコンタクトに気付かなかった。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああーっ！」

一夏がめちゃくちゃ辛そうな顔をしている。

「……！」

クラス中の女子がシャルルの感想を述べているようだが、何を言っているのか耳栓を付けている僕には全く聞こえない。

織斑先生の行動から騒ぎは収まったとわかり、耳栓を外す。入学初日の二の舞はノーセンキューだからね。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

そう、もう一人の転校生の自己紹介は終わっていないのだ。まあ、忘れることの出来るような外見じゃないが。

輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを、腰近くまで長くおろしている。きれいではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという印象のそれ。そして左目に眼帯。医療用のもではなく、本物…と言うより戦争映画とかの大佐がしていそうな黒眼帯。そして開いている方の右目は赤色を宿しているが、その温度は限りなくゼロに近い。

恐らく雰囲気からして軍人だろう。

「……………」

当の本人は未だに口を開かずに、腕組みをした状態で教室の女子達を下らなそうに見ている。しかしそれもわずかのことで、今はもう視線をある一点……千冬さんにだけ向けていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんを教官と呼ぶということは千冬さんがドイツに行った際の教え子だったということか。だが、千冬さんは面倒くさそうな顔をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴつと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋をのばして、自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

クラスメイトたちの沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた貝のように口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

空気が凍てついたぞ。あ、一夏と目があった。



「！貴様がー」

ラウラが一夏に近づいて行く。僕はそれが嫌な感じがして木刀を手に持ち帯刀の構えを取りながらラウラにすぐに近寄って一夏を殴ろうとするところで僕は木刀を抜刀し、ラウラの平手を木刀で止める。…木刀はまずかったか？でも、おかげで一夏に張り手が届く事はなく、ラウラはこちらを睨んできた。

「何をする……貴様……」

「親友を殴られるところは見ていて気持ち良くないからね。なんで一夏を殴ろうとするんだ？」

僕はラウラの質問に対し怒りを込めた声で言い返す。ラウラも臨戦体制に入る。が、そこに織斑先生が介入してくる。

「お前ら、そこまでにしておけ。SHRが終わってしまう」

僕は木刀を左手に持つ。ラウラも手を引いた。そしてラウラは一夏の方を見てこう言った。

「私は認めない。貴様があの人弟であるなど、認めるものか」

第十三話 冷静に考えなくても転校生2人が同じクラスっておかしいよね（後書

サバーニヤ起動テストフラグを建てました。

分かりにくいですかね…？

**第十四話 お昼ご飯は戦争です。（前書き）**

第十四話です。

最近の悩み……評価上がらない。

どうか、この駄文を直せば評価上がるのか…？

## 第十四話 お昼ご飯は戦争です。

—夏視点移行—

優人とラウラが睨み合いをした後、クラスが沈黙していた。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でES模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬姉が行動を促す。ラウラの行動にはかなり腑に落ちないというか腹が立っているんだがそうも言ってられない。

なにせ、このままクラスにしていると女子と一緒に着替えなくてはならなくなる。それは困る。非常に困る。

なので俺は急いでクラスから移動しなくてはいけないのだ。ええと、確か今日は第二アリーナ更衣室が空いているはずだ。

「おい織斑。氷川と一緒にデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろうっ」

やっぱりそうなるよな。

「君が織斑君？初めまして。僕はー」

「あー、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。優人！ってあれ、いない？」

「氷川君なら先に行ったよ？」

近くの子が教えてくれる。あいつ…押しつけやがった…  
俺はシャルルの手を取るとそのまま教室を出た。

「ありがと。まあ、とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

なんだ？さっきまでとは違って妙に落ち着かなそうだな。

「トイレか？」

「トイレ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

とりあえず階段を下って一階へ。速度を落としてはだめだ。なぜなら――

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

そう、HRが終わったのだ。早速各学年各クラスから情報先取のための尖兵が駆けだしてきている。波にのまれたら最後、質問攻めのあげく授業に遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っているのだ。絶対にそうなるわけにはいかん。…優人は俺を囫に逃げたな……

「こっちだ！！」

俺とシャルルは駆け出した……

優人視点移行：

僕はHRの終わりの合図と共に教室を出て第二アリーナ更衣室へと走り出した。

あの転校生、シャルルと話すのが気まづく感じたからだ。

僕はいつも通り廊下の窓から外へ。そのまま第二アリーナを目指す。走り続けるとすぐに更衣室に着いた。

ロッカーを開け、制服を脱ぎ、ロッカーの中へ。ISスーツは制服の下に着たままのため、これで終わりだ。  
着替え終わるとまた走り出す。

第二グラウンドに着くと山田先生と織斑先生がラファール・リヴアイヴと打鉄を出していた。

「あれ、氷川君？織斑君とデュノア君は？」

「今頃ふたりは女子に囲まれてるか？」

「ほう、お前はそれを見捨てたのか？」

「いえ？僕は囲まれる前に移動しただけですよ」

「はあ……デュノアの面倒はお前に見させたほうがよかったな……」

千冬さんが半ば呆れてる。それもそうか。一夏じゃ、あれを抜け出すのに時間がかかるし。

「あ、山田先生。手伝います」

「ありがとうございます。ではこのラファール・リヴァイヴを運んで下さい」

「はいはい」

そう言つて僕はIS運び専用カートを軽々と押していく。

「すごいですね…氷川君…」

「へ？何がです？」

「成人男性でもこのカートを生身で軽々と押していく人はそうそういませんよ…大抵女性は私みたくISを展開して運びますし…」

「あははは…これぐらいでしたら僕は毎日運んでた時期があつたので…」

アスベルさんとの特訓の時、これ以上の重さのものを持ちながら毎日10キロ走っていたんだから、自然と力がつくものだ。

手伝いを終える頃には、一夏とシャルル以外の人が集まっていた。授業開始から数分後にふたりが来て、一夏だけ叩かれた。

その後、一夏と鈴とセシリアが何かを話しているところに千冬さんが来て三人を叩いていた。

僕？僕はずっとPFのデータを弄ってたよ。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同演習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っていた。

「くうつ……。何かというすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

千冬さんに叩かれたセシリアと鈴はちよつと涙目で頭を押さえていた。

あ、一夏蹴られた。

「なんとなく考えているかわかるわよ……」

成る程、失礼な事を考えていたのを読心術で見破ったのか。すごいな鈴は。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちよつと活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰<sup>ファン</sup>！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!?!」

THE 飛び火だね。可哀想に。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

責任はすべて一夏かよ…



「お前ら少しはやる気を出せーアイツらにいいところを見せられるぞ？」

千冬さん、耳元でなにか囁いたぞ？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

な、なんだ、なんだ？いきなりやる気出したぞ？何を言ったんだろ  
うか？

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手はー」

キイイン……。

この音は…まさか！上を見上げると山田先生が落下して来ていた。

「ああああーっ！ど、どいてくださいーっ！」

気が付くと僕と一夏以外その場から離れていた。僕はとりあえず衝撃に備え、山田先生を止めるためブレイヴハーツを起動。更にシヨックアブソーバーを最大出力で起動して僕と一夏は山田先生と激突する。一夏もギリギリで白式を起動したみたいだ。それでも僕達は

地面に転がる形になってしまった。

「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事――」

一夏の動きがそこで止まる。あれ？どうしたんだ？僕も起き上がろうとするが左手にあるマシュマロのような柔らかいものに気付き、動きが固まる。

「あ……」

思わず声を上げてしまう……。だが、一夏が自分の右手にあるものに気づかずに手を動かし続ける。

「あ、あのう……織斑君に氷川君……ひゃんっ！」

やめて！山田先生！変な声を出さないで！

とか言いつつこのマシュマロに触れていたいという男の性か手を動かせない……。だが、このままでは一夏と同罪だ！それだけは嫌だ……

「そ、その、ですね。困ります……。こんな場所で……。をいえ！場所だけじゃなくてですね！私とお二人は仮にも教師と生徒ですね！……ああでも、このまま行けば――」

「うわあああ！――ご、ごめんなさいイイイイ！――それと山田先生は暴走しないで下さいイイイイ――」

僕は慌てて離れる。だが、一夏は未だ動かず。だが、僕達に向けての殺気を感じ、咄嗟に身を低くする。一夏は顔を引いた。すると、僕の頭の上と一夏の顔があった所を一筋の閃光が走る。

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

顔は笑ってるけど、目のハイライトが消えてる！これはマズイ！

後ろからはガシーンと何かが連結する音が…後ろを向くと一夏と僕へ向け、連結した双天牙月が投擲される。僕と一夏は間一髪で躲したが、一夏は仰向けに倒れる。僕はブレイヴハーツのケルベロスシヨットで戻ってくる双天牙月を撃ち落とそうとするが、さっきの激突で何処かに飛んでいつてしまったらしい。

…量子変換させといった方がよかったな…そんな後悔をしながらウィングセイバーの射出準備にとりかかるが…  
ドンッ！ドンッ！

短く二発、火薬銃の音が響く。弾丸は的確に双天牙月の両端を叩き、その軌道を変える。

キンッキンツと地面に薬莢が跳ねる音がすると山田先生がアサルトライフルを構えていた。

「……………」

山田先生のいつもと違う姿を見て驚いたのは僕と一夏だけでなく、セシリアと鈴はもちろん、他の女子も啞然としていた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

極度の上がり症なんだっけ？ほ、どうやら原作知識の中にも抜けてないものはあるようだ。どうやら、重要な出来事とこれから現

れる人達のことを忘れていたようだ。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめろ」

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、という言葉が気に障ったのかセシリアと鈴は再びその瞳に闘志をたぎらせた。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。それを一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

口調はいつもの山田先生だったが、目は獲物を狩るものの目だ。セシリア鈴組は先制攻撃をするが、簡単に回避される。

「さて、今の間に……。そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせろ」

「あつ、はい」

シャルルがリヴァイヴの説明を始めると同時に僕もPFのコンソールを起動し、調整を始める。

しばらくするとセシリアと鈴が同時に落とされてきた。

何やらいがみ合うふたりだが、興味は無いのでコンソールを再度弄り始める。だが、授業が再開される合図を千冬さんがする。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デユノア、氷川、ボーデヴィツヒ、<sup>ファン</sup>凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？わかれる」

僕はコンソールを閉じると、女子が一気に詰め寄ってくる。一夏とシャルルもそうだった。でも、そんなことしたら…

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンドを百周させるからな！」

やっぱりね。とりあえず番号順に女の子達が来る。各班はおしゃべりをする女子ばかりだったが、ボーデヴィツヒの班だけ静かだった。その後、授業は一夏がお姫様抱っこをしたことによる騒ぎ以外何も起こらなかった。まあ、僕の班でも懇願してきたけど、千冬さんが止めにきてくれた。さすが千冬さん。

しばらく指導して授業が終わり、僕はISをさつさと片付けて更衣室に向かった。制服を着て、更衣室を出ると一夏とシャルルが居た。

「げ……」

「『げ』ってなんだよ。『げ』って？」

……仕方ない、腹を括るか。

「いや、何でもない。あ、自己紹介がまだだったね、シャルロット」

「えっ？」

……しまった、間違えた。シャルルが困った顔してる……

「優人、何言ってるんだ？シャルロットじゃなくてシャルルだぞ？」

「あ、ああ、そうだった。知り合いにシャルロットって子がいたから。その子と名前を間違えたよ。ごめん。改めて、僕は氷川優人。優人でいいよ」

「う、うん。僕はシャルル・デュノア。よろしく、優人」

「あ、そうだ。優人、俺とシャルルはこれから飯を一緒に食うんだけど、お前もどうだ？」

「そうだね、僕も同席するよ。今日はお弁当だけど」

「お、ちょうどいいな。屋上で食う気だったから。先に弁当持って屋上行っててくれ。そこに待ってる奴がいるから」

「待ってる奴？」

「行けばわかるさ、じゃ後で」

「ああ、後で。一夏、シャルル」

そんなことで僕は弁当を持って屋上へ行くと箒が居た。

「……朴念仁め。ごめん、箒」

「い、いや、いいんだ。一夏だからな……」

「でも、僕が来なくてもシャルルが来たんだけど……」

「一夏……」

箒からドス黒いオーラが見えた気がした。

それから少し経つと一夏、シャルル、セシリア、鈴が来た。何か増えてるし……

「……どういうことだ」

「ん？ 天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてだな……！」

はあ……ここまで来ると病気だろ……

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

ちなみに箒は弁当だが、一夏の分も作ってきたらしい。幼馴染って素晴らしい。そして、一夏。もげる。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

なんだか箒と鈴が睨み合うのを見てそんなことをシャルルが言う。

「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。わからないことがあったらなんでも聞いてくれ。――IIS以外で」

「一夏、好い加減僕の教えた内容覚えてよ」

「うつゝ…多すぎるんだよ、覚えることが。お前とセシリアや鈴は入学前から予習してるからわかるだけだろ」

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習をはじめますわね」

そんな面倒なことやってるんだ。知らなかった。まあ、僕は神様からもらったチートのおかげですぐ覚えられるけど。

「ありがとう。一夏って優しいね」

シャルルが一夏にお礼を告げるとおかしな反応をした。

「い、いや、まあ、これからルームメイトになるんだし………ついでだよ、ついで」

「一夏さん、部屋割りがもう決まったのかしら？」



「ああ、昨日山田先生が教えてくれた」

「でも、なんで優人の時は一緒じゃなかったの？」

素朴な疑問に鈴が言う。

「あの時は部屋数が足りなくて一人と女子と同じ部屋になるかっていう選択肢になったただだよ。部屋を増設した後も僕は一人部屋がいつて山田先生に言ったら一夏の部屋にシャルルが行くことになったわけ」

「ふーん……」

続いて一夏を冷めた目で見始める。おそらく、さっきのおかしな反応のことだろう。

「なあに照れてんのよ……」

「べ、別に照れてねえぞ」

「…まあ、いいわ。はいこれあんたの分」

「お、酢豚だ！」

「そ、あんた食べたいって言ってたでしょ？」

一夏はいいな…もげろ。

「あ、あの、優人さん！わたくし、今朝はたまたま偶然何の因果か

早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

バスケットを開くセシリア。そこにはサンドイッチが綺麗に並んでいる。前世ではこういう体験がなかっただけに新鮮だ。そして、我が世の春が来たー！って、俺はこの世界で彼女を作るために来たわけじゃないだろ…

「お、ありがとう。いただくよ」

「いえ……では、どいづれ……」

僕は一個サンドイッチを取る。  
ぱくり。

「!?!?!?!?」

何だこれ… B L T サンドのはずなのにめちやくちや甘い…あ、そういえばセシリアは料理が超級下手だったな…

「どうかしら?」

「セシリア……味見た？」

「いえ、してませんか？」

「セシリア、僕がマンツーマンで料理を教えるからそのサンドイッチを食べてみて」

そう言って僕はバスケットから新しいサンドイッチを取り出し、セ

シリアに突き出す。

「わ、わたくしは本来ならばそのようなテーブルマナーを損ねるような行為は良しとはいいたませんが、今日は平日でここは日本、<sup>ゴイング・ユウ</sup>郷に入っては郷に従え」ですわね」

そして、突き出された新しいサンドイッチをセシリアが一口…ぱくり。

「うつ…!？」

どうやら、BLTサンドじゃないBLTサンドの味に驚いたようだ。

「あ、今一夏と優人がやったのつてもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？仲睦まじいね」

どうやら隣でも一夏と篤が同じようなことをしたらしい。おかげで鈴が騒いでる。

「…優人さん。ごめんなさい…こんなものを食べさせてしまって…」

「あ、いや、その…料理っていうのは最初からうまいものじゃないからさ、僕と練習して上手くなるっ?」

「そ、そうですね…で、ではこのサンドイッチはわたくしが責任持ってすべて食べますわ」

「いや、せっかく作ってきて貰ったんだ。僕が全部食べるよ」

「えっ…でも…」

「セシリアは僕のお弁当を食べて。まだ、食べてないから」

意を決して…僕はサンドイッチを一気に食べる。確実にひとつずつ…めちやくちや甘い…でもこれに耐えなきゃ男じゃない…

「うっぷ…食べきった…ぐふう…」バタッ…

『優人！？（さん！？）』

僕はあまりの衝撃的な味に耐えられず気絶してしまった…結局、目が覚めたのは放課後になる直前であった。

**第十四話 お昼ご飯は戦争です。(後書き)**

ご意見感想お待ちしております。

## 第十五話 やっぱりサーバーニヤの乱れ打ちはかつこいいね（前書き）

更新遅れてすみません。最近何かと忙しかったもので…

お気に入り100件登録突破&ユニークアクセス1万越え、ありがとうございます！これからも日々精進して行きたいと思います。

こんな作品でもここまでくるのはISやガンダム、スパロボが偉大だからですね。いつかは作品の力だけでなく、自分の力を含めて評価されるようになりたいです。

では十五話をどうぞ

## 第十五話 やっぱりサバーニヤの乱れ打ちはかつこいいね

結局、セシリアの料理で倒れた後は体調が不完全でサバーニヤの起動テストは土曜日に持ち越しとした。

そして、転校生ふたりが来てから五日が経っていた。すなわち起動テスト当日。現在、テストを行うために全開放されているアリーナにいる。だが、先にシャルルと一夏が模擬戦を行い、一夏が負けた。「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「う…優人と同じことを…一応わかってるつもりだったのに…」

やっぱりねー、一夏に何度も言ってるけど聞いてくれないんだよ。…この事は口にしないけど。

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さつき僕と戦ったときも二、三回位しか間合いを詰められなかったよね？」

「うっ…確かに。『イグニッション・ブースト 瞬時加速』も読まれてたしな…」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か…そこは優人にも言われたことないな」

「僕は一夏と模擬戦したことないし」

「そついやそつだな」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」

「そこら辺は優人が瞬時加速の注意を聞いた時に教えて貰ったぞ。しかし、シャルルは優人と同じ位……いや、優人以上に教え方が上手いな」

確かにシャルルは教え方が上手いな。一夏の言う通りかもしれない。僕は人に説明するのが苦手だし。

「ふん、私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

「少なくとも、シャルルの教え方は擬音ばかりの教え方や感覚だけで教えようとする人や細か過ぎる説明の人達よりも上手いと思うけど？」

「……誰の事（だ）（ですか）（よ）？」「」

……自覚がないから余計にたちが悪い。

因みにここは第三アリーナ。僕と箒とセシリアと鈴はピットに。一夏とシャルルはアリーナにいる。……僕は申請を出して貸し切っている。……本当は第六アリーナが良かった



ただ。それでも、男子三人がいるせいか、観客席は満席になっている。

「一夏の『白式』<sup>イコライザ</sup>って後付武装が無いんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域<sup>パススロット</sup>が空いてないらしい。だから量子変換<sup>インストール</sup>は無理だって言われた。優人は多分、ワンオフ・アビリティーに容量を使ってるって言ってたぞ？」

「開発者が言うんだから間違いないだろうね。じゃあ次は射撃武器の練習を試みようか。はい、これ」

そう言っで一夏に渡したのは、さっきまでシャルルが使っていた五口径アサルトライフル《ヴェント》だった。って、あれ？僕、シャルルに開発者って言ってないよな？クラスの人から聞いたのか？

「え？他のやつ<sup>アンロック</sup>の装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。ーうん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

構えを取る一夏。ぎこちないな……

「か、構えはこうでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

シャルルが一夏の後ろに回り構えを修正する。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」

「銃器を使うときのやつだよな？さっきから探してるんだけど見当たらない」

高速状態での射撃なので、そこは当然ハイパーセンサーとの連携が必要になる。ターゲットサイトを含む銃撃に必要な情報をIS操縦者に送るために武器とハイパーセンサーを接続するのだが、どうやら白式にはそれが無いようだ。おそらく束さんのせいだろう。

「うーん、格闘専用の機体でも普通ははいってるんだけど……」

「欠陥機らしいからな。これ」

「100%格闘オンリーなんだね。じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね」

「じゃあ、行くぞ」

「うん。とりあえず撃つだけでも大分違うと思うよ」

バンッ！

アリーナにものすごい火薬の炸裂音が響く。

「うおっ！？」

「どうっ？」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあつていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻するとき集中しているけど、それでも心のどこかでブレーキがかかるんだよ」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「うん」

やっと一夏が納得した顔をした。射撃についてあまり教えていなかったので、シャルルの射撃についての説明はとても助かる。

「だからそうだと私が何回説明したと……！」

えっ？

「って、それすらわかってなかったわけ？はあ、ほんとにバカね」

えっ？

「わたくしはてっきりわかった上であんな無茶な戦い方をしているものと思っていましたけど……」

ええ……

僕の後ろでつぶやく自称一夏のコーチ達の言葉を聞いて、一夏が少

し哀れに感じられた…

「あ、そのまま続けて。一マガジン使い切っていいよ」

「おう、サンキュ」

さつきより幾分か落ち着いて、空撃ちをする一夏。

「そういえば、シャルルのISってリヴァイヴなんだよな？」

「うん、そうだよ。ーあ、腕が離れてきているから、ちゃんと一回ごとに脇を締めて」

「お、おう。……こうか？」

「オーケーだよ。あと、なるべく銃身を移動させて視線の延長線上に置いた方がいいね。首を傾けて撃つと、とっさに反応出来ないよ」

「で、そのISなんだけど、山田先生が操縦していたのと大分違うように見えるんだが本当に同じ機体なのか？」

確かにシャルルのリヴァイヴは通常のリヴァイヴとカラーだけでなく全体のフォルムが違う。

おそらく専用機だからだろう。僕が一番目立って気になったのは四枚の物理シールドすべてを取り外してある代わりに、左腕にシールドと一体化した腕部装甲が取り付けられていることだな。あの中にきつとなにか隠してあるに違いない。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいいじつであるよ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。基本装備を

プリセット

いくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてある」

「倍！？そりやまたすごいな……。ちょっと分けて欲しいくらいだ」

「あはは。あげられたらいいんだけどね。そんなカスタム機だから今量子変換してある装備だけでも二十くらいあるよ」

「うーん、ちょっとした火薬庫みたいだな」

「じゃあ、その火薬庫を超えて見せようか」

「「えっ？」」

僕はピットから出て一夏とシャルルに言う。

「一夏、僕は前にやりたいことがあったからこのアリーナを貸し切ったってのは言ってたよね」

「おう」

「今からそれをやるから離れてて」

僕は花の形をしたバッチを握り、念じる。

（パッケージを選択してください）

無機質な声が頭に響く。

（サバーニヤパッケージ）

そう念じると僕の体が光る。そして光が収まると緑を基調とした全<sup>ッ</sup>身装甲のISを纏った。

「うお！また全身装甲か！あれ、でも前と変わらないか？」

「それも秘密。とりあえずターゲット起動」

ターゲットがアリーナ中に出てくる。

「う、うわ！どれだけ出したの、優人！それに声が違う！」

「さすがのシャルルでも驚くか。ターゲットの数はざっと千くらいだな。声に関しては俺の趣味だ」

ターゲットはサバーニヤのマルチロックシステムのデータをうまく取るためにわざと多くした。声と一人称についてはロックオンになりきるためだ。

「ターゲット。実戦モード、スタート！」

僕はアリーナ中央部に行く。

「行くぜ、ハロツ！」

「リョウカイ！リョウカイ！」

僕の言葉にAIのハロが反応する。そしてまず、肩に付いたホルスタービットを展開し、ホルスタービットからライフルビット？が飛び出す。そして、腰のホルスタービットが展開され、ライフルビット？も展開される。僕はハイパーセンサーのマルチロックシステム



「そうだろ？」

「うん！ほんとにすごいよ！僕じゃあんなこと出来ないし！」

「当然だろう。だが、これはサバーニヤの恩恵があつてこそだ」

「ゆ、優人さん！なぜあんなに遠隔操作の武器を使って平然としていられますの！？」

シャルルの言葉から続けてセシリアが質問をしてくる。

「あー、あれはこの機体に搭載してあるAIのおかげだ」

…実際は半分は僕が操作してるけど。

「そ、そうでしたか…」

シヨボンとうなだれるセシリア。遠隔操作について何かコツがあったら聞きたかったのだろうか？

「ねえ、ちよつとあれ…」

観客席が今度は別の意味でざわつく。

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

観客席がざわつきだして僕達は注目の的に視線を移した。そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッ



ヒだった。

転校初日以来、クラスの誰ともつるもうとしない孤高の女子だ。

「あれ？ここは貸し切った筈だが？」

僕がISの開放回線オープン・チャネルで声をかける。だが…

「おい」

僕に見向きもせず、一夏に開放回線で話掛ける。

「……なんだよ」

ぶつきらばうに一夏が答える。

「貴様も専用機持ちだそうだな。なら話が早い。私と戦え」

…戦闘狂か？こいつ。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様に無くても私にはある」

理由というのはおそらく千冬さんのことだろう。第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦で一夏が誘拐され、千冬さんが助けに行った代わりに千冬さんの決勝戦は不戦敗となってしまうのだ。そして、その誘拐された一夏の情報を提供したドイツは千冬さんがドイツに借りを作ったという口実で、大会終了から一年ほどドイツ軍IS部隊で教官をしたそうだ。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

「おいおい、人権全否定かよ。それに千冬さんのことは一夏とお前が戦う理由にはならないだろう?」

ロックオンボイスで俺が言う。

「うるさい」

その一言で一蹴された。

「また今度な」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる!」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のISを戦闘状態へとシフトさせる。刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「!」

僕は一夏の目の前にホルスタービットを展開して守った。シャルルも同じことを考えたらしく、シールドを構えて一夏の前に立っている。が、ホルスタービットの後ろだった。

「人が貸し切ったアリーナに勝手に入った拳句、武器を持たないやつに引き金を引いたあドイツ人はそこまで常識がなくてねえのか?」

「貴様……!」

「おっと、やるってか？俺は一夏と違って、売られた喧嘩は買ってやるぜ？」

そう言つて手に持ったライフルビット？の銃口をラウラに向ける。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』  
突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやってきた担当の教師だろう。

「……ふん。今日は引こう」

横やりを二度も入れられて興が削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。

「一夏、大丈夫か？」

僕はサバーニヤを待機状態にして一夏に声を掛ける。

「あ、ああ。助かったよ」

「僕も。ありがとね優人」

一夏だけに聞いたつもりだったが、シャルルにまで礼を言われた。シャルルはラウラと対峙した時の鋭い眼差しではなく、人懐っこい顔のシャルルであった。

「アリーナの貸し切り時間は過ぎちゃったな。とは言っても閉館時間まで貸し切ったんだが」

「おう。そうだな。あ、シャルル。銃サンキュ。色々と参考になった」

「それなら良かった」

またにつこり微笑む。女子だとわかってはいるが、正直この微笑みは本当に男子だったら残念なものだろう。色々な意味で。

「えっと……じゃあ、ふたりは先に着替えて戻ってて」

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

…シャルルに助け舟をだすか。

「あー…一夏。正直、無理に一緒に着替えようとするそっち系の趣味だと勘違いされるよ？」

「うっ…それは困る」

「というか、同じ男子でも一緒に着替えたがらない人もいるでしょ。その位の相手のこと考えてあげなよ」

「お、おう」

「と言うわけだシャルル。僕達は先に着替えて戻ってるよ」

「う、うん。……………ありがとう」

最後の言葉は聞き取れなかったが、多分、お礼の言葉か何かだろう。僕達は更衣室へ向かった。

更衣室で着替え終わると、外から声を掛けられた。

「あのー、織斑君とデュノア君、それと氷川君はいますかー？」

この声は山田先生だろうか？

「はい？えーと、織斑と氷川だけいます」

一夏が答える。

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

人はなぜ遠くに呼びかけるときに語尾が伸びるのだろうか？

「あ、大丈夫です。僕達はもう着替え終わってます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシユツとドアが開いて山田先生が入ってくる。

「デュノア君は一緒ではないんですか？今日は三人で実習しているって聞いていましたけど」

「あ、まだアリーナの方にいます。もうピットまで戻ってきたかもしれませんが、どうかしました？大事な話なら呼んできますけど」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、お二人から伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯にすると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回使用日を設けることにしました」

「本当ですか！やったな、優人！」

「…ああ」

一夏はお風呂に入れるというだけで感激してる。しかも感激のあまり山田先生の手を取ってるし…

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」

気のせいか、山田先生の顔が赤い。恥ずかしいのだろうか…いや、まさか、一夏の毒牙にやられてるのか…

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます」

「そ、そうですか？そう言われると照れちゃいますね。あはは……」

正直、更衣室で男子生徒と女教師が一緒にいるとか、それなんてエロゲ？

「……二人とも何やってんの？」

気がつくともシャルルがいた。

「まだ更衣室にいたんだ。それで先生の手を握って何してるの？」

「一夏が山田先生を襲おうとしてる」

いたずら開始。

「「なっ……!?!」」

慌てて手を離す一夏。

「フッ……冗談だよ」

いたずら終了。早いな。…1人乗りツツコミって悲しいね…

「二人とも先に戻ってって言ったよね」

何事も無かったかのようにシャルルが喋る。

「あ、ごめんね。僕達もさっき山田先生と話を始めたばかりだったから」

「あ、そうだ！シャルル、今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

…何か不機嫌だな。

「あ、そうそう、お二人にはまだ別の用件があるんです。ちょっと書いて欲しい書類があるので、職員室まで来てもらえますか？お二人のISの正式登録に関する書類なので、ちょっと枚数が多いですけど」

「そういう事だ、シャルル。先に風呂使ってていいぞ」

「うん、わかった」

「じゃ、行きましよう山田先生」



## 第十五話 やっぱりサーバーニヤの乱れ打ちはかっこいいね（後書き）

後でお気に入り100件登録突破&ユニークアクセス1万越え記念話を作りたいと思います。

感想、訂正もお待ちしています。

『ジサクジエン』（お気に入り100件登録突破&ユニークアクセス1万越え記

自分の欲望のままに書いてみた。

人によっては不快にさせる文章があるかもしれないので、注意です。

……図々しくてすみません……

『ジサクジエン』（お気に入り100件登録突破&ユニークアクセス1万越え記

作者「どうも、作者です」

優人「どうも、『第二の人生はISの世界で！？』の主人公、氷川優人です」

作者「いや〜結局話が決まらなくてオリジナル主人公との対談話になってしまいました」

優人「まあ、変な話を作られるよりマシだけど」

作者「では、まず主人公の名前の由来を…」

優人「何の前触れも無く始めたね!？」

作者「え？まあ、そうだね」

優人「もつとさ、僕に質問するとかないの？」

作者「いや、お前は俺の妄想の産物だし」

優人「じゃあ、何で主人公との対談にしたの!？」

作者「強いて言うなら…ツツコミが欲しかったから？」

優人「オイイイイ!」

作者「えー、で名前の由来ー」

優人「待つて！お願い！僕に質問して！」

作者「…わかったよ、じゃあリア充になった気分は？」

優人「そうだね…別にリア充って気分でもないよ。男子と女子の比率が約1：9だからね。寧ろ気疲れが増えたね…あ、でも確かに顔はよくなったからチャホヤされるようになったね」

作者「そうですか、リア充爆発しろ。じゃあ、質問終了。では、主人公のー」

優人「もう終わり！？…もういいや……どうぞ…続けて下さい…」

作者「よし！で、名前の由来だけど、氷川というのは勿論スパロボのリョウト」ヒカワからです。優人というのもリョウトという名前を少し改造しただけです」

優人「…やっぱり僕の名前ってリョウトが元だったのか……」

作者「まあね。で、ISについては当初はPFだけの予定でした」

優人「へえ？じゃあ、何でブレイヴハーツを作ったの？」

作者「だって、いきなりクアンタとかヒュッケバインを使ったら動力源のところで矛盾が生まれるじゃん」

優人「あ、そうか。クアンタに関してはGNDライブを作るのにモノポールを集める必要があるし、ブラックホールエンジンなんかはまず作る事が不可能に近いしね」

作者「その通り。んで、最初にブレイヴハーツを作らせて、便利機能の神様を利用してPFを作ったわけ」

優人「神様に転生させられるってとっても便利な設定だね」

作者「うん」

優人「あれ？でも、そうなるとブレイヴハーツの出番が多数の強力な機体のPFのせいでどんどん減っていかない？」

作者「その点はノープロブレム。確かにPFにはパッケージによって様々なロボットに変身出来るっていう能力があるから最強かもしれないけど、ネタバレになるかもしれないが、最終的にはブレイヴハーツが最強って設定になる予定なんだ。だから、大丈夫だ！」

優人「へえ、クアンタとかサーベラスを超えるんだ？」

作者「うん。それとPFのパッケージも増やしたいと思ってるんだよね」

優人「あ、僕もそれは賛成だな。他の機体に乗ってみたいし」

作者「とはいっても、ガンダムばかりが作者の頭の候補に上がってきてるんですね……」

優人「確かにスパロボ要素が欲しいかも」

作者「でしょ？一応候補を出してみたんだけど、アルトアイゼンはもう先輩にあたる先駆者がいるからつまらないし、ヒュッケバイン

も先輩がいるからダメだしね。それにアストラとディストラは論外。グランゾンとかネオグランゾンもね」

優人「あれ？ダブルオーは？」

作者「気にするな。まあ、ブラスタとかも考えているが、あれはまだ完結してないからな…」

優人「確かに…」

作者「エール・シュバリアーも考えたが、ジェアン・シュバリアーになった時がね…」

優人「ISとしての欠点が生まれるね…」

作者「そう、大きすぎるから…出すとしたらフォルテギガスかな…」

優人「そうだね…あれならまだ妥当な線かも…」

作者「あ、ちなみに言っておくと作者はスパロボは、MX、D、Z、Z2ぐらいしか真面目にやったことがないよ！」

優人「じゃあ、なんでアルトアイゼン出そうとしたの!？」

作者「スパロボの動画見て格好良かったから？」

優人「それだけ!？」

作者「うん。つかさ、リボルビングステーキとかリボルビングバンカーは男のロマンじゃね？」

優人「確かにそうだね。あれはかなりいい。あ、そういえばリボルビングバンカーっていうとサーベラス・イグナイト何だけどさ」

作者「うん？」

優人「どうしてガルムレイドじゃなくてサーベラスなの？」

作者「…サーベラス・イグナイトの方が格好いいから！」

優人「ガルムレイドが格好いいって言う人もいるでしょ！！」

作者「まあ…そうだね…でも、BGMの『The watch dog of hell』は格好いい曲だろ？」

優人「確かに…あ、思えばブレイヴハーツの名前の由来は？」

作者「キングダムハーツ」

優人「やっぱりね！」

作者「なんだ…わかっているなら聞くなよ。そもそもお前が命名という設定だろ」

優人「確かに…そうだけど…僕が考えた名前の由来が僕と違うんじゃないかと思ったんだよ」

作者「お前は俺の妄想の産物である事を忘れていいのか？」

優人「そういえばそうでした」

作者「ふん、わかればよろしい」

優人「さっきから話がコロコロ変わってるけど、まあいいや。で、PFの話何だけどガンダムならどんなアイデアが出るって言ってたけど例えばどんなの？」

作者「うーん、ユニコーンとかクロスボーンとかW0とか？」

優人「…いいかも」

作者「特にやりたいと思ったのはF91とV2なんだよ。特にV2は俺の初ガンダムだから余計に思い入れがある」

優人「完全調整したアサルトバスターで戦うのもいいし、金属剥離効果による残像もいいな…」

作者「だろ？だからどちらにするべきか迷っている。普通ならネット投稿の二次創作なのだからアンケートを取りたいところだが…」

優人「今まで感想とか書かれた事ないから言い難いと……」

作者「……うん」

優人「一度アンケートやってみれば良かったのに」

作者「だ、だって、書かれなかった時が悲しいじゃん！」

優人「…意外とガラスのハートなんだね」



作者「…いわゆる黒歴史のせいだね」

優人「ふーん……ていうか、こんなところでそんな事を言うなんて  
図々しいにも程があるね」

作者「……………」

優人「まあ、いいか。あ、そうだ。ブレイヴハーツのケルベロスシ  
ョットの光学兵器なだけどさ。時代的に不可能に近かったんじゃ  
…あの束さんでさえ当時は荷電粒子砲で止まってたのに」

作者「ああ、あれね。あれは荷電粒子砲の出力が弱くなる代わりに  
荷電粒子砲を小型化出来たっていう設定にしたつもりだよ。ショッ  
トガンモードについては沢山の収束粒子を一気に放出しているって  
いう設定だ」

優人「そんなのだったら、作中で書きなよ!!」

作者「…もう正直すまんかった。これも作者の文才の無さが招いた  
結果です」

優人「はあ…まあ、いいか。エクスカリバーは？なんであんな名前  
なの？」

作者「特に意味はない。まあ、ぶっちゃけ中二病が発生したみたい  
な？」

優人「……………」

作者「…テヘツ」

優人「キモイ。ね」

作者「酷い！」

優人「そろそろネタ切れかな。さて今後『第二の人生はISの世界で！?』はどうなって行くのか。PFの出番が増えるばかりでブレイヴハーツはどうなるのか!？」

作者「期待しないで待っていて下さい。えー、最後に。こんな駄文だらけのISの二次創作を読んいただき、まことにありがとうございます。矛盾も多く、説明不足だらけですがこれからも作者なりに頑張つて書いて行きますので最後まで付き合っていただければ幸いです」

優人「そして、こんな作品でもこれだけのアクセス数が取れたのはISという作品があつてこそ。弓弦先生がどれだけ偉大な作品を書いたのか改めて実感致しました」

作者「ええと、ではこの言葉を主人公の優人と一緒に言いたいと思います…本来、このような場所で言うべき事では無いのですが…せーの…」

作優「「弓弦先生！早く続きを書いて下さい！！」」

『ジサクジエン』（お気に入り100件登録突破&ユニークアクセス1万越え記

最新話は土曜日以降になりそうです。

今回の回でお気に入りが減らなければいいけど……

## 第十六話 シャルルの正体（前書き）

更新、大分過ぎてしまいましたね…すみません。

では十六話をどうぞ

## 第十六話 シャルルの正体

―夏視点―

「はあゝ、終わったあゝ疲れたぜ…」

「名前書くだけだったじゃないか」

「んー、そうなんだけどな」

あ、シャルルに先に風呂を使わせたけどボディソープ切れてるんだ。言っておけば良かった。

「なあ、優人。これから俺の部屋で茶でも飲んでかないか？」

「うん、そうしようかな」

そして俺の部屋へ入るとシャワールームから水の弾く音が聞こえた。

「んじゃ、優人は適当にかけといてくれ」

「わかった」

優人は椅子に腰をかけるとちっちゃなパソコンみたいなものを取り出して何か真剣な眼差しで画面を凝視し始めた。

「っと、その前にボディソープだな。シャルル」

ガチャ。

ガラッ。

「「あ」」

優人視点移行…

一夏がお茶を淹れてくれると言うので部屋に来たのだが…お茶が来ない。見たところお湯を沸かしてる間にシャルルにボディソープを…ってこれ、マズくね？

「きゃあ！」

遅かった……

可愛い声が聞こえてから少ししてボーッとした一夏がお茶を淹れてこっちにきた。

「……はい」

「ど、どうしたんだよ、一夏」

「シャルルが…女の子だった…」

「やっぱりか」

「反応薄っ！！ってかシャルルが女ってわかったのか!？」

「まあ、薄々ね」

「マジかよ……」

「い、一夏…お風呂、出たよ…ってゆ、優人!？」

「やあ」

シャルルはジャージ姿だったが、いつものシャルルと違い、胸に膨らみがある。恐らく、今までコルセットが何かを巻いていたのだろう。

「と、とりあえず。シャルルの分のお茶淹れるな」

「う、うん…」

僕はパソコンを見続けている。シャルルがこちらに視線を送っているのを知りながら。

「どうしたの？」

パソコンを弄りながら聞く。

「い、いや！何でもないよ」

「はい、シャルル。ここに置くぞ」

一夏はテーブルにお茶の入った湯のみを置く。そして自分のベッドに腰をかける。

「とりあえず、飲もうぜ」

「うん…」

ズズッ…お茶を飲む音が部屋に響く。

「でだ、シャルル。早速だけど本題に入るぞ。なんで男の格好してたんだ？」

一夏が疑問に思っていた事を口にする。

「実家の方からそうしろって言われて……」

「それはデュノア社のー」

「そう。僕の父がその社長。その人からの直接の命令なんだよ」

実家の話を始めてからシャルルの顔は顕著に曇りだしていた。…  
…どうしたんだ？

「命令って……親だろう？なんでそんなー」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

一夏は絶句し、僕は顔を顰める。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは言いたくない様な話を健気に喋っている。本当は辛いだろうに…



「父にあつたのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声は乾いていてちつとも笑ってはいなかった。僕は自然とパソコンを使う手が止まっていた。一夏の方を見ると拳を強く握りしめていた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？だつてデュノア社つて量産機ISのシェアが世界第三位だろ？」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ISの開発つていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があつてやつと成り立っているところばかりだよ。それでフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されてるからね。第三世代型の開発は急なの。国防のためもあるけど、資本金で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

イグニッション・プランという単語を聞いて、少し前にセシリアが言っていたことを思い出す。

『現在、欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機の選定中なのですわ。今のところトライアルに参加しているのは我がイギリスのティアーズ型<sup>モデル</sup>、ドイツのレーゲン型、それにイタリア

のテンペスタ？型。今のところ実用化ではイギリスがリードしていますが、まだ難しい状況なのです。そのための実稼働データを取るために、わたくしがIS学園へと送られましたの』

おそらく、あのラウラもこのことに関係していたからこの学園に来たのだろう。

「話を戻すね。それでデユノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「でも、それがなんで男装に繋がるんだ？」

「一夏、僕がシャルル達が転校してくる朝に言ってたこと。覚えてる？」

「あー、俺と白式のデータを狙ってるってやつ？」

「そ。多分それが一つ」

「もう一つは？」

「注目を浴びるための広告塔だろうね」

「……その通り。あの人にそうしろって」

話を聞く限り、デユノア社の社長は愛人との間に出来た娘とはいえ、

その娘を道具としていいように使っているだけのようだ。それはシャルル自身が一番わかっていること、だから実の父親のことを他人行儀に話すのだろう。

あれは、父親なのではなく、他人なのだと。自らの中で区別するために。

「とまあ、そんなところかな。でも二人にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デユノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……………」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついていてゴメン」

深々と頭を下げるシャルルを、一夏は肩を掴んで顔を上げさせていた。

「いいのか、それで」

「え……？」

「それでいいのか？いいはずないだろ。親が何だっというんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなものは！」

「い、一夏……？」

シャルルが戸惑いと怯えの表情をしている。僕は感情を抑えられな

い一夏を見て少し顔がニヤけてしまった。

「親がいなけりや子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんか邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

確かにその通りだ。自分の道は自分で決める。誰かに縛られるいわれはない。それが人間ってものだ。

「ど、どうしたの？一夏、変だよ？」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなっちゃまって」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

恐らくは一夏の資料で知っていたのであろう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしないでいい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親になんて今更会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだよ？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府とことの真

相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな？」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」

「どうすれば……」

また助け舟を出すか……

「だったらここに居ればいいよ」

「「え？」」

二人が声を同時に出す。

「『特記事項第二一、本学園における生徒は在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』——つまり、この学園にいる限り、少なくとも三年間は大丈夫なんだ。その三年間に何か策を練れば良い。僕が何か新兵器を譲渡するとかね」

「優人」

「ん？なに？」

「よく覚えられたね。特記事項つて五十五個もあるのに」

「昔から物覚えがいいんだ、僕は」

「確かに。お前、小学生で大学の勉強してたしな」

「すごいね、優人。ふふっ」

やっとシャルルが純粹な笑みを浮かべる。その表情には屈託が無く、十五歳の女子そのものだった。一夏は顔を赤くして背けてしまった。

「ま、決めるのはシャルル自身だよ。誰かの為で無く、自分の為に考えてみて」

「うん。そうするよ」

コンコン。

「「「!?!?」」」

「い、一夏、いるか？夕食をまだ取っていないようだ、体の具合でも悪いのか？」

いきなりのノックと呼び声に僕達は身をすくませる。

「一夏？入るぞ？」

「ど、どうしよう？」

「とりあえず隠れて、僕が時間を稼ぐから」

「わ、わかったよ。とりあえず身を潜めてー」

「だあつ！なんでクローゼットなんだよ。ベッドベッド！布団の中で大丈夫だ！」

一夏が突っ込む。

「あ、ああつ、そっか！」

ばたばたと慌ただしい二人を余所に僕はドアを開くと簾が立っていた。

「やあ、簾。どうしたの？」

「……何故優人がここにいる？」

「いや、ただ単に一夏にお茶をご馳走になっていただけだよ」

「そうだ、一夏は？」

部屋を覗きこもつとするが……

「一夏は今、シャルルの看病をしているよ！」

「看病……？デュノアは具合が悪いのか？」

「そ、そうだぞ、簾！シャルルは具合が悪いからしばらく寝るって夕食はいらないみたいだし、仕方ないから俺と優人だけで行こうって話をしてたんだ」

「そうなのか……では、私も夕食はまだだからな、い、一緒に食べ

よう。め、珍しい偶然もあったものだな」

「あー、僕はお腹空いてない…というか、部屋にそろそろ食べなきゃまずい作り置きがあるから二人で食べてきて。ついでにシャルルの看病もしておくよ」

「お、おう」

「では、デユノア、身体を大事にするんだぞ。さあ、一夏、行こう」  
僕は箒に向けて小さく健闘を祈ると箒は首を縦に振り、腕を取って体を密着させた。そして、部屋を出て、隣の自分の部屋へ行こうとすると……

「あら、優人さん？」

セシリアが居た。

「ど、どちらへ？」

「え？部屋だけど……？」

「あ、あの、夕食は取られたのですか！？」

「い、いや、ただけだ。作り置きの中にそろそろ食べなきゃまずいものがあるからそれを食べるつもりだよ」

「そ、そうでしたか……わたくしもそれをいただくことは？」

「ごめん、一人分しかないし、シャルルの病人食を作らなきゃいけ



ないんだ」

「病人食？デユノアさん、具合悪いのですか？」

「うん、少し風邪気味みたいなんだ」

「……嘘ですけど。」

「で、では、わたくしも手伝い……は致しませんわ」

自分の料理の腕を思い出したらしく、表情が暗くなる。

「わ、わかった。さっき、一夏達が食堂に行ったから一夏達と食べ  
てきなよ」

咄嗟の言い訳が最低なものになってしまった。第……ごめん。

「そ、そういたしますわ」

そう言つてセシリアは食堂へと足を運び始めた。

僕は自室に入り、冷蔵庫から作り置き of 料理とトマトリゾットの材料を持って一夏とシャルルの部屋に戻る。

「や、シャルル。リゾットだけど、いいよね？」

「う、うん。なんでもいいよ」

僕はキッチンに立って、リゾットを作りながら作り置き of 料理をレンジで温める。そして出来上がった料理を皿に盛り付け、テーブル

まで運ぶ。

「うわぁ……………」

先にテーブルの前に座っていたシャルルは声をあげていた。

「…………リゾットってそんなに珍しい？」

「ううん、そうじゃないよ。こんなに美味しそうなりゾット見たこともないからさ」

「盛り付けは良くても味がすべてだからね。食べてみてよ」

そう言っ僕もレンジで温めた料理、シーフードドリアを食べ始める。

「あむっ…………お、美味しい……………」

あ、あれ？涙流してるぞ？

「ど、どうして涙流してるの？ま、まずかった？」

「う、ううん…女として負けた気がして…………こんな美味しいリゾット、僕に作れないよ…………どうしてそんなに料理が上手いの？」

「んー、父さんが昔にとある高級料亭で働いてて、それで料理を教えてもらったよ。…………ま、父さんがやめた後、その店は半年で潰れたみたいけど」

「優人のお父さんって何者!？」

「普通の旅好きな人かな？」

「へ、へえ…あ、そっちのドリア、美味しそうだね」

「うん？食べる？」

そう言って僕はドリアを一口分取ってシャルルの口に運ぼうとする。

「ええ！？」

「ど、どうしたの？」

「う、うん。なんでもない。あ、あーん」

パクリ。その一口でシャルルは満面の笑みを浮かべていた。

「美味しい…じ、じゃあ、僕のリゾットも！」

「え？いいよ。僕は味見したし。シャルルはシャルルの分で食べて」

「そ、そう……」

シユン……と少し落ち込むシャルル。何だ、この僕が落ち込ませたみたいな雰囲気は？

「や、やっぱり貰おうかな？」

「本当！？じゃあ！はい、あ、あーん……」

「うお！食べさせてくれるんですか！？……って僕がやったからか。」

「うん、我ながら力作だね」

「優人は何でも出来るんだね」

「一人で生きていく分にはね」

「そうかな？ごちそうさま……」

「はい、お粗末様でした」

二人で話をしながら食べていると何時の間にか食べ終わっていた。  
片付けをしているとシャルルが僕を呼んだ。

「あ、あのさ。過去にフランスに行ったこと……ある？」

「うん、あるよ」

「そこで、シャルロットって女の子会ったこと、ない？」

「……あるよ」

「その……シャルロットっていうの、ぼ……私……なんだ」

「やっぱりか」

「気づいてたんだ……」

「……………」

僕は話を聞きながら黙々と食器を洗う。

「あなたと会ったあの日、ユウトが私を助けてくれた日から私、毎日あの公園に行ったんだ。でも、ユウトはいなかった」

「そう…」

「それから数年して…お母さんが死んじゃって、あの人の政府の人が私を迎えにきてね、あの人の駒になった日にいつかユウトが助けに来てくれるって思ってたんだ」

「……………」

「でも、ユウトはこなかった。当たり前なのにね。それでも何処かで期待してたのかな。それで、IS学園に入ることになって一夏と優人の資料を見せられた時に驚いちゃった。だって、あのユウトと瓜二つなんだもの」

「それは…………」

「その日から私はIS学園に行くのが楽しみだった。本妻に罵られても、どんな厳しい訓練でもIS学園に行く為に耐えた。それで私はIS学園であなたの顔を見てずっとあなただけを見てた」

「どうりで視線を感じたわけだ」

「ごめんね。でも、私はあなたとずっと話をしたかった。ずっとあなたにもう一度お礼が言いたかった。でも、正体をばらさない為にシャルロットとしてあなたと話すことが出来なかったの」

「……………」

「それで、あなたと始めて話した時、あなたはシャルロットって私のことを呼んだ。シャルルじゃなくて」

正直、あのシャルロットで欲しくなかった。……まさか、こんな形で一夏ハーレムを破壊するハメになろうとは。

「私は嬉しかった。名前を呼ばれた時、フランスで会ったユウトとIS学園の優人が同じ人だってわかったから。そして、私の事を覚えていてくれた。でも、すぐにはお礼が言えなかったの。一夏がいたから」

「そうだね」

「それに、今回も助けてもらったから、改めてお礼を言わせてもらうね。……優人、ありがとう。私を助けてくれて」

「お礼なんて…人が困ってたら助けるのが当然でしょ？」

「ふふつ。あの時と同じこと言ってる」

「あれ？そうだったけ？」

「そうだよ」

そんな和やかな空気が漂う中にやつれた一夏が帰ってきて、夜は更けていった。

## 第十七話 地獄の番犬とメガネの女の子と模擬戦（前書き）

更新遅れました。

アクセス100、000越えました！ありがとうございます！

では、続きをどうぞ

かなり、長いですけど^^；

9/23 修正しました。

## 第十七話 地獄の番犬とメガネの女の子と模擬戦

シャルルの正体がバレた翌日の放課後、僕は千冬さんのところにいた。

「何？どこかISの作成が出来る場所を貸して欲しいだ？」

「はい。実は少し作りたいものがあるんですけど、ちょっと自室だけじゃ無理があるんですよ。あ、出来れば人が少ないところで」

「……そうだな。第三整備室なんかはどうだ？あそこなら普段から人が少ないし、機材も沢山ある」

「本当ですか！？」

「ああ。申請は私が出しておこう。……通常、製作するもののデータを提出する必要があるのだが、提出出来そうなものか？」

「うーん……色々端折っていいなら」

「構わん。どうせ、お前の事だからな学園側も文句は言えんだろう」

「わかりました」

その後、僕はサーベラス・イグナイトの事を武装面と外装について簡潔に書き、それを学園に提出した。その後、第三整備室に移動。

プシュッ



自動ドアが開く。中は殆ど人がいなく、好都合だった。

（これならなんとかサーベラスを完成させられるかも…）

僕は必要な機材をいくつか手に取り、適当な広い場所に座った。

「出番だよ、ハ口達」

そう言うと量子化されたハ口×3が出てくる。このハ口達はアスベルさんの家にいる時に作ったもので、モデルは00とユニコーンだ。ISの製作に役立つと思い、作成した。最初はこのハ口達は命令を聞き、整備マシン・カレルを操作するだけの機械だったのだが、サバーニヤの事をすっかり忘れていて、サバーニヤの自立AIが作成を終えるとその自立AIをこいつらに移植しておいた。なので…

「ハロー、ユウト。ハロー、ユウト」

「ユウト、オハヨウ。ユウト、オハヨウ」

「ユウト、ドウシタ？ユウト、ドウシタ？」

喋るのだ。原作通りなので結構愛着が湧く。…なんでアスベルさんの家にいた時に自立AI作らなかつたんだろ……結構後悔。

そんな事を考えながら今度は量子化しておいたカレルを出す。

「よし、ハ口達。カレルを使って僕の手伝いをして」

「『ワカッタ、ワカッタ』」

それぞれのハ口がカレルと合体する。僕は組み立てかけのサーベラス・イグナイトを出した。

組み立てている途中、背後からの視線を感じたので振り返ると水色の髪の毛の眼鏡を掛けた女の子がいた。その子は球状に各キーが配置されたフルカスタマイズモデルの空間投影キーボードを両手、両足で入力している。彼女の近くにはISの待機状態のものがあつた。こっちを見ていたため、僕と目が合った。

「……えーと、どうかした？」

「……なんでも、ない、です……」

彼女は自分の作業に戻ったので僕も自分の作業に戻る。…しかし、数分するとまた視線を感じた。僕はハ口達に作業を任せ、後ろの彼女のもとへと向かった。

「……そんなに熱い視線を送られると困るんだけど…？」

少し冗談混じりに僕が言う。

「……」、「ごめんな、さい」

ばつが悪そうにシュンとうなだれる。

「いや、いいんだけど。何か聞きたいことでも？」

途端にパツと顔が明るくなり、コクコクと首を縦に振った。

「何かな？」

「あの…あれって…八口？」

彼女が指差したものは僕の作業中の八口達だった。

「うん。ガンダムを知ってるの？」

「う、うん…それに…この前、あなたが使ってたISが…ガンダムサバーニヤに似てた…」

「ああ、見てたのか。うん、確かにあれはガンダムサバーニヤを模したというより本物に近いものを作ったから」

「っ！どうやって作ったの！？」

さっきまで大人しかった彼女は急に声を荒げた。

「うーん、それは教えられないよ。企業秘密みたいなものだね」

「そ、そう……」

ガックリと肩を落とす、女の子。

「あ、あのさ。君もIS作ってるの？」

「う…うん」

「見せてもらってもいい？」

「だ、ダメっ……でも、迷惑かけたから…どうぞ…」

「ありがとう」

スペックデータを少し見させてもらうと彼女のISの名前は『打鉄式式』という打鉄の後継機のようなのだ。でも、まだまだ完成にほど遠い。あ、マルチロックオンシステムも導入予定なのか。未完成だ。どこでなんでも、ひとりで作っているのだろうか？多分、このペースでひとりとなると、あと早くて半年、遅ければ一年はかかってしまうだろう。それにいくつか数値を打ち間違えている。このままテストしたらほぼ確実に事故が起こる。

「ねえ」

「……何？」

「こことかの数値、間違えてるよ」

「う、うそ？……本当だ」

そう言っただけ彼女はキーボードを操作して数値を修正する。

「何で君はISをひとりで作ってるの？」

「……言いたく、ない」

「…わかった。邪魔しちゃってごめんね」

「う、こっちこそ…ごめんなさい」

お互いに謝りあった後、僕は作業に戻る。そして、僕と彼女はお互

いギリギリまで作業をやっていた。因みに、サーベラス・イグナイトは外装と内装は完成した。後はTEエンジンの出力調整とシステムの最適化だけだ。システムに関しては問題無いのだが、エンジンについてはかなり時間がかかりそうだ。

「あ、君ーえーと……」

部屋を出て行こうとする彼女を見て僕は呼び止めた。

「な、なに？」

「これ、あげるよ」

そう言っ僕は青い八口を差し出す。

「え、でも……」

「今日は作業の邪魔をしちゃったからね。そのお詫び」

「そ、それは……お互い……様……」

「んー…じゃあ、ガンダムを語れる友達が出来たからその記念かな？」

「と、友達…わ、私と……？」

「そう。だからこれは友情の証ってことで受け取ってくれないかな？」

「……わ…わかった……」

「ところで君の名前は？」

「更識…簪…。簪って、呼んで」

「うん、わかった簪。僕はー」

「氷川、優人…でしょ？」

「うん、そう。まあ、学園に二人しかいない男子だからわかるか。  
……よしと、はいこれ」

僕は簪のデータをハ口に登録し、渡した。

「あ、ありがとう……」

「ハロー、カンザシ。ハロー、カンザシ」

「わああああ……」

「気に入ってくれてなによりだよ。簪、何か困ったことがあったら  
なんでも言ってるね。あ、今度、僕の部屋でガンダム鑑賞会やろう！」

「うん…わかった…！」

返事をした時の簪の顔はとっても可愛らしい笑顔だった。

翌日から僕は時々、簪と会うようになっていた。……第三整備室で  
だけ。

そんな事があってから三日程たったある日。僕は一夏とともにトイレに向かっていた。

「はー。この距離だけはどうにもならないな……」

「確かに、トイレが遠いつていう現状は回避したいね……」

学園内に男子が使えるトイレが三カ所しかないという現状、授業終了のチャイムと同時に中距離走開始なのだ。もちろん帰りも全力疾走しなければ授業に間に合わない。しかし最悪なことに先日『廊下を走るな!』と叱られた。どうしろと…

「なぜこんなところで教師など!」

「やれやれ……」

あれ?ふと曲がり角から声が聞こえて僕と一夏はちよつと注意を向ける。なにせ、聞いた声が千冬さんとラウラと断定できたからだ。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

普段のラウラからは想像出来ない程声を荒げている。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分と生かされません」

「ほづ……」

「大体、この学園の生徒など教官が教えたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど――」

「――そこまでしておけよ、小娘」

「っ……！」

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

「さて、授業が始まるな。さつさと教室に戻れよ」

「……………」

千冬さんの声が聞こえた後、早足で去っていく足音が聞こえた。

「その男子共。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「な、なんでそうなるんだよ！千冬ね――」

「はしーん！」

「学校では織斑先生と呼べ」



「は、はい……」

「学習しなよ…一夏…」

「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかってるって……」

「そうか。氷川、こいつの面倒を頼む」

「はい。それじゃあ僕たちは教室に戻ります」

「おう。急げよ。――ああ、それと二人とも」

「「はい？」」

「廊下は走るな。……とは言わん。バレないように走れ」

「「了解」」

↓放課後。

三人称視点移行…

「「あ」「

ふたりそろって間の抜けた声を出してしまう。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリアだった。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

ふたりの間に見えない火花が散る。どうやらどちらも狙いは優勝らしい。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはつきりさせとくのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強く優雅であるか、この場ではつきりとさせましょうではありませんか」

ふたりともメインウェポンを呼び出すと、それを構えて対峙した。

「では――」

――と、いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛来する。

「――!?」

緊急回避のあと、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方向を見る。そこにはあの漆黒の機体がたたずんでいた。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。その表情には欧州連合のトライア

ル相手以上のものが含まれていた。

「……どういふつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

とん、と連結した《双天牙月》を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準備状態へとシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的な物言いに、鈴とセシリアの両方が口元を引きつらせる。

「何？やるの？わざわざドイツくんだからやってきてボコられないなんて大したマゾっぶりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに」

ラウラのすべてを見下すかのような目つきに並々ならぬ不快感を抱いたふたりは、それでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見いだそうとする。

が、それはおおよそ無駄な労力であった。

「はっ……。ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能がない国と、古いだけ取り柄の国はな」

ぶちっー！

何かが切れる音がして、鈴とセシリアは装備の最終安全装置を外す。

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわけね。ーセシリア、どっちが先にやるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですね。わたくしとしてはどちらでもいいのですがー」

「はっ！ふたりがかりで来たらどうだ？一足すーは所詮二にしかない。下らん種馬共を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

「ー今なんて言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にいない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の代表として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

得物を握りしめる手にきつく力を込めるふたり。それを冷やかな視線で流すとラウラはわずかに両手を広げて自分側に向けて振る。

「とつと来い」

「「上等！」」

優人視点移行：

鈴とセシリアが第三アリーナで会う頃に優人は第三整備室にいた。

目的はサーベラスの武器の作成と簪のIS作成の手伝いだ。

簪は少し前までは拒否していたが、作成に詰まった時に優人が手伝うとこれからも詰まったら助けてほしいと頼まれた。

「あー、そこはこの数値ね」

「うん、わかった…」

黙々と作業を進める。

「ガンバレ、カンザシ。ガンバレ、カンザシ」

「うん、ありがとう。ハロ」

「あ、ハロにも手伝いさせる？」

「…出来るなら」

「はい、カレル」

量子化しておいたカレルを取り出す。そしてハロがカレルと合体する。

「00と一緒だ…」

「結構役に立つんだよ？これ」

そしてまた黙々と作業を再開する。僕と簪でシステムや出力の調整、そしてハロは打鉄式式の外装と内装の整備を行っている。

そんな作業をしていると何やら外、正確にはアリーナへ向かう通路のあたりが騒がしくなっていた。

「外が騒がしいけどアリーナで何かあったのかな？」

「アリーナ…モニタしてみる…」

簪は作業を中断して整備室にある大型モニターを操作し、アリーナを映す。

映し出された映像には鈴とセシリア、そしてラウラが二対一で戦っていた。それもラウラが優勢で。

「こ、これ……」

「鈴…！セシリア…！」

映像を見ていると鈴とセシリアのISが展開不能になり、ラウラが止めを刺そうとする。

「くっ…！！」

「ゆ…っ！」

気がつくとも僕は走り出していた。

（くっ…PF、サーバーニヤの起動を！）

（エラー、指定されたパッケージがありません）

！！しまった。サーバーズの武器データとハ口達とハ口達のカレル

を入れるためにサバーニャとクアンタのデータを抜き取ったんだっ  
た！

「仕方ない、こい！ブレイヴハーツ！」

ISを起動し、全速力でアリーナに出ると鈴とセシリアを背にラウ  
ラと対峙する一夏がいた。

「一夏！！ここは任せてふたりを！」

「優人！？だけだよ！」

「いいから！」

「ッ！わかった！」

ふたりを抱える一夏。そしてピットへ戻ろうとするが…

「逃げるな！」

ラウラの大型実弾砲が火を噴く。

キンッ！

僕はその実弾を斬って一夏を守る。

「悪いけど、僕が相手だよ！」

「貴様…ッ！」

突然の別方向からの攻撃を避けるラウラ。攻撃を飛んできた方向を見ると、シャルルがいた。

「優人！」

「シャルル！君も下がってて！」

「でも！」

「いいから！ッ……！」

「はああああ……！」

僕とシャルルのやりとりの最中にラウラはワイヤーブレードを飛ばしてくる。

「しまった！」

僕はよそ見をしていたせいで手に持っていたエクスカリバーをワイヤーブレードで弾き飛ばされてしまった。

「でもっ！」

僕はケルベロスショットを構えて二連射する。

「ふっ！」

あっさりと躲されるが、僕はその隙に瞬間加速を使ってエクスカリバーを回収する。そして、回避体勢から攻撃体勢に戻ったラウラは僕を狙うがまた別方向からの攻撃に止められる。



「大丈夫！？優人！」

「あ、ああ、ごめん、シャルル」

「ちい…！」

「…僕に策がある。シャルルは離れたほうがいい」

「え？でも…」

「大丈夫、僕は負けないよ」

「わかった…！」

シャルルは大人しく下がってくれた。

「君の機体のAICはかなり厄介だね。実弾が効かないからさ」

「なんだ？命乞いか？」

「いや、違うよ。それ！」

「！？」

突然、僕の背中に巨大なコンテナが現れる。これはミサイルコンテナだ。これは一回だけ使える戦法のために用意していた。ちなみに中にはGN粒子たっぷりのミサイルがある。

ドドドドドーン！…！

一斉にミサイルが発射される。

「そんなものなど!」

いくつかはAICによって止められる。が、その他は爆発して煙幕を振り撒く。

「煙幕だスモークと!?!だが、ハイパーセンサーを使えば…なにっ!?!」

現在、この煙幕内と周辺にGN粒子が散布されているため、ハイパーセンサーは誤作動を起こしている。

「だが、やつもこれではみえまー!」

「うおおおおお!?!」

僕はイノベーターの力を利用し、微かな脳量子波を読み取って、僕を見失っているラウラを後ろから斬りつける。

「があああああ!?!?」

「続けてくえ!ファングスラッシャー!?!」

ラウラが僕に斬りつけられ、距離を取るまでの間にファングスラッシャーを投げつけた。念動力に近い力の脳量子波でファングスラッシャーを操る。そして、大型実弾砲の砲身を切り裂いた。

「くっ…!?!」

だんだん煙が晴れてきて、同時にGN粒子の濃度が低くなっていき、ハイパーセンサーが元の調子に戻る。

「くっ…ああああ!!」

突然ラウラは眼帯を取り、ファングスラッシャーをプラズマ手刀で弾く。それに気づいた僕はファングスラッシャーを自分の手元に戻す。

眼帯が取れたラウラの目は金色に輝いていた。しかし、ラウラは驚きを隠せない顔になっていた。

「貴様…！貴様もヴォーダン・オージェを持っているのか!？」

何時の間にか僕の目はイノベーターの目になっていたようだ。

「いや、君とはまったく違う力さ!」

そう言つてウイングセイバーを展開する。ウイングセイバーは一直線にラウラ目掛けて飛んでいく。

「はあああああ!!!!」

ラウラは眼帯を取った途端に反応速度が速くなり、僕のウイングセイバーを躲しながらこちらへ迫ってくる。

相手はプラズマ手刀を構えてきているので僕もエクスカリバーを構えるが、プラズマ手刀と別の剣が交わった。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さん!？」

僕の目の前には普段と同じスーツ姿でIS用近接ブレードを軽々と扱う千冬さんが立っていた。

「模擬戦をやるのは構わん。イーが、アーリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

「わかりました」

僕とラウラは素直に頷き、ISの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へと変換され、弾けて消えた。

「織斑、デユノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

何時の間にか戻ってきていた一夏が素で答えていた。

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい!」

「僕もそれで構いません」

返事し直す一夏にシャルルが追従する。そして、千冬さんは改めてアーリーナすべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」  
パンツ！と千冬さんが強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。

## 第十七話 地獄の番犬とメガネの女の子と模擬戦（後書き）

お気づきの方はいらっしゃいますが、ラウラ戦での煙幕からの奇襲は00のセカンドシーズンの刹那対リボンズ戦が元です。

第十八話 生徒会役員になりまして（前書き）

どうも、キンケドウです。

それでは続きをどうぞ。

## 第十八話 生徒会役員になりまして

「……………」

「……………」

場所は保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

一夏に感謝すると思えばこれだった。もうちょっと感謝の気持ちがあってもいい気がする。

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことがなくて安心したぜ」

「ISの保護装置のおかげだね」

「こんなの怪我のうちに入らな——いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味——つつつつ——！」

……。 （バカなんだろうか。） 一夏の思考

「バカってなによバカって！バカ！」



「一夏さんこそ大バカですわ!」

一夏って心を読まれやすいのか?

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん?」「あ、シャルル。ご苦労様」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。部屋に入るときに面白いことを言っていた。…一夏は聞き取れなかったみたいだけど。だが、鈴とセシリアは僕のようにしつかりと耳にしたようで、かああつと顔を真っ赤にして怒りはじめた。

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね!こここここれだから欧州人って困るのよねえっ!」

「べべっ、別にわたくしはっ!そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ!」

ふたりともまくし立てながらさらに顔が赤くなっている。なははは、モテる男は辛いな、一夏よ。(リア充は死ね!)…今ラウラの声が聞こえた気がした。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね?」

流石フォローの天才、シャルルだな。フォロ方フォロ四郎に匹敵する程じゃないか?

「ふ、ふんっ!」

「不本意ですがいただきましたきましょっ！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひったくるように受け取って、ペットボトルの口を開けるなりごくごくと飲み干す。ネットで知ったんだけど、冷たいものを一気に飲むと体に悪いらしいよ。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだらー」

ドドドドドドッ……！

「な、なんだ？何の音だ？」

「……嫌な感じがする。じゃ、シャルルと一夏、ここはふたりで力を合わせて解決してくれ！」

保健室の窓を開けて外に出る僕。

「あ、おい！」

保健室から走って逃げると、保健室のほうからドカーン！と大きな音が聞こえた。あそこに居なくてよかった気がする。

僕は走り続けて第三整備室に着いた。

「ただいま」

「え……あう……お、おかえり……」

扉を開けて『ただいま』と言うと、簪が僕を出迎えてくれた。見たところ、あれから殆ど作業は進んでいないようだ。しかも僕を見てホッとしている。もしかして…

「あー、ごめん。心配かけた？」

「う……うん……大丈夫だって……確信してた……」

「何時の間にか僕は簪から絶大な信頼を得ていたのか。うれしいな（何時の間にか僕は簪から絶大な信頼を得ていたのか。うれしいな）僕が笑顔で言う。…しまったあああ！！思った事を口にしてしまったああ！！どこの小鷹君だよ！！？」

「え！？あ…あう…あう…」

顔を真っ赤にして俯く簪。…恥ずかしいよね…うん…

「あ、あー、ところで。何か変わったことはあった？」

「え、えっと…そうだ…さっき…生徒会の人が呼んでた…」

「誰を？」

「ゆ…ひ、氷川…くん…」

「堅いなあ…あの時みたいに優人でいいのに」

「あの…時…？」

「ほら、僕が第三アリーナに行くとき、どさくさ紛れて僕の名前を呼んだでしょ？」

「き…聞こえてたんだ…」

「うん、まあね。ところで、生徒会の人が呼んでるって？」

「うん…優人がここに来たら、生徒会に来てほしいって……」

「……わかった。それじゃ、僕はいくね。ISの作成、頑張つて」

「うん…！」

僕は第三整備室を後にし、生徒会室を目指した。

…結論を述べましょう。迷いました。はい。ろくに調べもしないで出ていったのがバカだった……

「生徒会室つて…どこだよ…」

「あら？あなた、生徒会室に用があるの？」

何となくつぶやいた言葉を聞かれたのか、後ろから声をかけられた。振り向くと知らない女子がいた。リボンの色から察するに二年生だ。もう一度顔を確認すると見覚えがある気がした。うーん、思い出せない……

「…誰ですか」

見覚えあるけど知らない人だ。どうしょ。

「あら、私を知らないの？私は生徒会長よ。名前はー」

ちやうど自称・生徒会長が言葉を続けようとしたところで、前方から粉塵を上げる勢いの女子が竹刀片手に襲いかかってきた。

「覚悟おおおっ!!」

竹刀を持った女子は明らかに自称・生徒会長を狙っていたが、僕は自称・生徒会長の盾になるように立った。そして常に片手で持ち歩いている木刀で相手の竹刀を弾き、木刀の柄を叩き込み、気絶させた。

「いきなり襲いかかってくるとか、発情期ですか？コノヤロー」

…一度言ってみたかった。

「おおー、やるね。君」

「この程度なら」

「へえ…今日は一人か」

「？何故生徒会長さんは狙われてるんですか？」

「それは…って、あら、あなた氷川くんじゃない。その話も含めて話してあげるから生徒会室に行こうか」

「はあ…」

その後、自称・生徒会長に連れられ、生徒会室に着いた。…自称・生徒会長と会った場所から一分もない場所でしたよ、はい。

「まあ、適当にかけて」

「はい」

近くにあった椅子に僕は腰をかける。

ガチャリ…

ドアの開く音がして振り返る。

「ただいま戻りました、会長」

「ん、ご苦労様」

入ってきたのは三年生の女子だった。眼鏡に三つ編み、いかにも『お堅いが仕事はできる』風の人でら片手に持ったファイルが非常によく似合っている。そしてこっちを見る。

「あら、こんばんわ、氷川くん。私はお嬢様に仕える布仏<sup>うつほ</sup>。虚<sup>うつほ</sup>よろしくね」

「はい、よろしく願いします。…ってお嬢様？生徒会長が？」

「虚、お嬢様はやめてよ」

「すみません、会長」

「あの…お嬢様って？」

僕が疑問に思ったことを言う。

「それはひ・み・つ」

…あれ？思ったよりドキツとしない……

「んもう、リアクションが薄いなあ…おねーさん、泣いちゃうよ？」

「はあ……」

どいうリアクションが正解なんだろうか？

「素っ気ないわね…まあいいわ、改めて自己紹介するわね。私は現生徒会長の更識楯無よ」

…自称じゃなかったんか。あれ？更識？

「更識？簪との同じ名字？」

「簪ちゃんは…私の妹よ……」

気のせいだろうか、簪のことを口にすると途端に暗くなった気がした。

「それに、布仏って本音さんと同じ名字ー」

「ああ、そういえばあなたは本音と同じクラスだったわね。そうよ、本音は私の妹よ。あ、今お茶を出すわね」

「あ、どうも」

…普段の本音さんからはこんなお姉さんは想像出来なかったぜ。

「はい、どうぞ」

「あ、どうも」

生徒会長も紅茶の入ったティーカップを受け取り、一口飲む。僕も香りを楽しみながら一口…こ、これは！？紅茶ー

「で、氷川くん、早速本題に入るけどいいかな？」

解説出来なかった…まあ、いいか

「はい。それで…僕が呼ばれた訳は？」

「うん、今回の学年別トーナメント戦の事でね、お願いがあるの」

「トーナメント戦？」

「ええ。今回は前回のクラス代表戦の二の舞にならないようにタッグマッチに変えたの」

「それは初耳ですね」

「あら、そうだったの？まあ、いいわ。それで、念には念をと思って、あなたには今回のトーナメント戦に出場せずに警護の方にまわってほしいの」

「警護…ですか？」



「そう。あなたはISを二台所持していて、両方強力なのは知ってるけど、片方はかなりオーバースペックとわかっているわ。だから警護にあたってほしいの」

「でも、警護にまわるだけだったら別に僕が出場してもいいんじゃない？」

「実はね、警護にまわってもらってもう一つの理由があって、それはあなたが強過ぎるってことなのよ」

「僕がですか？」

さっき僕のISが両方強力だの言ってたが、ブレイヴは他のISより少し優れてるだけだと思ってたんだが…

「ええ。上の学年の専用機持ちのペアならまだわからないけど、同学年の専用機持ちのペアはあなたには勝てないと思ってね、そのバランス調整のためよ」

え、僕の腕はそこまですごいと見られていたのか。

「…わかりました。当日は警護にあたりましょう」

「意外にすんなりと受け入れるわね？」

「確かにライセンスを使えば出場出来ないと宣告されても出場出来ますけど、それよりも警護にあたった方が他の生徒達の為になるんですしたらそっちを優先しますよ」

「ありがとね。あ、後もう一つ」

「何です？」

「あなた、生徒会に入らない？」

「…はい？」

突然何を言ってるんだこの人は？

「あなたの成績なら生徒会に入っても問題無いだろうし、私もちょっとあなたに手伝ってほしいこともあるから」

「手伝ってほしいこと？」

「ええ。雑務だけど」

「それだけ！？いや…待てよ…」

このまま生徒会に入ればもしもの時に融通がきくようになるか？いや、それはライセンスで間に合っているな。んー、でも生徒会に入ればしつこい部活の勧誘を避けられるか？

「冗談よ。私があなたに手伝ってほしいことは織斑一夏くんの護衛よ」

「一夏の？」

「ええ、彼はあなたのように強くないからね、誰かが守らなくちゃならないの。勿論、一夏くんにも強くなってもらう予定だけどね」

「あなたは…何者ですか？」

この発言、明らかに表の舞台の者とは思えない。恐らく裏の――

「察しいいいわね。そう、私の家、更識家は対暗部用暗部よ。そして私はその当主って訳」

「なるほど…大体目的はわかりました」

とある暗部が一夏を狙ってるから守らなくちゃならないってわけか。

「感がよくて助かるわ。で、生徒会に入ってくれるかな？」

そう言いながら、手に持った扇子を口元に寄せる楯無さん。

「…わかりました。生徒会に入りましょう」

暗部に関われば情報も入ってくるようになるからな…

「うん、ありがとね氷川くん　そしてこれからよろしく！」

そして扇子を広げる楯無さん。そこには『感謝』という文字が書いてあった。

「…それで、生徒会での僕の役職はやっぱり雑務ですか？」

「ううん、優人くんはかなり強いからね。副会長として私をサポートしてもらっわ」

「副会長ですか…で、主な仕事はやはり一夏の監視ですか？」

「そこら辺はいいわ。学園にいる限り安全だろうし。他には…特にこれと言って仕事はないから普段通り生活して構わないわ」

「それじゃ、必要な時に僕の力を使うと？」

「そういうことね」

「なるほど…では、大体話は終わったみたいですし、そろそろ帰ってもいいですか？」

「ええ、構わないわ」

僕はカップに残っている紅茶を飲み干し、席を立つ。

「虚先輩、紅茶美味しかったです。それじゃ僕はー」

ドアノブに手を掛けた時だった。

「氷川くん」

名前を呼ばれて振り向くと真剣な顔で楯無さんが僕を見ていた。

「私の妹を…頼める？」

それは仕事などではなく、簪の姉としての頼みなんだとすぐにわかった。

「…はい。でも条件があります」

「何？」

「簪と何があつたかは知りませんが、絶対、簪と仲直りして下さい。分かり合えないままなんて悲しいだけですから」

「…わかつたわ、絶対に簪ちゃんと仲直りしてみせる」

その時の楯無さんの顔はとてもきれいだった。

そして僕は生徒会室から出て行った。…あ、生徒会長がなんで狙われてるのか聞くの忘れた。

## 第十九話 PF強化？計画（前書き）

いよいよ第二巻の終盤に入りました。

あの青いヒーローのアイテムが登場です。

お詫び。閑話の話は本編に関わらないと言いましたが…考えた結果、関わることとなりました…すみません。

それでもいいという方は続きをどうぞ。

なんなんだったらやめちまえ！糞作者という人は即戻るボタンを押してください…

## 第十九話 PF強化?計画

生徒会室を去った後、僕は部屋に籠っていた。今考えているのはPFの容量についてだ。PFは基本武装プリセットを持たないため通常のISより容量が多いのだが、主武装となるパッケージが最大でも2つしか入らないことが問題点だ。

今日の鈴とセシリアを助ける際にサーバーニヤを使おうとした時にはPFの中にはサーバーニヤが無かった。これはサーベラスのパーツとハ口とハ口達のカレル等を入れるためにデータを抜き取ってしまったためだ。

普段使わないパッケージはパソコンの外付けHDDのようなもの(以下HDD)に一時的に入れてある。最初はこれを接続しながらISを展開すればいいと思っていたのだが、実際に展開してみるとHDDは待機状態と同じ扱いにならず、物質のままだった上に展開に15秒程のタイムラグが生まれた。タイムラグはHDDの中身とPFの中身を入れ替える作業が起こったためだ。いざという時の対処にならない上、HDDを破壊されてはたまらない。

「どうしたものかね」

まったくいい案が思い浮かばず、その日はベッドに倒れこみ、そのまま寝てしまった。

翌日。

僕は教室に入って席に着いてすぐに考えを始めた。

(うーん…どうすれば…)

「あ、優人。なあラウラのAIC対策について聞きたいんだけど？」

「しかし、HDDと一体化させるとかなり大型化するからな…  
…しかも、HDDで容量増やしても5つぐらいが限界だし…ブツブツ…」

「おーい？優人？優人！！」

突然の大声に驚いてしまった。どうやら一夏は僕が考え事をしている時にずっと話かけていたようだ。

「な、何？一夏？」

「だから！ラウラの対策を教えてくれよ！」

「あ、ああ、あれか。君の零落白夜で斬りつける。はい終了」

「それじゃ避けられちゃう可能性があるじゃねーか！昨日の一件があるんだから真面目に答えてくれ！！」

昨日…？ああ、保健室に置き去りにしたことが。

「あれね。結局なんだったの？」

「女子達が俺とシャルルにタッグを組まないかって来たんだよ」

「それで？どうしたの？」

「俺とシャルルで組むことにした」



ああ、原作でもそんな感じだったかな？まあ、どうでもいいけど。

「そりゃよかった。今回のタッグマッチに僕は出られなくなったからね」

「なんでだ？」

「生徒会長から出るなと言われたんだよ」

「生徒会長から？どうしてだよ」

「秘密。あ、ラウラ対策はちゃんと考えてるよ。武装だけ」

「武装だけかあ…まあ、後はシャルルと打ち合わせだな」

「あ、そういえばシャルルは？」

「ん、忘れ物があるから取りに行ったぞ？」

「そうか…」

（あ、今はPFだよ。うーん、小型で大容量か…そんな未来技術みたいのがあるわけ無いか…というか前世に比べたらこの世界はかなり発展してるからなあ…ん？待てよ…未来技術…！！そうか！その手があった…！！）

僕は教室の窓を開けて身を乗り出した。

「おい！優人！！どうしたんだ！？」

後ろから一夏に声をかけられる。僕は振り向き、一夏に伝言を頼んだ。

「今日は僕早退するから！山田先生と千冬さんによろしく！」

僕は窓から飛び出し、クアンタを起動した。え？なんでクアンタがあるかって？そりゃ、中身を入れ替えたからに決まってんでしょ。

ソードビットを展開し、量子ゲートを作る。目的地はあのムーンレイスっぽい場所だ。

ゲートをくぐるとすぐに緑が広がった。僕はクアンタでゆっくり下降し、地面に着地してクアンタを解除した。そしてパーツ置き場へとむかった。

「えーと…これじゃない…これでもない…」

カタカタカタカタ…とキーボードを弾く音だけが聞こえる。…やっぱり、神様に頼んでないものは入っていないのか？

パーツ置き場のパソコンを操作し始めて数十分。やっと見つけた。

「あつた…！PETとチップ…！」

僕が探していたのはロックマンエグゼシリーズで活躍した携帯端末機、PETだ。これならPFに容量に余裕を持たせることが可能になる上、最新型の携帯も手に入るという一石二鳥作戦だ。

僕の考えたことはこうだ。未来技術という単語から前世と比べる他

に思い浮かんだのはロックマンエグゼだった。ロックマンエグゼのアニメではファルザーとグレイガのデータやソウルユニゾンのデータをチップに移していたことを思い出したからこれをPFに活かせないか？と。

「PETをまずは作るか」

機械からPETの設計図（神様からもらった脳内設計図にはなかった）を取り出し、PETを造った。そしてそれをPFの待機状態になるよう改造した。因みにPETのデザインは最終章6のデザインだ。5と迷ったが、こっちのほうが高性能そうだし、スマホに近いデザインだったから、6のデザインにした。ロックマンはいない。入りたいけど。

「よし、問題のパッケージだ……」

僕はPETの中のパッケージのデータをブランクチップに書き込む。

……結果は……

成功だった。

クアンタのデータはすっぱりと入り、チップのなかにはギリギリもう一つのパッケージが入りそうな容量だ。他世界とはいえ、未来技術すげえ……流石、ファルザーやグレイガのデータを入れる事が出来た技術だ。

試しにチップをスロットインしてISを展開してみる。

ほとんど前と同じくらいのタイムで起動に成功。展開の時のイメージはロックマンエグゼのアニメのクロスフュージョンを思い浮かべてくれればいい。

その後、僕は他のパッケージもチップ化してパーツ置き場から対ラウラ&ある意味一夏専用武装のパーツを取り出して地球に戻った。今回は日帰りすることが出来た。

コンコン

「はい？つて、優人！？今日どこに行ってたの！？」

一夏の部屋をノックするとシャルルが出て来た。

「え、秘密さ。それより一夏居る？」

「むー…一夏ならシャワー浴びてるよ」

シャルルが不機嫌そうな顔をする。なんで？

「そうなんだ。じゃあ待とうか」

「なら、僕お茶淹れるね」

「ありがとう」

僕は椅子に腰をかけるとシャルルが日本茶を持ってきてくれた。

「はい、優人」

「ん、ありがとう」

お茶を一口。うん、美味しいね。シャルルと話す話題も無く、しばらく、沈黙が続く。

「…ね、ねえ…優人。今度さ…僕と買い物に、行ってくれない？」

モジモジしながらシャルルが僕に聞いてきた。

「ん？買い物？いいよ」

僕が言う途端に顔をパツと笑顔にした。

「本当に！？絶対！絶対だよ！？」

「う、うん…」

ハイテンションなシャルルに少し引いてしまう僕。そんなやりとりをしてると風呂場のほうからガラガラと音が聞こえた。

「シャルル、出たぞ？」

風呂場の方から一夏が出て来た。

「や、一夏。君にプレゼントだよ」

「お、優人。何くれるんだ？」

「対ラウラ戦用武装さ。これを白式の待機状態の物に装着しといってくれ」

そう言つて僕はポケットから小さな黒いブロックを取り出す。

「これは？」

「僕が試作してるISの容量増加装置。でもこれは一度使うと使い物にならなくなる上、武装が一つしか入らない不良品なんだ」

このパーツは前回の鈴とセシリアを助ける時に使ったミサイルが入っていたものを修理したものだ。…正直、今後使う気がないから修理する必要はなかったけど、親友の為だからね。

「へえ？じゃあこの中に入ってる武装が本番でしか使えないってことか？無茶あり過ぎるだろ」

「心配しなくても一夏が手に取ればすぐに使い方のわかる武装さ」

「ねえ、優人。どんなの？」

「んー…やっぱり、ネタバレしておいた方がいいか…その中身は一夏なら知ってると思うがビームマグナムだ」

「ビームマグナム？」「ビームマグナム！？」

シャルルは頭に？マークを浮かべている。それに対し、一夏は興奮している。

「そ、強力なビーム兵器さ。あ、使い終わったら僕に返してよ？そ

の技術は量産されると色々とまずいから」

「強力なビーム兵器って…各国が試験段階<sup>トライアル</sup>の武器を軽々と作る優人って本当に何者!？」

シャルルは驚きを隠せないようだ。まあ、普通の反応なんだろうけど。

「まあ、気にしないで。使い方はIS展開後に指示を出せば展開されるからね」

「軽くあしらわれた!？」

突っ込みもキレがいいね。流石優等生。

「わかった。でも、なんでビームマグナムなんだ？」

「理由はただ一つ、AICはビーム兵器には弱いんだ。そしてその出力が高ければ…?」

「あ!AICを貫通して、ダメージを与えられる」

シャルルが僕の質問に答えた。

「ご名答。弾は全部でリロード分を含めて15発。一夏の知ってる通りさ」

「わかった」

「後、これはアドバイスだ。ビームマグナムを展開するのは二対一、

または一対一の時がベストだよ」

「なんでだ？」

「一夏は遠距離武器に慣れてないし、それに一夏のISにはセンサー・リンクがついてないからね、一夏が当て易くするためにはターゲットを一つに絞らなきゃいけないんだよ」

シャルルが僕の補足説明をしてくれた。

「成る程な。じゃあシャルル。本番ではサポート頼むぜ」

「まかせて」

「んじゃ、俺はこれで」

「ああ、これ、サンキューな」

そう言っで一夏は僕があげた容量増加装置を見せる。

「うん、それじゃ二人とも頑張って」

「「おう！（うん！）」」

僕は一夏の部屋を後にした。

そして…学年別トーナメントの日がやってくる…



## 第十九話 PF強化?計画(後書き)

色々グダって申し訳ない…作者のわがままでカオスな展開になってきてしまってます…ごめんなさい…

**第二十話 学年別トーナメント、一回戦、試合開始！（前書き）**

今回は原作丸写しがばかりで量がかなり多くなってしまいました。  
すみません。

では、続きをどうぞ

## 第二十話 学年別トーナメント、一回戦、試合開始！

一夏視点…

六月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。その慌ただしさは予想よりも遥かにすぐく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それらからやつと開放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室へと走る。ちなみに男子組は例によってこのただっ広い更衣室をふたり占め（優人は用事があるらしく、既にいなかった）である。気前のいいことだ。たぶん、反対側の更衣室では本来の倍の女子生徒を収容して、大変なことになっているのだろうけど。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見る。そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

あんまり興味がなかったので話もそこそこに聞いていたのだが、シヤルルには俺の考えていることが筒抜けだったらしい。くすつと笑

われてしまった。

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

鈴とセシリアはやはりトーナメント参加の許可が下りず、今回は辞退せざるを得ない状況になっていた。普通の生徒ならいざしらず、ふたりは国家代表候補生でありその中でも選りすぐりの専用機持ちである。それがトーナメントで結果を出すどころか参加すらできないというのは、おそらくふたりの立場を悪くする要因になるだろう。…一度、優人になんとかならないかと聞いたが…

『直せることは直せるけど、その国に僕が修理したなんて事実がどこから漏れたら色々と面倒だから直したくない』

と言われてしまった。

「自分の力を試せもしないっていうのは、正直辛いだろ」

例の騒動を思い出し、俺は無意識のうちに左手を握りしめていた。それがあまりに力がこもっていたらしく、シャルルがさりげなく重ねた手でそれとほぐしてくれる。

「感情的にならないでね。彼女は、おそらく優人を除いた一年の中では現時点での最強だと思う」

「ああ、わかってる…さて、こっちの準備はできたぞ」

「僕も大丈夫だよ」

お互いにISスーツへの着替えは済んでいる。俺はIS装着前の最終チェック。シャルルは相変わらずの男装用スーツ（ボディラインの肉付きを男のそれに見せる仕組みらしい）の確認をそれぞれ終えた。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよな」

どういう理由なんだか知らないが、突然のペア対戦への変更がなされてから従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしい。本当なら前日にはできてるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選クジで作っていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？どうして？」

「待ち時間に色々考えなくても済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふつ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちよっと考えがマイナスに入ってたかも」

なんともシャルルらしい考え方だ。この一見正反対の俺たちだからこそ、馬が合うのかもしれない。しかしまあ、やっぱりシャルルが俺に合わせてくれているんだろうなと思う。

ペアでの特訓を重ねて改めて思ったが、シャルルはすごく性格がいい。そして優しい。俺の周りにはおおよそいなかったタイプなのだ。（優人は優しい時もあるけど）多少大げさに女神か天使に見えてし

まってもそれは仕方がないだろう。そうだ！誰が俺を責められると  
いうのか！

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。俺もそれまでの思考  
は一旦停止して、そこに表示される文字を食い入るように見つめた。

「……え？」

出てきた文字を見て、俺とシャルルは同時にぽかんとした声をあげ  
た。

一回戦の対戦相手はラウラ、そして第のペアだったのだ。

優人視点移行：

現在、僕はアリーナの上空にいる。装備してるISはブレイヴハー  
ツ。え？なんでPFじゃないかって？だってさ〜ブレイヴハーツの  
IS装着時間増やしかないといつ第二次移行するかわからなくな  
つちやうじゃないか。…まあ、本当の理由は楯無さんに使うなって  
言われたからだけ。暇だし、その過程を思い出そう…

「へ？あの青い機体と緑の機体は使わないで欲しい？」

「ええ、あれを使ってしまうと様々な機器に障害を起こしてしまう  
でしょう？だからよ」

「むー、それじゃあまり僕が警備にまわる意味がないんじゃない？」

「大丈夫よ。あなたのもう一つのISでも十分強いから それにも

しもの時はその青い機体とか使ってもいいわよ』

『クアンタとサバーニヤは本当の切り札<sup>ジョーカー</sup>って訳ですね』

『そういう事。じゃ、何かあれば連絡するから、アリーナ上空で警備を頼むわね』

…とまあ、こんな感じでした。え？ だったらサーベラスはどうしたって？ まだエンジンの調整がうまくいかねえんだよ！ クソツタレ！ ！ 何が安定度の増したTEエンジンだ！ めちゃくちゃ安定しないじゃないか！ …… 実際はもうすぐ調整出来そうなんだが…

…あ、トーナメント表が出来たみたいだ。僕のハイパーセンサーに映し出される。…何という僥倖だろうね、一夏？ 初戦がいきなりやりたい相手なんて。

数分後、アリーナに一夏たちが現れた。

一夏視点移行…

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと五秒。四、三、二、一……開始！

「叩きのめすー!!」

俺とラウラの言葉は奇しくも同じだった。

試合開始と同時に俺は瞬間加速を行う。この一手目が入れば戦況はこちらの有利に大きく傾く。

「おおおっ！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。――来る。

俺はラウラと直接戦った鈴とセシリアの意見を聞き、話し合った結果、確実な手段でAICを破る方法は思いつかなかった。それなら、手段は一つ。――意外性で攻める。

「くっ……！」

しかし、その程度の戦略など読んでいたのだろう、俺の体は腕を始めに、胴、足とAICの網に捕まえられる。押して引いても動かない。見えない腕に掴まれたかのように、身動き一つ取れなくなってしまった。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

ああ、わかりたくないが、想像はつく。ガキン！と巨大なりボルバ―の回転音が轟き、白式のハイパーセンサーが警告を発する。慌てるなよ。何も一対一って訳じゃないんだ。――な？

「させないよ」



シャルルが俺の頭の上を飛び越えて現れる。同時に六一口径アサル  
トカノン《ガラム》による爆破<sup>バースト</sup> 弾の射撃を浴びせた。

「ちっ……！」

肩のカノンを射撃によってずらされ、俺へ向けて放った砲弾は空を  
切る。さらにたたみかけてくるシャルルの攻撃に、ラウラは急後退  
をして間合いを取った。

「逃がさない！」

シャルルは即座に銃身を正面に突き出した突撃体勢へと移り、左手  
にアサルトライフルを呼び出す。光の糸が虚空で寄り集まり、一秒  
とかからず銃を形成した。

これこそがシャルルの得意とする技能『<sup>ラビッド・スイッチ</sup>高速切替』だ。事前呼び出  
しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び  
出し。それはシャルルの器用さと瞬時の判断力があってこそ光る。

「私を忘れてもらっては困る」

ラウラへの追撃を遮るように打鉄を纏った幕が現れる。防御型IS  
である証明とも言うべき実体シールドを展開し、銃弾を弾きながら  
シャルルへと斬りかかった。

「それじゃあ俺も忘れられないようにしないと！」

ラウラのAICから開放された俺はすぐさまシャルルの背中へと瞬<sup>イグニ</sup>  
時加速<sup>ツシヨン・ブースト</sup>。ぶつかる瞬間、くるとシャルルが宙返りをしてお互いの  
場所を入れ替えた。このコンビネーションは特訓の賜だと言える。  
ガキンッ！

俺と箒、互いの近接ブレードがぶつかり合って、火花を散らす。

俺は箒と刀を何回となく打ち合いながら、スラスタ―推力を上げた。加速度を増した斬撃は徐々に箒を後方へと押していく。

「くっ！このっ……！」

押され続けたことに焦れた箒が大きく刀を頭上に振りかぶる。――ここだ！

「シャルル！」

「うん！」

ギインッ！左手を添え、真横にした雪片式型で俺は箒の一撃を受け止める。その刹那、俺の背中にずっと控えていたシャルルが両脇から手を伸ばす。その手に握られているのは面制圧力に特化した六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》二丁。この至近距離ならまず外しはしない。

箒が青ざめるのがわかったが、もう遅い。シャルルは引き金を引いた。

「！？」

ふっと突然目の前の箒が消える。ショットガンの連射はむなしく空を切った。――何が起きた？

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。そのワイヤーブレードのひとつが箒が箒の脚へと伸びていて、アリーナ脇まで遠心力で投げ飛

ばす。どうやらさっきの緊急回避はこのワイヤーによる牽引だったらしい。

「なっ、何をする!」

しかし、味方を助けたとはほど遠いラウラの行動は、本当にただ邪魔だからどかしたというだけだったようだ。床にたたきつけられた筈が怒声を発する。

しかし、当の本人は聞く耳持たず。すでに俺たちへの攻撃を始めている。

プラズマ手刀を展開したラウラが左右から連続で斬りかかってくる。

「数の差で私が有利だな」

「たかが二倍程度で!」

確かに、このラウラ・ボーデヴィツヒの實力は確かに化け物じみている。今現在こうして俺との接近戦を繰り広げながら、同時にワイヤーブレードを駆使してシャルルを牽制、俺から引き離している。六つ同時には操っていないものの、上手く順番に射出と回収を行って連射による多角攻撃を繰り広げていた。だが、優人との訓練に比べればどうということはない。あいつとの訓練ではラウラのワイヤーブレードより素早く動く、六つの遠隔操作の剣と優人自身の相手を同時にしていたからだ。

「シャルル、無事か?」

「一夏こそ。すぐにサポートに入るからね」

「いや、いい。このまま例の作戦で行こう」

『……。わかった』

ワイヤーブレードを捌きつつ、プライベート・チャンネルで短くやりとりを交わして、俺たちはあらかじめ決めていた作戦へと移る。それは『箒を先に倒そう』作戦だ。――苦情は後で受け付けよう。この作戦を決めたのは単純な理由だった。とにかく、ラウラの戦い方は一対多に特化している。つまりそれは自分側が複数での戦いを想定していないということだ。なので、まず箒を助けることはしないだろう。

それなら先に箒を撃破、一対二の状況でたたみかけるをそれでもラウラは前述した通り一対多の状況で戦えるだけの能力を持っている。――けれど、そこが落とし穴だ。ふたり組というのは一足す一だが、答えが二とは限らない。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「なっ……！？バカにするなっ！」

ラウラの射程圏内から離脱したシャルルはすぐさま箒へと間合いを詰める。よくわからないが挑発だったのだろう、さっきの一言でいきなり箒は頭に血が上った。

ガギンツ！箒の刀を、シャルルは瞬時に呼び出した近接ブレード《ブレッド・スライサー》で受け止める。そしてそのまま左手の《レイン・オブ・サタディ》が火を噴いた。

「くっ……！」

射撃の印象が強いシャルルだが、とにかくにもその能力の最大の特徴は『器用さ』なのである。格闘も人並み以上にこなす上、そこ

へあの『ラビット・スイッチ高速切替』。斬り合っていたかと思えばいきなり銃に持ちかえての近接射撃、間合いを離せば剣に変更しての接近格闘。押しでも引いても一定の距離と攻撃リズムを保ち、攻防ともに高いレベルで安定したその構えを突破することは容易ではない。ミラージュ・デザートこの戦法を『砂漠の逃げ水』と呼ぶらしい。いわく『求めるほどに遠く、諦めるには近く、その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ、緩やかなる褐色の死へと進む』……なるほど、納得だ。

「先に片方を潰す戦法か。無意味だな」

ラウラは箒を数に入れて無いのだろう。けれど俺たちにとって意味はある。とりあえず今の俺の役目はラウラの猛攻を耐え凌ぐことだ。

「どうだろうよ！」

両手プラズマ手刀＋ワイヤーブレードの波状攻撃。これを捌くのは容易なことではないが不可能なことではない。俺は全身を使い、ラウラに食らいつく。

「うおおおおっ！」

優人との特訓の甲斐があつてか、ラウラを少しずつ押していく。

「くっ……！そろそろ終わらせるか」

ラウラがプラズマ手刀を解除をする。――まずっ！  
刹那、ビシッと体が凍り付いたかのように俺の体が止まった。ラウラは片手を突き出し、その手のひらは俺に向けている。

（くそっ！A I C！！）

「ではーさらばだ」

ラウラの大型レールカノンが俺に向けられている。が、レールカノンが火を噴く直前にラウラは黄色い影と入れ替わるように俺の目の前から姿を消した。

「お待たせ！」

俺はシャルルに助けられたと同時にその場を離脱。直後、俺たちのいた場所は砲弾の雨で吹き飛んだ。

「シャルル、間一髪。助かったぜ。サンキュ」

「どういたしまして」

「筈は？」

「お休み中」

そう言っついつと視線を向けるシャルルに従って俺もそちらを見る。アリーナの隅でシールドエネルギー0、IS各部損傷甚大の筈が悔しそうに膝をついていた。

「さすがだな」

「その言葉はこの試合に勝ってから、ね」

両手に持っていたアサルトライフル銃を捨てて、シャルルは新たに武装を呼び出す。ショットガンとマシンガンがそれぞれ形を成した。

「ここからが本番だね」

「ああ、見せてやろうぜ、俺たちのコンビネーションを！」

そして、反撃の狼煙が上がる

特別話    H A P P Y    B I R S    D A Y ! ! 梓 ! ! (前書き)

今日の赤坂のイベントで咄嗟に思いついたストーリーです。現在や  
つてゐる話とまったく関係ないのでご注意ください。そして、時間軸は結構  
先のお話です。

けいおんが苦手な方は即バックを。

本編の続きはもうすぐできそうです。

それではどうぞ。



特別話 HAPPY BIRTH DAY!! 梓!!

11/10 3:00

「という訳で明日は中野梓の誕生日パーティーを行いたいと思います」

「「「イエEEEE!!」」」

「い……いえ……」

現在、僕たちは定休日の五反田食堂で明日の中野梓、あずにゃんの誕生日パーティーの計画を練っている。

「明日は平日だが、僕と一夏、簪は休みを貰っている。弾と和馬は？」

「俺は勿論、許可をもらったぜ」

弾が答える。

「俺は無理だったな。だから整理券をもらったら一回帰ろうと思ってる」

和馬も続けて答える。

「うむ…和馬は残念だな…並ぶ時間を考えなければ…」

「徹夜すんじゃないの?」

「馬鹿野郎！！ルールは厳守！！当たり前だ！！」

「ゆ、優人…でもよお…徹夜組がいるぜ？」

「だから、俺たちは始発前の時間に並ぼうと思う」

「でも、どうするんだ？」

「ネカフェだと学生はお断りだからな…とりあえず、近くのホテルをとつてある。そこで待機だな」

「相変わらず準備がすげえな、優人」

当然だ。前世では僕の命を救ってくれたアニメだからな…

「備えあれば憂いなしってな。…さて、待機メンバーは和馬以外のみんなでいいんだな？」

「おう。あ、でも簪、女だぜ？むさ苦しい男と同じ部屋じゃ嫌じゃないか？」

一夏が気を使う。

「わ…私は…大丈夫…梓ちゃんをみんなで祝いたい…」

「…一応、簪の事も考慮して部屋を用意しておいたが、いらなそうだな…よし、待機時間を潰すためにけいおんのBDを持って行こう」

「当然だろ、優人？」

「ふっ…まあ、そうだな」

弾が言った言葉に同意する僕。

「では、和馬のみ始発組という事で、バスデーカードを貰った後は今日、待機するホテルに集合だ」

「ん？なんでだよ」

「実はなファンの参加自由型でバスデーパーティーを開く為にそのホテルを貸し切った。あと、父さんのコネでメインキャストと山田監督が来てくれるそうだ」

「……な、なんだってー！！？」

僕の爆弾発言に物静かな簪すら大声を上げた。

「ふっ…この位、当然さ」

「優人…！お前が一夏の幼馴染でよかったぜ…！」

「竹達さんに会える…！みんなに会える…！！」

「お前やつぱりすげえよ…！」

「や、山田監督…エへへ……」

「みんな大興奮のところ悪いが、そろそろ時間だ。では、18時に駅に集合だ」

「『はい！』」

「そして、始発組の和馬、頑張ってくれ！！」

「おう！あずにゃんの為ならこの命！差し出さぜ！！」

「では、解散！！」

一方、その頃ヒロインズは？

「む？シャルロット！今日、一夏がかなり浮かれていたのだが、知らないか？」

箒が廊下でシャルロットに話し掛ける。

「あ、箒。うーん…わからないな…放課後になると同時に優人と一緒に学園から出て行ったし…優人もどこに行っただろ？」

「あら？おふたりともなにしたらっしゃいますの？」

ふたりが話していると金髪でいかにもお嬢様なセシリアと一緒にいた鈴がむこうから歩いてきた。

「ああ、今日の放課後に一夏と優人がすぐに居なくなったことを話していたのだ。ふたりは知らないか？」

「残念ながらわたくしは…」

「あー、なんか弾の家に行くとか行ってたわね」

「む、それは本当か!？」

篤が声を上げる。

「ああ、本当のようだ。嫁は五反田食堂とかいうところにいる」

「うわっ！ラウラ！！おどかさないでよ…それに一夏はラウラの嫁じゃないでしょ…」

突然、ラウラが後ろから声を掛けられたことに驚くシャルロット。

「ISをステルスモードにされた時のために発信機を付けておいたのだ。さて、早速追うか」

「ああ、そうだな」

「優人さんのことも気になりますし…そうしましょう」

「一夏が何すんのか暴いてやるんだから…」

「あれ!?!みんな一夏に発信機を付けてたことに突っ込まないの!?!  
?まあ…僕も行くけど…」

満場一致ということで一夏（&優人）を尾行することが決定した。

「あら?何か面白そうね、おねーさんも着いて行くわ!」

「……せ、生徒会長!?!」「……」

「やん そんなに驚かないでよ。実は簪ちゃんも放課後に居なくなつたのよ。どうも優人くん達と一緒にいたいからね。だからおねーさんも着いて行くわ」

「そ、そうなんですか…では、気を取り直して出発だ!!」

「」「」「おー!」「」

こうして、一夏（&優人）尾行チームが完成した。

18:00

「よし、全員集まつたな」

「おう。俺と弾は万全だぜ。簪は？」

「わ…私も…大丈夫…」

「うっし、それじゃ、行きますか!」

続く…のか？



第二十一話 行き過ぎた力（前書き）

第二十一話です。

どうぞ。



## 第二十一話 行き過ぎた力

一夏視点…

「はぁ！」

俺は零落白夜を発動させながらラウラに斬りかかっていく。

「ふん…シールド無効化攻撃か…だが、当たらなければいい話だ」

ラウラはAICによる拘束攻撃を行おうとするが、俺はそれを急停止、転身、急加速で躲す。

「ちっ…ちよろちよろ目障りな！」

立て続けの攻撃にワイヤーブレードも加わり、その攻撃は熾烈を極める。だが、俺一人で戦ってるわけじゃない。

「一夏！前方二時の方向に突破！」

「了解！」

シャルルが援護をしてくれる。

「ちい！小癪な！」

ワイヤーブレードをくぐり抜け射程圏内に入る。

「無駄だ。貴様の攻撃は読めている」

「誰が普通に斬りかかるって？」

俺はそれまで足下へと向けていた切っ先を起こし、体の前へと持つてくる。

「!？」

斬撃で読まれるなら、突撃で攻める。シンプルだが、そのシンプルさゆえに腕の軌道が捉えにくくなる。線より点のほうが、捕まえるのは難しい。

「無駄なことを！」

ビシッと体が固まる。A I Cの網が俺の全身を固定した。

「腕にこだわる必要はない。ようはお前の動きを止められればー」

「……俺だけでいいのか？忘れてんのか、知らないのか、わからないが、俺たちはーふたり組なんだぜ？」

「!？」

ラウラは慌てて視線を動かすがもう遅い。シャルルが零距离でショットガン《レイン・オブ・サタデイ》を構えていた。シャルルが引き金を引くとラウラは緊急回避行動を起こすが、間に合わない。俺はA I Cの網から抜け出す。やはりA I Cは『停止させる対象物に意識が集中させていないと効果を維持できない』ようだ。

そして、ラウラは今度はシャルルに意識を向けるようになった。俺

はハイパーセンサーから『あれ』の展開命令を送る。すると、俺の手と腰に粒子の系が集まりその形を作る。形を作り終わると、手にはビームマグナム、腰にはそのエネルギーパックが形成された。

そして俺はラウラにビームマグナム向けてシャルルにプライベート・チャンネルで話しかける。

『シャルル、ビームマグナムを使う。離れてくれ』

『了解、一夏』

そう言うとシャルルは距離を取りつつ、手に持ったマシンガンでラウラを撃つと、ラウラは回避し切れず、AICでそれをとめる。今だ！

ドシューーン！！ガコンッ！

大きなビームの発射音が響いた後、排莢音が響く。ビームはラウラに真っ直ぐ飛んで行く。ラウラはすぐ気がついたが、僅かにビームが足を掠めた。掠めたただだったが、ラウラのシールドエネルギーは一気に減る。

「！？貴様……何をした！」

「さあな……」

俺は立て続けに引き金を引く。ラウラも勿論今度は大きく避けるがそれが仇となりシャルルに狙い撃ちにされる。

3発目は肩のレールカノンを掠め、レールカノンを破壊する。4発目、5発目は外した。そして5発分のエネルギーパックを使い切っ

た俺は新しいパツクをリロードする。

「当たれええええ!!」

リロードし終えた後、狙いを定め、引き金を引く。

ドシューーン!!

シャルルが誘導してくれたおかげで今度は直撃!そして爆煙が起こり、なにも見えなくなる。そして煙が晴れると変形する金属に取り込まれそうになり、悲鳴を上げるラウラの姿があった。

ラウラ視点移行…

(こんな……こんなところで負けるのか、私は……!)

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えのないミスだ。しかし、それでも――

(私は負けられない!負けるわけにはいかない……!)

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体C-0037。

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

――暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。

わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

それがある時、世界最強の兵器――ISが現れたことで世界は一変した。

その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージェ』――擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。そしてまた、その処置を施した目のことを『ヴォーダン・オージェ境界の瞳』と呼ぶ。

危険性は全く無い。理論上では、不適合も起きない――はず、だった。

しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

この『事件』により私は部隊の中でもIS訓練において後れを取る事となる。

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

世界は一変した。――私は闇からより深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった。

そんな私が、初めて目にした光。それが教官との……織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようにだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだから」

その言葉に偽りはなかった。特別私だけに訓練を課したということはないが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はIS専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にもならない。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に――憧れた。

その強さに。その凜々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。

「ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。」

そう思ってから私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけて話しにいった。

いや、話などできなくてもよかった。ただ側にいるだけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所からふつつと力が湧いてくるのが感じられた。

それは、『勇氣』という感情に近いらしい。

そんな力があつたからだろうか、私はある日訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？」

その時――ああ、その時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。

私は、その表情になぜだか心がちくりとしたのを覚えている。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ると、わかる時がある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな……いつか日本に来ることがあるならISの開発者の一人と共に会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに――」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情、それは――

（それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから――許せない。教官をそんな表情をさせる存在が。そんな風に教官を変えてしまう弟、それを認められない。認めるわけにはいかない。  
だから――

（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると！）

ならば――こんなところで負けるわけにはいかない。あの男は、あれは、まだ動いているのだ。動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。そうだ、そのためには――

（力が欲しい）

ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。  
そして、そいつは言った。

『――願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるなら、それを得られるなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！  
だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

Damage Level……D.  
Mind Condition……Uplift.  
Certification……Clear.

《Valkyrie Trace System》……boot.

優人視点移行…

試合を見てみると、突然ラウラの体が変形したISの金属に取り込まれ、黒い全身装甲フルスキンのISのような『何か』の姿へと変わった。そしてそれは一夏へと突撃し、斬撃を加え、一夏はISの展開を解除させられてしまった。だが、一夏はISの展開を解除されて尚、その『何か』に突っ込んでいく。

「あいつ……バカか！？楯無さん！！」

……ああ、思い出した。何かに似てると思ったら、千冬さんが使っていた『暮桜』じゃないか。となると…あれは『VTシステム』か。小耳に挟んだシステムなのだが…説明は後にしよう。僕は監視室で待機する楯無さんと呼ぶ。

『優人くん！？』

「楯無さん、あれは恐らく『VTシステム』です！」

『やっぱりそうなのね！…取り敢えず今はフィールドの一部の展開を解除するわ！そこからアリーナへ入って！』

「了解！」



楯無さんとの通信後、僕のちょうど真下の位置にあるフィールドに穴が出来上がる。

（……正直、クアンタとか使いたいけど…中にラウラがいるからな…）

クアンタなら一発であれを破壊出来るが、中にいるラウラへの被害が大きくなる気がする。まあ、ブレイヴハーツでも充分かな？そして、僕はそのままブレイヴハーツで急降下する。そして、一夏の盾になるような形で箒によって止められている一夏の前に立つ。

「一夏、なにやってんだ！ISの展開解除されて突っ込むバカがいるか！？」

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

「…そんなことはわかってる。ISの展開が出来ない一夏はさっさと出て行って。後は僕が何とかする」

僕はエクスカリバーを構え直し、黒いISと対峙する。

「でも！」

「一夏！優人の言う通りだ！今のお前に何が出来る？白式のエネルギーも残ってない状況で、どう戦う気だ」

「ぐっ……」

箒がもう一度一夏に忠告する。それでもあいつに、あの黒いISに

一発叩き込みたいのだろう。

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返し！』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は収拾されるだろう。だからー」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」

「そうだ」

「違うぜ等。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

「ええい、馬鹿者が！ならばどうするっていうのだ！エネルギーはどのみちー」

「……はああ……これだから馬鹿は困るよなあ……シャルル、君のリヴァイヴならコア・バイパスを利用して白式にエネルギーを移すことが出来るだろう？」

僕はシャルルの方に向き直し、言う。

「うん、確かに出来るよ」

「なら、残りのエネルギーを白式に送ってくれない？」

「うーん…わかった。いいよ」

よかった。シャルルも了承してくれた。

「本当か！？じゃあ、シャルル！早速ー」

「けど！」

びしっとシャルルが一夏に指指して言う。珍しく、その言葉は強く、有無を言わせぬものだった。

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。ここまで啖呵切って飛び出して、お膳立てもされてんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら明日から一夏は女子の制服で通ってね」

「うつ……！い、いいぜ？なにせ負けないからな！」

一夏の女子の制服姿か…面白そうだな……

「……はい、リヴァイヴの残量エネルギーを全部移し終えたよ。白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

そして一夏の右腕にもう一度白式と雪片式型が構築される。僕は白式にエネルギーを送る際に取り外した拡張端子を回収し、一夏の隣に並ぶ。

「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」

「充分さ」

「一夏、行けるか？」

「ああ、いつでも」

「い、一夏っ！」

それまで傍観していた箒が、弾かれたように口を開いた。その目はまっすぐ一夏を見つめていて、真剣そのものである。

「死ぬな……絶対に死ぬな！」

「何を心配してるんだよ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ！私はお前がー」

「信じる」

「え？」

「俺を信じるよ、箒。心配も祈りも不必要だ。信じて待っていてくれ。必ず勝って帰ってくる」

その表情はTHEイケメンでした。全く……こいつあ……

「じゃあ、行ってくる」

「あ、ああ、勝ってこい！」

「…頼むぜ、優人。零落白夜、発動」

その時の零落白夜はいつもより鋭く、まるで鍛え抜かれた刀のようだった。

「任せろ……僕の後に続くんだ、一夏っ！」

そういつて黒いISに突っ込んでいく、僕。

「おう！」

後ろからは一夏が続く。

「うおおおおおー！」

僕が突っ込んでいくと、黒いISも同じく突っ込んでくる。正に真つ向勝負。僕のエクスカリバーを握る力が強くなる。そして、激突する。が、所詮は千冬さんの偽物、型などは真似事。簡単に見切れる。僕は斬りあげて、相手の刀を弾き、相手の刀を空に上げ、そのまま横一閃し、切り抜ける。

キュイイイイン……

その時、謎の違和感を感じた。

（！？なんだ…今の感覚…）

だが、考えている暇はない。一夏にすぐに命令を出す。

「今だ!」

「おおおお!」

一夏は零落白夜で黒いISを縦に真っ直ぐ断ち切る。正に一刀両断。

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いISが真っ二つに割れる。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

力を失って崩れるラウラを抱きかかえて、一夏はひとりつぶやく。  
それが果たして聞こえたかどうかは、ラウラだけが知るところだろう。

## 第二十二話 あれからとそれから（前書き）

更新かなり遅れてすみません。実はテスト期間に入ってしまった、筆（？）がなかなか進みませんでした。

今回は『霧氷黄泉路さん』と『jodyさん』のアイディアを使わせていただきました。……まだ伏線の段階ですけど。

後、25万アクセス越えとお気に入り登録件数250件突破ありがとうございました。それでは第二十二話をどうぞ。

## 第二十二話 あれからとそれから

優人視点…

僕はラウラが保健室に運び込まれるのを確認すると、すぐにモニタールームに向かった。

「ご苦労様。でも、一夏くんにやらせたのは関心しないわね」

僕がモニタールームに入ると楯無さんが声をかけてきた。

「すみません。でも、あいつはあそこまで言うと言きませんから」

「そんなこと言って、本当は一夏くんにやらせたかったんでしょう？ 普段のあなたの性格なら気絶させてでも引かせてるでしょうしね」

「ばれてましたか。まあ、いいです。それで、ラウラの件ですけど――」

「それに関しては問題無いわ。既に学園がドイツ軍に問い合わせてるの。それよりも、私はあなたが何故VTシステムだとわかったのか教えてほしいわね」

「ISの開発に関わる者なら誰でも知ってるシステムじゃないですか？ 別に珍しくもないでしょう」

「確かにそうだけど、私はあなたは何故VTシステムの詳細をどこで知ったかを知りたいの」



「……ちよつと前に色んな国をハッキングしていたら見つけたんですよ。たまたまね」

まあ、実際は断片的に僕の記憶にVTシステムのことがあったって理由なんだけどね。

「…なるほどね。でも、それだったらあのラウラちゃんにシステムが組み込まれてたこともわかるんじゃないの？」

「僕が見たところではシステムのことしか書いて無かったんですよ」

「ふうん……。取り敢えず、今回の件でトーナメントは中止になったわ。一回戦だけはやるみたいだけど」

「そうなんですか…」

「今日はこのぐらいかしら。部屋でゆっくりと休んで」

「はい。あ、ラウラのISはどこにありますか？」

「え？第二整備室に運ばれたらしいわよ。それがどうかした？」

「いえ。わかりました。ありがとうございます」

そう言って僕は生徒会室を後にし、第二整備室へと向かった。

ラウラ視点移行…

「う、あ………」

ぼやつとした光が天井から降りてくるのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気がついたか」

その声には聞き覚えがある。聞き覚えがある――どころではない。どこで聞こうと一瞬で判断できる、自ら愛してやまない教官こと織斑千冬だ。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理はするな」

「何が……起きたのですか……？」

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだな。VTシステムは知ってるな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のISに積まれていた」

「……………」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメ

ージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

「私が……望んだからですね」

あなたに、なることを。

その言葉を口にはしなかったが、教官には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……は、……」

誰なのだろうか？自分がラウラであると、どうしても今の状態では言えなかった。

「誰でもないのならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……………」

そう言って教官が励ましてくれたことに驚いて私は何を言えばいいのかわからなかった。そして、気がつくと教官は出ていってしまった。

優人視点移行……

「また盗み聞きか？氷川」

保健室から出てきた千冬さんの第一声がそれだった。

「人聞きの悪いことは言わないで下さいよ。僕はラウラに用があつて来たんですから。そしたら、織斑先生との話声が聞こえて待ってたんですよ？」

「そうか、なら早く用件を済ませろよ」

「はいはい」

プシュー……。

「お邪魔するね、ラウラ」

「……お前は、氷川か」

部屋に入るとラウラは一瞬身構え、睨んできたが、僕だとすぐ分かり、構えを解く。

「何の用だ？」

「君のISについてかな」

「……………」

「君のISだけど、僕が修理しておいたよ」

「何故、そんなことを？」

「うーん、まあ、気まぐれさ」

「……そうか」

僕の適当な返しにどこか不満そうにするラウラ。

「それじゃ、それだけ。じゃあね」

「あ、おい！氷川！」

「ん、何？」

「その……今日は助かった。あ、ありがとう……」

「……どういたしまして。あ、僕のことは優人でいいから。僕はラウラって呼ばせてもらってるし」

「ああ、わかった。優人」

「それじゃ、今度こそ出ていくね」

そして、僕は自室へ向かい、夕食も摂らずにベットに伏せた。自室へ向かう途中、『トーナメント中止……！』『織斑ちゃんと氷川くんとの交際は無し……！？』などという声が聞こえたが、聞こえないことにした。

ユサユサ……

「……と……うと……ゆうと……！優人！」

僕は誰かに起こされた。

「んア……？誰だあ……」

眠たい目を擦って、見ると目の前に一夏がいた。

「なんだ……一夏か……。なんの用だ？冷やかしならサバーニヤで蜂の巣だぞ？」

「そうじゃねえよ。今日は大浴場が使える日なんだぜ！」

大浴場という単語を聞いてビクツと体が反応する。

「……一夏、それは嘘ではないな？」

「嘘ついてなんの得があるんだよ！？さあ、早く準備しろ！」

そう言われて僕はベットの近くにある棚から風呂桶を取り出す。風呂桶にはシャンプー、ボディソープ、手ぬぐいが入っていた。

「よし、行くか」

「早っ！」

「当たり前だ、大浴場がすぐに使えるようにと予め用意していたのさ！」

「まあ、いいか。行こうぜ！」

「応！」

そして辿り着いた大浴場の入口にはシャルルが待っていた。

「シャルル〜待たせたな〜」

「あ、遅いよ、二人とも！」

「ごめん、僕のせいだね。フルーツ牛乳でも奢るから許してよ」

「あ、よく風呂上りに飲むって言うあれだね！飲んでみたかったんだ〜」

「はは、そりゃよかった。で、入る順番はどうする？」

「へ？なんで順番なんて決めるんだ？」

「…シャルルが女だってこと、忘れたの？」

「あ！そうか！だから順番決めなきゃなんないのか！ならシャルル、一番に入るか？」

「ううん、公平にジャンケンにしよう。僕はそれがいい」

「でもなあ……」

「まあまあ、シャルルもこう言ってるし、ジャンケンしようよ」

「わかった。じゃあ、早速。最初はグー！」

「『ジャンケン、ポン！』」

結果的に一番が一夏で、二番目に僕。そして最後にシャルルとなった。で、現在、シャルルと風呂場の更衣室にて待機中。

ガラガラ……

「上がったぞ」ホカホカ

「おう。じゃ、シャルルお先に」

「うん、ごゆつくり」

……シャルルはちゃんと壁を見てるからな！？僕と一夏の裸は見えないからな！！

ガラガラ…

「おお〜広い〜！」

そして、体と髪を洗ってでかい浴場に入る。

「ふい〜生き返る〜……。賽の河原のあの温泉には敵わないけどね」



……なんだろう。イノベーターの直感が今すぐこの風呂を出ると告げている気がする。

ガラガラ…

「お、お邪魔します……」

振り向くと生まれたままのシャルルがいた。……タオルで前を隠してるけど。

「シャ……シャルル……？」

「あ、あんまりジロジロ見ないで、優人のえっち……」

「う、ごめん！」

僕はすぐに反対方向を向く。そして、ちゃぷん……とお風呂に入ってくる音が聞こえてきた。

「……ッ！じゃ、じゃあ！僕はもったつぷりお風呂を堪能したからで、出るね！」

「まつ、待つて！」

僕がお風呂から出ようとすると後ろから抱きつかれた。や、柔らかいものがふ、ふたつ当たってるんですけどー！！し、静まれ！もうひとりの僕！！

「そ、その、話があるんだ。大事なことから、優人にも聞いて欲しい……」

「わ、わかったよ……わかったから、と、とりあえず離れてくれな  
いかな？」

「あ、ご、ごめんね！」

慌ててシャルルが僕から離れる。シャルルが離れると僕はゆっくり  
と湯船に浸かる。そして、背中合わせの状態でシャルルの言葉に耳  
を傾けた。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前……学園に残るって話？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだっ  
て思える居場所を見つけれないし、それに……」

「そ、それに？」

「……………」

……なんで沈黙？急に会話が止まり、浴場全体が静まりかえる。  
ぴとっ……と、僕の背中にシャルルの手が触れてきた。

「シャルル……？」

そのまま手は僕を後ろから抱きしめる。そしてまた僕の背中に柔ら  
かいものが……。

「優人が、ここにいればって言うてくれたから。そんな優人がいる

から、僕はここに居たいと思えるんだよ」

「……………」

僕はシャルルの言葉で落ち着き、顔が緩む。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ？」

「そう。僕のあり方。一夏と優人が教えてくれたんだよ？」

「一夏はともかく……………僕は何もしてないよ？」

「ううん、優人は教えてくれたよ。優人って自分に関することはどこまでも鈍感だね。憎たらしいくらい」

「む、むう……………ごめん……………（一夏じゃないのに鈍感って言われた……………）」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことは昔みたいにシャルロットと呼んでくれる？ふたりきりのときだけでいいから」

「昔みたく……………か。わかったよ、シャルロット」

「ん……………」

嬉しそうにシャルロットが返事をした。それはまるで子供のような無邪気さで、あのいつもの屈託のない表情がすぐに想像出来た。

「と……ところでさ、ま、また当たってるんですけど……」

「あ、ああっ、うん！そうだねっ！ば、僕、先に体と髪と洗っちゃうねー！」

シャルロットはやつと自分の状態を自覚したのか、ばしゃばしゃと慌てて水音をたてながら僕から離れて湯船に上がろうとする。

「いや、もう僕先に出たい……のぼせそう……」

「わ、わかった……ごめんね……それじゃ、お、おやすみ……」

「いや、謝らなくても……まあ、いいや、うん、おやすみ」

そして、僕は浴場を後にし、着替えて、一夏の部屋に行ってフルーツ牛乳を一夏とシャルロットの分で二本、先に戻っていた一夏に渡して、そのまま自室に戻ってベットにダイビングをした。今日は疲れた……色んな意味で。

翌日、教室に着くといつもの風景が広がっていた。僕はいつも通り自分の席に座り、SHRを待つ。そして、入ってきたのは顔が真っ青な山田先生だった。

「み、みなさん……おはようございます……」

「や、山田先生……？」

明らかに元気のない山田先生に対し、僕は思わず声をかけてしま

う。

「これから提出する資料の書き直しと……後、……ブツブツ……」

「や、山田先生……?」

「あ、今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介はすんでいるといいますが、ええと……」

なにやら山田先生の説明はよくわからないが、……なんだろう、とても面倒なことが起こりそうな気がする。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

この声は……!まゆーー

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

しいじゃないですよー、シャルロットですよー。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」

なるほど……山田先生はこれからが面倒臭いのか。

「え?デュノア君って女……?」

「おかしいと思った!美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことはー」

「ちよっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ザワザワッ！教室が一斉に喧騒に包まれ、それはあっという間に溢れかえる。ー何かまずい気がするからPFにサバーニヤをスロツトインしとこう。

ドカアアアン！と盛大に教室の壁に穴が空く。

「ー夏あっ！ー！」

そこからは鈴がISを展開した状態で出てきた。顔は烈火の如く怒り一色。

「死ね！ー！！！」

「ちょ、俺はー」

鈴は両肩の衝撃砲をフルパワーで開放していた。ーが、それは一夏に当たることはなかった。何故なら一夏と鈴の間にラウラが割って入ったからだ。

「助かったぜ、サンキュ。……っていかお前のISもう直ったのか？すげえな」

「……優人が直してくれたんだ」

「へー。そなんーむぐっ！？」

「「なっ！？」」



もお話ししなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

「アハハハ、それは大変だね！でも、僕も用事があるから！じゃ！」

「あつ！！お待ちなさい！！」

サバーニヤを起動して、四基のシールドビットを一夏のほうへと飛ばし、教室から逃げ出し、宇宙へと向かった。そして、僕はその日の授業をサボった。

ちなみにせっかく宇宙に行ったのでまたパーツを取ってきました。今回はビルトビルガーとソウルゲインのパーツです。



## 第二十二話 あれからとそれから（後書き）

では、御意見、御感想をお待ちしています。

次の更新も結構、遅れそうです……。けいおんの映画もありますし……。

（UCのep4は見ました！）

## 第二十三話　いつもの日常……？（前書き）

どうもお久しぶりです。テスト期間を終え、けいおん！の映画を見、家庭用エクバをやり始めたらこんなにも遅くなってしまいました。本当にごめんなさい。

それと今回は割と急ぎ足で書いた為、いつも以上におかしな部分があると思います。

では二十三話をどうぞ。

## 第二十三話　いつもの日常……？

一夏がラウラにキスされた日の夜、僕は部屋でその日に取ったパンツの特徴を見てみると、ドアのノック音が響いた。

「はい？誰ですかあ〜？」

「私だ」

ドア越しに聞こえてきたのはラウラの声だった。なんのようだろうか？僕は不思議に思い、ドアを開ける。

「どうしたの？」

「実はだな……嫁を私の物にするために仲間達に相談していたのだが……イマイチ決まらなくてな、そこで同年代の男子に聞いてみてはどうか？ということに決まったのだ」

「なるほど。で、僕のところに来た訳か」

「そういうことだ」

嫁、嫁言ってるけど一夏はなんでちゃんとした返事を出さないの  
だろう？バカなんだろう？……。まあいいや。とりあえず…止めた方がい  
いのかもしれないけど、面白そうだから教えてみるか。

「あのね、日本の求婚方法の一つに『夜這い』っていうのがあるんだよ」

「ヨバイ？」

「そ、相手が寝たのを確認して、相手の布団の中に潜り込むことだよ」

本当はもつと先のこともするんだけどね。流石に学園でそれはマズイだろうからやめておこう。

「なるほど！それで我が嫁を独占出来るのだな！では、ヨバイとやらを今夜早速実行に移させてもらおう！」

「うん、頑張つて」

そして、ラウラは部屋を出ていった。……明日が楽しみだ。

つと、僕はビルガーとソウルゲインの組み立てとブレイヴハーツの強化パーツを作らなきゃ。

現在の開発進行度

ソウルゲイン 15%

ビルトビルガー 10%  
ブレイヴハーツ

BHオートクチュール

デストロイ

・重火力型 30%

シューティングスター

・高機動型 30%

翌日、教室に入り、一時間目の準備をして、パソコンを取り出してソウルゲインとビルガーのシステムの部分などの作業を進める。とは言ってもソウルゲインは殆ど調整しなくてもいいんだがな。ただ、ビルガーだけはテストドライブがあるからこれの調整が必要だ

けど、T Eエンジンほど手間がかからないから別に気にはしていない。

え？お前朝食はとったのか？とったさ。僕は朝食は毎回学食に行かないで、自室で焼きたての食パンにイチゴジャムを食べると決めているんだ。これだけは譲れない。……でも、何度か学食に行ったことあるんだよね……イチゴジャムパンだったけど。

その後、S H Rが始まる直前、窓からシャルロットが『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』を部分展開して一夏と共に入ってきた。

「到着っ！」

「おう、ご苦勞なことだ」

シャルロットの顔を見ると顔が青ざめていた。入って来て目の前に千冬さんが居たら流石にビビるよねあ。

「本学園はI S操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。がしかしー」

すばあん！と教室に響き渡る出席簿アタックの音。うーん、いつ聞いても清々しいね。

「敷地内でも許可されていないI S展開は氷川以外禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……。すみません……」

優等生のシャルロットが予想外の規律違反をしたというのはクラ

スメイトにも衝撃的だったらしく、みんな啞然としている。

そんな一夏とシャルロットが怒られている隙に箒とラウラ、セシリアが入ってきた。そして何事も無かったかのように着席。

「デユノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「はい……」

ふたり揃って意気消沈しながら席に座った。

そしてチャームが鳴り、SHRが始まる。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

ここ、IS学園は一般教科も履修するが、中間テストは無く、代わりにすべて期末テストに回されるという最悪なシステムなのだ。転生前の自分なら歓喜と悲鳴を同時に上げていただろう。何せ、テスト範囲が広くなるのだから。転生して頭脳チート付けてもらわなければ、恐らく僕の夏は補習だけで終わっていただろう。

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物なもするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

校外特別実習期間というのはぶっちゃけ、臨海学校だ。初日は丸々一日遊べるので女子はハイテンション。後の二日は訓練なのに。

ちなみに僕は海で泳ぐのはそこまで楽しみではない。前世で海で溺れたり、物を無くしたり色々トラウマがあるのだ。ただ、運動神経は前世よりいいのでサーフィンはしてみたい。……矛盾してるな。

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉強に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

クラスのしつかり者の鷹月さんが素朴な疑問を言う。まあ、この時期に一時的に休むというのは大抵、宿泊先のチエックを兼ねた旅行だろうが。

「山田先生は校外実習の現地観察に行っているので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

それ見ろ！（シーブツク風に）

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？いいな～！」  
「ずるい！私にも一声かけてくれればいいのに！」  
「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろっなー！」

それぐらいで騒ぐ十代女子に飽きた様子の千冬さんは言葉を続ける。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しいを山田先生は仕事で行ってるんだ。遊びではない」

はい、と返事をする一組女子。そして、SHRを終える。

「だ！」「なのよ！」「どいっしょと！」

「ま、まあ、落ち着いて」

その日の放課後、僕は屋上にて箒と鈴に言い寄られた。内容はラウラに何故夜這いを教えたかということだ。

「これが落ち着いていられるか！お前は私の味方をすると言っていたではないか！」

「ちょ、箒、あんた氷川と手を結んだの！？」

「ああ、そうだとも！なのに何故ラウラに夜這いを教えた！？」

「いや、面白そうだったから？」

その言葉と同時に箒は緋宵を抜き、鈴は双天牙月を部分展開して僕に襲いかかる。僕は鈴の攻撃を避け、箒の一閃を木刀で受け止める。

「「ふざけないでくれる？」」

「ご、ごめんごめん。ちょっとした遊びだったんだよ。今度駅前のデザート店貸し切ってあげるから許してよ。それとふたりに一夏とデートする機会も作ってあげるし……」

「ふ、ふん……なら許してやる……」

「あ、あたしもそれなら……」

……軽っ！女性というのは甘い物に弱いと聞くがここまでとは……。  
……いや、一夏のほうが大きいかもしれん。



「「ただし！」」

「うおっ！？」

「「こいつとのデートをやめさせなさい！！」」

ふたり同時にお互いを指差しながら言う。

「そいつは出来ない相談だ。まあ、いいじゃない。ふたりとも一夏とデート出来るんだし」

「「むう……」」

一夏を犠牲にして助かる僕。最低だな。

「なら、絶対！絶対だぞ！」

「じゃないとぶっ飛ばすわよ！？」

そう言っ僕の前から立ち去るふたり。

ふたりと入れ替わるように僕の前に姿を現したのはシャルロットだった。

「や、シャルロット。掃除は終わったのかい？」

「うん。一夏が掃除好きで助かったよ。すぐに終わったしね」

……僕の勘違いだろうか、シャルロットが僕と目を合わせないよううにしている気がする。

「シャルロット、なんで僕と目を合わせないようになっているの？」

「ええ！？いや、それは…その……」

言にくいことなのか……。あ。

「そういえば」

「ひゃっ、ひゃい！？」

何故か声が裏返るシャルロット。

「そんなに驚かなくても……」

「あ、その…ごめん」

「いや、いいけど。それで、この前、買い物がどうか言ってたけど、明後日学園も休みだし、校外特別実習の準備も兼ねて買い物に行かない？」

それを聞いた途端シャルロットは目の色を変えて、言った。

「ほ、本当！？」

「うん。ちょうど僕も買いたいものあるし」

「わ、わかった！約束、約束だよ！？」

「ああ。じゃ、明後日ね。僕はこれから用事があるから」

「うん！明後日ね！」

よかった。機嫌は直ったみたいだ。

喜んでるシャルロットを残し、屋上を出ていく。そして第三整備室へ。……の前に溜まってたラノベ読もうかな？

研究室に入るといつもの先客が居た。最近は来てなかったが、まだISの作成をしていたらしい。……おかしいな、僕が手伝ったからそろそろ出来上がってもいい頃だが？

「や、簪」

「あ、優人……ひ、久しぶり……」

「まだIS出来上がってないの？」

「う、うん……あとはマルチロックオンシステムだけ出来てない……」

「マルチロックオンシステムかぁ……。あ、サバーニヤのデータがあるけど使う？」

「あれは……ロックオン数が多すぎて使えない……でも、参考になるからほ、欲しい……」

「いいよ、僕と簪の仲なんだ。遠慮することないよ」

「ゆ、優人と私の……はう……」

僕が近付こうとすると急に簪の頭から煙を出したように見えた。

「ど、どうした!？」

「だ、大丈夫、なんでもない……」

「お、おう……」

サバーニヤのマルチロックオンシステムのデータが入ったメモリーを渡そうとするが、僕と顔を真っ直ぐ見ようとしなない簪。……まさか、嫌われた!?(ガビン!)

「ごめん……簪、僕何か悪いことでもしたかい？」

「い、いや、そうじゃなくて!そ、そのお……」

「ほっ、僕は簪に嫌われた訳じゃないのか……よかった……」

「う、うん……データ、ありがとう……それで、今日はどうしたの?」

「ん?ああ、新しいパッケージの作成とブレイヴハーツのオートクチュールの作成に来たんだ。もうすぐ校外特別実習だからね。その時に専用機持ちはパッケージのテストをやるらしいから僕も参加しようと思って。流石にPFはマズイから」

「へえ……」

「簪も校外特別実習行くんでしょ？」

「私は……行かない……」

「どうして？」

「ISは出来てないから……テスト運転とか微調整の時間も足りないし……」

「……それでいいの？」

「え？」

「本当にいいの、それで？僕は嫌だね。……じゃあ、簪。僕と一緒に《打鉄式式》を完成させるよ！」

「え？でも……いいの？自分のをやらなくて……？」

「そんなものどうにでもなるから。さあ、サーバーニヤのデータを開いて！」

「う、うん」

そして、僕と簪はサーバーニヤのデータを基に《打鉄式式》専用のマルチロックオンシステムを構築した。気付けば既に夜の8時（作成から1時間程）を回っていて、簪は完成と同時に寝てしまった。……相当ひとりで悩み続けて疲れたんだろうな。僕はそつと簪に毛布を掛けて、《打鉄式式》にデータをインストールする。その後、オートチュールの重火力型の作成を行った。

そして僕は重火力型を完成させ、簪が目を覚めたのは朝の6時

だった。

「あ、私……いつの間に？」

「やあ、おはよう簪。ごめんね、簪の部屋を知らなかったからさこの部屋に寝させちゃって」

「ううん……全然構わない……それより、優人はずっとそれを？」

「うん、まあね。さて、ん〜つと！そろそろ朝食の時間だし、一緒に食べない？」

「う、うん…！」

簪は珍しく大きな声で返事をした。簪は《打鉄式》を待機状態にして僕のほうへ走ってきて、一緒に食堂へ向かう。

「簪は何食べる？」

「私は……洋食セット……」

僕は券売機の2枚のボタンを押した後、洋食セットのボタンを押して、出てきた食券の1枚を簪に渡す。

「はい」

「あ、ありがとう……優人も同じ……なんだね……」

「ん？ああ、僕は朝は必ずイチゴジャムをたっぷり塗った食パンを食べると決めてるんだ」

「けいおん！の……唯ちゃんみたい……フフッ……」

「あ、けいおん！見てるの？」

「うん……梓ちゃんが好き」

「僕は唯だね。そうだ、今度映画やるし、一緒に見に行かない？」

「う、うん！！」（それってデートだよね！？）

簪は映画を見に行く約束をしてかなり喜んでいる。誘ってよかった。

僕達は食堂のおばちゃんから洋食セットを受け取り、空いてる席に座って楽しく談笑しながら朝食を取っていると、セシリアとシャルロットがこちらにやってきた。

「「優人（　！　）（さん！）」」

バンツ！とテーブルを叩くふたり。簪がかなり驚いてる。

「「こちらの女性とはどういうご関係ですの！？」」「隣的女子とはどう言う関係なの！？」」

「どういうって……普通に友達だけど？」

あれ？なんで落ち込むの簪？そしてセシリアとシャルロット、何故胸を撫で下ろす。

「「「はあ……」」」

「なんで三人してため息するのさ!？」

「……バカッ」

「簪!？」

そのまま立つて、食べ終えた皿の乗ったトレイを持って走って行ってしまう簪。追いかけようとすると、セシリアとシャルロットに道を阻まれる。

「どいてよ!」

「優人さん、先ほどの女子との関係を詳しく教えていただけませんか?」

「そうだよ、あの子とはどういう関係なのか詳しく教えてよ」

ふたりからは黒い禍々しいオーラが見える。なんだこのプレッシャーは!？その後、なんとかふたりから逃れ、第三整備室に引きこもり、高機動型のオートクチュールを完成させた。……授業はサボるハメになったけど。

現在の開発進行度

ビルトビルガー 20%

ソウルゲイン 30%  
プレイウハーツ

BHオートクチュール

デストロイ

・重火力型 100%

シューティングスター

・高機動型 100%



## 第二十三話　いつもの日常……？（後書き）

……正直、ビルガーとソウルゲインを登場させる場所をどうするか検討中です。サバーニャやクアンタも殆ど活躍してないのでマジどっしょう……オリジナルを挟むつもりですが、今の構想でもかなりオリジナリティが欠けてるのに更にオリジナリティが欠けそうです……（なんせOGsのキャラが出るし……）

それではご意見、ご感想お待ちしております。

## 第二十四話 一般的に言っているとデート（前書き）

未だにエクバの慣性ジャンプの使いどころがつかめない作者です。

最近、新作投稿してみました。新作は昔やったゲームをやり直したら思いついた作品です。まあ、またISとのクロスオーバーなんですけどね

そして、約34万アクセス&約3万7千ユニークありがとうございます！  
ます！とっても嬉しいです！

それでは二十四話をどうぞ

## 第二十四話 一般的に言つとデート

今日は週末の日曜日。つまり、シャルロットとの買い物の日だ。というわけでシャルロットとふたりで街に繰り出している……あれ？冷静に考えたらこれってデートじゃね？

「じゃあ、シャルロット、今日は何買うの？」

「え！？ええと……そう！水着！水着だよ！」

「水着？ああ、臨海学校のか。丁度いい、僕も臨海学校の準備したと思ってたんだ。……あれ、でもなんで水着？持ってきてないの？」

「う、うん……元々、男子として入ってきたから……」

「あ、ごめん……」

「ううん、いいの。それより早く行こう？」

「うん。こんなところで時間を無駄にしちゃダメだよね」

「そうだよ。……あの、さ、手……繋いでもいいかな？」

「え？ああ、はぐれないようにか。いいよ。ゴホン……エスコートさせて頂きますお嬢様」

そう言つて僕は右手を差し出す。

「フフッ… よろしく願いします」

シャルロットは僕の差し出した右手と自分の手を繋ぎ、僕の隣に立って、歩き始める。

そんな様子を見ている人物がひとりいた。

「な、なんで、手を繋いでいますの？」

禍々しい黒いオーラを放つセシリアであった……。

一方その頃、一夏と箒も日本に繰り出していた。……鈴とラウラの尾行つきだが。

「で、箒、まずはどこに行く？」

「む、そうだな……では、アクセサリーショップなどはどうだ？」

「どうだって、お前の買い物なんだからさ、お前が決めていいんだぜ？まあ、いいけどさ」

「そ、それもそうだな……すまない」

「いや、いいって。別に気にしてねーし。じゃあアクセサリーショップは確か……こっちだ、箒」

そう言つて一夏は箒の手を取り、先導する。

「あああ、ああー！」

「どうした、箒？顔が赤いぞ？」

「いいいいや、何でもない！」

「それならいいけど……」

一方、鈴とラウラは……

「何あいつ自然に手を繋いでんのよー！」

「……やはり私はあそこに加わってくるぞ」

「わー！待ちなさい！まだよ！まだ様子を見たほうがいいわ！」

「ふむ……そうだな、そうするか」

果たしてこのデコボココンビは平気なのだろうか？

「着いたな。じゃあシャルロット、一旦、ここで別れよう」

「あつ……」

ぱつと手を離すと、なぜだかシャルロットはみように心残りのあるような声を漏らした。？まだ手を繋いでいたかったのか？

「ごめんね、でも流石に女性物のところに入るのはちょっと、ね……それに、僕も水着見たいし」

「ああ、それもそうだね。うん、わかった。30分後にここで」

「了解。じゃあまたあとで」

女性用と男性用の水着コーナーの間でシャルロットと別れる。……  
やっぱり男性用水着のコーナーが異様に小さい。前世だと平等なの  
になあ。女尊男卑の影響はここまでなのか……。

数分後、意外と早く水着は決まり、会計を済ませ、シャルロットと  
別れた場所に向かう。すると意外なことにそこにはすでにシャルロ  
ットが立っていた。

「あれ？もう終わってたの？」

「あ、ううん。ちょっとね、迷っちゃったからさ、優人に選んで欲  
しいなあって思ってた」

「そうなんだ。いいよ、行こう」

そしてそのままシャルロットと共に女性用水着売り場に入っていく。

(……やっぱり抵抗あるなあ)

日曜日なので女性の客は多く、一気に視線が僕に向けられる。

「ちょっとここで待っててね。すぐに持ってくるから」

「うん、わかった」

試着室の前で待機を頼まれた優人は少しでも気を紛らわすために音

楽プレイヤーで音楽を聴き始める。

「そのあなた」

（あれ？なんか外から呼ばれた気がする。ま、気のせいっしょ）

「男のあなたに言ってるのよ。その水着片付けておいて」

（ああ、僕に言ってるのか。まあ、無視だけど）

優人は音楽プレイヤーの音量を上げて、更に無視する。

「……！……！」

外の女性が何やら騒いでいる。次の瞬間、警備員が後ろから優人の肩を叩いてきた。優人はイヤホンを取り、応答する。

「……なんですか？」

「いや、ね。その女性が君に暴力を振るわれたって聞いたからさ。慌てて来たんだよ」

ふう……と優人はため息を漏らして自分の財布からあるライセンスを取り出す。

「僕は暴力を振るって無いです。むしろ、この女性に命令されただけです。それに、僕、こういうものなんですけど？」

警備員にライセンスを見せると、不思議な顔をした。

「なんですか？これ？」

「はあああ……僕はISの開発者で、如何なる法律も受け付けない  
つていう証明証ですよ。なんなら、日本政府に問い合わせてもいい  
ですよ？」

「ええ！？あなたが、かの有名な氷川優人さん！？こ、これは失礼  
いたしました！」

「いやいや、分かればいいんですよ。…命令する相手を間違えまし  
たね、お・ば・さん」

「ぐっ……！何よ！ブツブツ……」

何やら小言を言いながらその場を立ち去る女性。ああ、スッキリし  
た！バカは最高だね！

「ゆ、優人！大丈夫！？」

中年女性と入れ替わりでシャルロットが来た。どうやら遠目で僕達  
のやり取りを見ていたようだ。手にはふたつの水着があった。

「ああ、シャルロット。全然平気だよ。つか、僕にどの国の法律  
も効かないしね」

「ええ！？そ、それっていいの！？」

「おかしい話だろうけど、ほとんどの国は許してくれてるよ。いく  
つかの国は渋々OK出したらしいけどさ」



「ゆ、優人に常識は通用しないんだね……ハハハ……」

お、なんかそれどつかの第二位さんみたいでいいね！使わないけど。

「あ、水着、見てくれるかな？」

「うん、いいよ」

と、返事をする。僕をシャルロットが引く。僕は持ち前の筋肉で引く張るのを拒むとシャルロットがこっちをちよっぴり涙目で見えた。

「どうしたの？シャルロット」

「ほ、ほら、水着って実際に着てみないとわかんないし、ね？」

「じゃあ、僕の手を離して試着室に入ったら？」

「だ、ダメ！」

「……シャルロット、流石に世間体というものがあるから試着室に一緒に入るうとするのは……」

「うぐう……うん、じゃあ待っててね……」

ションボリしながら試着室に入っていくシャルロット。え？可哀想だ？馬鹿野郎！試着室に一緒に入る一般人がどこにいる！！

「じゃ、じゃあ第！俺は先に出てるから！」

そんな声が聞こえてシャルロットの隣の更衣室から出てきたのは一夏だった。そして、中には箒が。

「え？」

「えっ？」

「ええっ！？」

後ろを振り向くと一組副担任の山田先生と担任の千冬さんがいた。ていうか、試着室に一緒に入る人、身近に居たわ。

「優人、これ、ど…う…かな？つてあれ？」

「うん、似合ってるよ」

試着室から出てきたシャルロットの格好はセパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中クロスして繋げるという構造になっている。色は夏を意識した鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランスよく膨らんだ胸のその谷間を強調するように出来ているのだった。

だが、シャルロットもこのなんとも言えぬ沈黙にキョトンとしていた。

「何をしている、バカ者が……」

一夏と箒の様子を見て、呆れたように千冬さんが呟く。  
次の瞬間、軽いパニックに陥った山田先生の悲鳴がこだましたのだった。

「はあ、水着を買いにですか。でも、試着室にふたりで入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「ていうか、普通、入らないでしょ？」

「す、すみません……」

ぺこりと頭を下げる筈と一夏。最近、一夏って怒られてばかりだな。すると、レジに行っていたシャルロットがこっちに帰ってくる。結局、水着は最初に着ていたイエローの水着にしたみたいだった。もう一方の水色の水着はあまりシャルロットのイメージに合わなかったと僕が指摘したのでやめたらしい。

「あ、デュノアさんも氷川くんを試着室に入れようとしていましたよね。ダメですよ、そんなことしちゃ」

「す、すみません！」

慌てて頭を下げるシャルロット。シャルロットも結構怒られてるよな。

「ところで山田先生と千冬ねー織斑先生はどうしてここに？」

話題を逸らそうと一夏が質問する。

「私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

とは言っても、山田先生はカジュアルな服を着ているが、千冬さんはビツとサマースーツ着てるからなあ……呼びにくいよな。

「ところで、そろそろ出てきたほうがいいんじゃないかな？ 鈴、セシリア？」

千冬さんとシャルロット以外は僕の呼びかけたほうの柱に注目すると、柱の陰から鈴とセシリアが出てきた。

「そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

「鈴は差し詰め一夏のび「わ！ 私も水着買いに来たらたまにあんな達を見かけたから隠れただけよ！！」……ふーん？ セシリアは？」

「わ、わたくしも鈴さんと同じですわ！」

「そうなんだ」

「さっさと買い物を済ませて退散するでしょう」

ふう、とため息混じりにそう言ったのは千冬さんだった。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳さん<sup>ファン</sup>とオルコットさん、ついてきてください。それに氷川くんとデュノアさんと篠ノ乃さんも」

「あ、僕とシャルロットはこれから用事があるのでここで」

「わ、わたくしも一緒にしても!？」

「ごめん、今日はちょっと席を外してもらえないかな?後で埋め合わせするからさ」

僕は女性ふたりをエスコート出来る腕前はないからね。セシリアには悪いけど今回は席を外してもらおう。

「そうですの……」

「ごめんね、セシリア。あ、今日の夜僕の部屋に来てよ。手料理ご馳走するからさ」

「わ、わかりましたわ!」

シヨンボリしていたのにすぐに立ち直るセシリア。わー、単純。じゃない!機嫌を直してくれてよかった。

「じゃ、シャルロット、行こう?」

「う、うん!」

山田先生達とは逆方向に進み始める。

山田先生達と別れてシャルロットと共に来たのは高級料亭だった。

「いらっしやいませ。何名様でしょうか?」

「二名で予約した氷川です」

「少々お待ちを……。確認、取れました。こちらへ」

「どうも」

そう言って連れられたのはとある個室。ここはいわゆるVIPルームというやつだ。

「ゆ、優人？なんでこんな？」

「ん？ああ、前に家族でここに来てさ美味しかったからシャルロットにも食べて欲しいな」と思って予約したんだ」

「でも、こんな個室まで用意して高かったんじゃ……？」

「あ、気にしないで。ISを開発したおかげで使い切れないほどお金持ってるから」

「へ、へえ……」

そんなくだらない話をしていると前菜が来た。シャルロットはそれを口に運ぶ。僕も同じように口に運ぶ。……うん、美味しい。

「ふあああ……僕こんな美味しい料理、食べたことないよ」

「なんでも、このシェフは何力国も回って料理の修行をしたらしいよ。そしてその修行の集大成がこれらの料理らしい」

「じゃ、じゃあ！これから出てくる料理も！？」

「うん、期待していいよ」

シャルロットの顔はとても幸せそうだ。うん、連れて来てよかった。そして一時間後、僕達は昼食を終え、店から出て行く。

「どうだった？」

「うん！とっても美味しかったよ！今度なにかお礼しなきゃね！」

「はは、そんなのいらないよ。僕がやりたくてやってるんだから」

「ううん。そういう訳にはいかないよ。ぜーったい優人が喜ぶものを今度あげるね！」

「それは楽しみだ」

歩きながらそんな話をしていると噴水のある公園に着いた。

「ちょっとここで休憩しようか」

「うん」

ふたりで近くのベンチに座る。

「……優人と出会ったの、こんな公園だったね」

「そうだね。僕が噴水近くで泣いてるシャルロットを見つけて、一緒にシャルロットのお母さんを探したっけ……」

「でも、途中で僕のお腹が鳴っちゃったてさ、優人がクレープ奢ってくれたんだよね」

「ああ、そしたらシャルロットのお母さんが来たんだ」

「あの時は嬉しかったなあ……お母さん……」

「……シャルロット」

「……うん、しみりするのはよくないね！明るく行こう！あ、そうだ！ねえ、優人。僕さ、もうクラスのみんなにシャルロットって名前を言っちゃったからさ、なにか新しい呼び方考えてよ！」

「新しい呼び方？急に言われてもなあ……」

シャルロット、シャルロット……シャルル・ジ・ブリタニア……シャルティエ……シャルティエ？シャル！

「シャルなんてどう？」

「シャル……うん、いいね！じゃあ、優人、これからふたりだけの時はシャルって呼んで！」

「ふたりだけの時？……まあいいか、わかったよ、シャル」

「うん！」

返事をした時のシャルの笑顔はとても魅力的で、思わず見惚れてしまった。



「……ハッ！し、シャル、そろそろ帰ろうか」

「そうだね、することも無いし、帰ろうか」

それから僕達はさっきの会話の通り、くだらない話をしながら帰った。そして、夕食時にはセシリアに手料理をご馳走しました。……あと、料理の仕方も教えました。

第二十四話 一般的に言つてデート（後書き）

キンクリ多くてすみません…

## 第二十五話 それぞれの訓練（前書き）

ごめんなさい、更新かなり遅れました。とある事情であまり執筆が出来ませんでした。

では、改めて。どうも。スパロボOGsをやろうとしたらPS2が壊れていて出来なかった作者です。

今回はかなり終盤がグダグダになっております。マジでごめんなさい。国語力ねーです。

では、二十五話をどうぞ。

## 第二十五話 それぞれの訓練

ブザー！と試合開始のブザーがアリーナに響く。そして、その合図と同時に僕は両手に銃を構え、一夏に向けて発射する。一夏はそれをバレルロールを使って躲し、僕に剣を振るう。

「はあっ！」

「ッ！」

両手の銃を交差させ、剣を受け止める。

「下がガラ空きだよ！」

「なあっ!？」

僕は剣を受け止めながら懷に飛び込み、足払いに近い蹴りを入れ、空中でのバランスを崩し、そのまま相手の体を蹴り上げる。これは潜身脚と呼ばれる技で本来地上で使われる技だが、自分なりにアレンジして空中でも使えるようにした。そして無防備になった一夏に何発も両手銃の弾を撃ち込む。元々、この銃のツインハンドガンモードの威力は弱いため、何発も撃ち込まなければ大したダメージにはならない。カチカチ、と弾が切れた音がする。一夏はその隙を逃さず攻撃してくるが、僕は瞬間加速を使い、一時離脱。僕は両手銃の空になったマガジンを取り出し、量子化させておいた新たなマガジンを呼び出し、装填する。これで、銃のエナジーは回復した。片方の銃のグリップを外し、両手銃を合体させる。そして、もう片方のグリップを合体させた銃と銃の間辺りに移動させると、バレルが伸びる。ショットガンモードの完成だ。そして、向かってくる一夏

に向け、引き金を引く。収束された荷電粒子は一気に拡散し、一夏の逃げ場を囲む。だが、一夏は瞬間加速イグニッション・ブーストを使ってそれを避ける。僕はそれを銃口で追って止まりそうな位置を予測し、引き金を引く。すると、停止した一夏に幾つか当たるが、距離が遠かったため、先程のツインハンドガンの時よりダメージを与えられなかった。そろそろ遠距離で戦うのも飽きてきたので、ケルベロスショット改を量子化させて腰の剣を引き抜き、左肘のファングスラッシャーを手に取り、投げる。

「敵を切り裂け！ファングスラッシャー！！」

「いつ！？」

一夏は僕の投げたファングスラッシャーを雪片式型で捌く。一夏が僕の操るファングスラッシャーを相手にしているうちに剣を構えながら一夏に突っ込む。

「はあああああ！！」

「うおおおお！！」

ファングスラッシャーを気合いの一振りで思いっきり弾いた後、僕の剣を受け止める。鏢迫り合いになるが、僕のISの馬力のほうが弱いので、段々一夏に押される。

「へへ、今回は……俺の勝ちかな！」

「……そうかもしれない。でも、惜しかったね」

「へっ？」

罅迫り合いに夢中になっていた一夏は背後から近づくファングスラッシャーに気付かず、一夏を容赦無く切り裂く。そして、ブザーになる。

『試合終了。勝者、氷川優人』

「っああああ！！また負けたああああ！！」

「一夏は詰めが甘いんだよ。それに、注意力も無いしね。この前僕が教えたことも忘れてるし。総合的に言くと、一夏は技術の吸収は早いくせに、その技術を活かせてないんだよ」

「そうは言ってもよぉ～お前は俺が教わった技術を使うと、更に對抗策を出されるから混乱しちまうんだよ」

「相手が戦い方を変えるならこっちもそれに見合った戦い方をするのが定石でしょう？」

「ぐぬぬ……まあ、でも訓練付き合ってくれてサンキュー」

「でも、どうしたの？いきなり模擬戦がしたいなんて？」

「いや、これから校外実習があるだろ？それに備えて俺も少し位腕上げとかねえとみんなにもっと差をつけられちまう。ほら、今回の校外実習で他の専用機持ちはパッケージが来るけど、俺の白式には使えねえからさ」

「確かに。白式は操縦者の腕次第の機体だからね。一夏は一夏なりに考えてるんだな」

「へへっ、まあな。あ、そろそろアリーナの閉鎖時間だ！戻ろっぜ！」

「うん」

僕達はピットから更衣室に行って、着替え、食堂を目指す。その途中簪が前から歩いてきた。

「お。やあ、簪。『打鉄式』は完成した？」

「う……うん、完成、したから、明日、い、一緒にテスト飛行してほしい……」

「明後日は校外実習だけど……大丈夫？」

「も、もう準備は済んでる！だから……大丈夫……」

「そう。あ、こいつ、知ってると思うけど、織斑一夏。で、一夏、この子は更識簪」

「ああ、よろしくな、更識」

そう言って右手を差し出す一夏。

「……私には……あなたを、殴る権利がある」

……白式のことか。

「え？」

「でも……あの子が完成、したからいい。後、私のことは…簪って呼んで。更識は…嫌…」

「…っ！ああ、わかった。改めてよろしく、簪」

再度差し出した右手を簪が手に取り、握手をする。よかった。ふたりとも仲良くなれて。

「じゃあ、簪、これから僕たち夕食食べに行くけど…？」

「あ、私は、いい。これから、明日の調整を、しておきたい…から…」

「わかった。じゃ、行こう一夏」

「ああ。またな簪」

「バイバイ」

軽く右手を振る簪に手を振り返し、再度食堂への道を目指す。結局、それ以降何もなく一日を終えた。

翌日、授業を終え、簪の飛行テストを見るために第六アリーナに行く。第六アリーナのピットにはISスーツを着た簪がいた。

「ごめん、待たせたかな？」



「うっん……私も、今来た」

「そっか、じゃ、始めようか」

そう言うって僕は腰の専用ホルスターに入ったPETを取り出し、サバーニヤのチップを入れ、起動する。PETが光を放ち、その光が僕の体を包むと、緑と白を基調としたボディと腰に12個、両肩に2個ずつ装備されたホルスタービットが特徴的なサバーニヤが身に纏われた。

「おいで……打鉄式式……」

簪は右手を軽く突き出し、そう言うのと、右手の中指にはめられたクリスタルの指輪が光を放ち、その光が簪の体を包む。そして、装甲を纏うと同時に浮遊する。

「やっぱり、打鉄と全然違うなあ……」

打鉄式式は打鉄の後継機であり、発展型。と言われているものの、外見としてはだいぶ違う。

スカートアーマーは機動性を重視した独立ウイングスカートに換装されている。

腕部装甲もよりスマートなラインへと変化していて、僕のブレイヴハーツのように格闘戦における運動性を活かす構造になっていた。肩部ユニットはシールドではなく大型ウイングスラストアーマーがひとつに、小型の補佐ジェットブースターが前後で二基搭載されている。その特徴的なシルエットは一夏の白式に似ていた。

見る限り、ほとんど打鉄と共通点がない式式だったが、頭に装着されたハイパーセンサーは同じデザインのものであった。

「それじゃ…行こう?」

「あ、うん」

僕は偏向重力カタパルトに両足をセットし、射出タイミングの譲渡を確認する。

「ガンダムサバーニャ、ロックオン・ストラトス。狙い撃つぜ!」

P Fに取り付けられた変声機によって三木眞一郎ボイスに変わった僕の声と同時にカタパルトが射出され、第六アリーナの空へと飛び出る。……なりきりって楽しい!!  
そして、プライベート・チャンネルで簪に話しかける。

「簪、先にタワーの頂上に行ってるぞ」

『う、うん』

簪の肯定の言葉を聞くと同時に、スラスターを最大出力で噴かせ、タワーの頂上を目指す。タワーの中間辺りで下を見ると簪が出てきた。簪が出てくる時に中間辺りまでくるとは……流石、サバーニャ。頂上に着くと、簪はタワーの四分の一ぐらいのところを飛んでいた。今のところ何も問題はない。  
そして、簪は頂上に着いた。

「は…早いね……」

「ん? まあな。一応、ガンダムだからよ」

「声と口調まで…忠実なんだ…」

「俺の好みだよ。見た感じ、打鉄式式のスピードはセシリアのブル  
ー・ティアーズと同じ位だな」

「一応……データ上は……」

「そうか、じゃ、次はマルチロックと武装のテストだ。降りるぞ」

「あ、うん……」

簪は返事をして、急降下を始める。段々速度を上げていくが、スピードを抑えながら後ろを飛ぶサバーニヤでも段々距離を縮める。最終的に僕は追いつき、隣を飛ぶ形になった。そして、地上に着いて、武装とマルチロックのテストを始める

その後、テストは上手く行き、何の問題も無く、稼働データが取れた。

そして、すべてのテストを終え、僕達は第六アリーナのピットで休んでいた。

「はぁ……終わったぁ」

「あ、ありがとう……付き合ってくれて……」

「いやいや、勝手に僕が手伝っただけだし。気にしないで」

「……何で私にそんなに構ってくれるの？」

「ん？困ってる人を助けるのは当然でしょ？それと、簪に誰かを頼るのは間違いなんかじゃないって気付いて欲しかったんだ」

「……正義のヒーローみたい」

「そんな大層なもんじゃないよ」

「それでも、私にとって……ヒーローだよ」

「……そう。じゃ、休憩も済んだし、帰ろっか？」

「うん……」

「あ、夕食どうする？」

「い、一緒に…食べたい…」

「ん。わかった。じゃ、着替えたら食堂前ね」

「わかった……」

簪と夕食を食べた後、部屋に戻るとベッドの上に誰かが居た。

「あ、お帰り」

「……すみません。部屋間違えました」

ボタンとドアを閉め、もう一度ドアの標識を確認する。そこには氷川の文字が。

「よし、もう一度入るぞ？誰も居なかった……というか、この部屋に入れるの教師位なんだからあり得ない……楯無さんが居るなんてあり得ない……」

ガチャリ。ドアを開けて再度ベッドを見ると、ベッドに寝転がり、スカートの中丸見えの状態で女性雑誌を読む楯無さんが居た。

「なんであなたがここにいますか!!」

窓の方に顔を向けながら叫ぶ。

「あれ？優人くん、どこ見て言ってるの？」

「楯無さん！あなたは生徒会長何ですから！風紀を乱すようなことはやめてください！」

僕は目を瞑りながら楯無さんの方を見て注意する。

「風紀を乱す……わかったわ。もう目を開けて大丈夫よ」

目を開けると、スカートを自ら捲り、スカートの中を見せている楯無さんがいた。僕は思わず後ろを向いた。

「あつはつはつ!!優人くんて意外におませさんなのね!!」

「じ、冗談はやめてください!!で!!なんで僕の部屋に居るんですか!?!」

「あ、簪ちゃんのことでお礼をと思って」

「お礼？僕、何もしてませんよ？」

僕は楯無さんの方を向くと、ベッドから降りて、真面目な顔付きの楯無さんが立っていた。

「一緒に『打鉄式』を、作ってくれたでしょ？だから、ありがとう」

「……本当は違うでしょう？」

「優人くんには嘘はダメね……。『打鉄式』のこともあるんだけど、本当は簪ちゃんの心を開いてくれたこと」

「簪の……心？」

「そう。あの子、最近ね、色んな子と話すようになったの」

「ストップ。何であなたが、簪のプライベート知ってるんですか？」

「え？そりゃ、生徒会長権限で防犯カメラを見てるからよ？」

「職権乱用過ぎるよ……！」

本当何やってんだ……この会長……！

「姉が妹を心配するのは当然でしょう？さて、話の続きだけど」

「スルーされた……！」

「もういいじゃない。それで簪ちゃんは今まで本音やあなたがいる

時以外ひとりだったのに、最近ではクラスの友達といるようになったし、笑うようにもなったの」

「それはいいことですねー」

「それもあなたが一緒に居てくれたからだと思うの。だから、ありがとう」

「簪のことを任せるって言ったのはあなたじゃないですか。それに、僕が変えたんじゃないくて、簪がひとりで変わったんですよ。ベタな返し方ですけど」

「……そうね。でも、あなたが簪ちゃんと居るようになってから簪ちゃんは笑うようになったわ。これはあなたが変えたとしか言いようがない事実なのよ」

「……そうなんですか。なら、素直にお礼を受け取っておきますよ」

「そう？じゃ、それだけだからバアーイ」

「もう僕の部屋に勝手に入ってこないで下さいよ」

玄関を開けて、部屋を出るよう催促する。

「許可があればいいのね？」

「え？……ま、まあ……」

「わかったわ」

そんな光景を見ている人物がひとり居た。その人物は曲がり角に隠れていた。

（な……なんで……お姉ちゃんと優人が……あんなに仲が良さそうなの……）

簪は手に持った出来たてのカップケーキを握る力が強くなっていた。

「それじゃ、これからも簪ちゃんのことよろしくね」

「はいはい」

「何か簪ちゃんの手伝えることがあったら言ってちょうだい。それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

（どうして……お姉ちゃんは私から何でも奪っていくの……）

「じゃあ、その嫉妬。利用させてもらおうかな？」

「え？あつ……」

簪は意識を失う。簪は意識を失う直前、着物姿の女性を見た。

「うふふ……あの子と戦ってもらっから……」

その着物を着た女性は静かに笑っていた。



そして、校外実習当日が訪れる。

## 第二十五話 それぞれの訓練（後書き）

はい！伏線張りましたー。で、ケルベロスショット改になってる説明は次話辺りで入れたいと思います。

後、コミケに行ってくるんで、次の更新は来年になります。そして、ご意見ご感想、お待ちしています。

それではみなさん、よいお年をー

## 第二十六話 いえーい、海だー（棒）（前書き）

お久しぶりです。

今日、やっとテストが終わってやっと執筆活動に移れました。

それでは続きをどうぞ。

## 第二十六話 いえーい、海だー（棒）

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる。

臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地よさそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「……………」

バスで隣の席になったのは一夏だ。ヒロインズと一時抗争になったが、やっぱり男子同士のほうがいいだろうということで渋々OKしてもらった。

「……優人、本なんか読んでないでお前も海を見ろよ」

「うるさい。今いいところなんだ」

因みに今僕が読んでいるのは『デート・ア・ライブ1 十香デッドエンド』だ。前世で友人に進められ読んでいた作品でこれがかなり面白い。あいつの選ぶラノベは外れが無かったなあ……。

「それ、面白いのか？」

「ん？ああ、人を選ぶけどな」

「へえ、じゃあ、今度貸してくれよ」

「いいぜ」

「ゆ、優人さん。何を読んでいらっしやいますの？」

通路を挟んで座るセシリアが質問してくる。

「これは、ライトノベルだよ。中高生をターゲットに作られた小説だから、漫画みたいな感覚で読めるようになってるんだ」

「そうなんですか？わたくしに合う本なのでしょうか？」

「うーん……これはアニメとか漫画が好きの人じゃないとちよっぴりきついかないかな？セシリアはなんか、小難しい小説読んでるイメージだし」

「そ、そんなことはありませんわ！ゴホン……では、今度わたくしにも貸していただけませんか？」

「ああ、いいよ。百聞は一見にしかず、だしね」

「そうですわね（やった！これで優人さんと話すきっかけになる！）」

……なんか、セシリアから欲望に塗れたオーラが見える。

「えへへ……」

後ろからは何とも間抜けな声が聞こえた。僕の後ろに座るのはシャルとラウラだ。先程の間抜けな声が誰のものか確認するために後ろ

を向く。僕が振り向くと一夏もつられて後ろを向いた。

「……………」

シャルは僕がショッピングに行った日にプレゼントしたシルバーのブレスレットを見ながらものすごい笑顔なっているので、間抜けな声の主はシャルだろう。ラウラは、何故か挙動不審だ。

「大丈夫か？昨日合流したときからずっとそんな感じだけど、どうした？」

「……………」

「おい、ラウラ。おい」

あまりにもラウラが反応しないものだから一夏は席から乗り出し、ラウラの顔を覗き込む。

「！？なっ……………なんだ！？ち、近い！馬鹿者！」

「ウボア」

一夏はラウラに鼻を思いつきり手のひらで押し返され、何処ぞの皇帝のような声を出す。一夏に顔を近づけられたのが恥ずかしかったのか、ラウラの頬はほんのり赤くなっていた。

「向こうに着いたら泳ごうぜ。箒、泳ぐの得意だったよな」

一夏はラウラに押し返され、席に着くと同時に通路を挟んで座るセシリアの隣に座る箒に話し掛ける。

「そ、そう、だな。ああ、昔はよく遠泳をしたものだな」

筈は随分落ち着かないな。何かあったのか？

「そろそろ目的地に着く。全員席に座れ」

千冬さんの言葉にみんな大人しく従う。それから数分、旅館前に着いた。四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しろ」

『よろしく願いします』

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

ここの旅館には毎年お世話になってるのか。……ん？

「ふふっ……」

あれ？今、旅館から誰かこっちを見てた？

「あら、こちらが噂の……？」

ふと、旅館を見ていた僕と目が合った女将が千冬さんに尋ねる。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子達じゃありませんか。しっかりしてそんな感じを受けますよ」

「片方はそうですが、もう片方は感じだけです。挨拶をしろ、馬鹿者」

一夏だけ無理矢理頭を下げさせられた。僕は礼儀正しくお辞儀する。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「氷川優人です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です。って、あなた……氷川って言うの？」

「え？はい、そうですが……」

「まさか、お父さんのお名前は勇利じゃないかしら？」

「はい。そうです」

「やっぱり！顔が少し似てると思ったのよ」

「……似てるか？僕と父さん。」

「勇利さんは私が働いたばかりの頃のご臈屋さんだったのよ」結婚してから来なくなっただけ、その息子さんに会えるなんてねえ」懐



かしいわ〜ポツ……」

何故頬を赤らめる。父さんも罪な男ってこと？

「父がお世話になったようですね」

「逆よ！私の方が色々と教えてもらっちゃってね、ペラペラ……」

女将のマシニングトークがヒートアップし始める。どうしてこうなった。

「ゴホン！清洲さん。そろそろ部屋に案内してもらえませんか？」

千冬さんが呆れて話を元に戻す。

「あら！ごめんなさい。それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらを御利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はいと返事をするすぐさま旅館の中へと向かう。とりあえず荷物を置いて、海に向かうつもりだろう。

初日は終日自由時間という大盤振る舞いをされているため、時間を無駄にしたくないのだろう。食事に関しては旅館の食堂にて各自とるようにならわれている。

「ね、ね、ねー。おりむ〜、ゆつき〜」

この呼び方とこの声は本音さんか。振り向くと、亀の如く（そこまで遅くない）異様に遅い移動速度でこっちに向かってきていた。眠

たそうにしている顔は、たぶん素なんだと思う。もしかしたらテニ  
ヌと呼ばれた漫画に出てきた人みたいに覚醒するとあの目をシャキ  
ツとさせるのだろうか？

「ふたりの部屋ってどこ？一覧に書いてなかったー。遊びに行く  
から教えて」

その言葉で周りの女子が聞き耳を立てるのが分かった。しかし、み  
んな命知らずだな。

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

「そんなわけないでしょ、馬鹿。一夏自分の部屋聞いてないの？」

「おう。優人は聞いているのか？」

「うん。僕らは教員室だってさ。だから、織斑先生と山田先生と同  
じ部屋ってわけ」

聞き耳を立てていた女子全員が固まるのが一瞬でわかった。残念だ  
ねー、一夏との夜遊びが出来なくて。

「そういうことだ。織斑、氷川、ついてこい。お前らの部屋に案内  
する」

「へいへーい」「はい」

「氷川。ちゃんと返事をしろ」

鬼もびつくりの目で僕を睨む千冬さん。僕は黙って千冬さんの言う

ことを聞く。

「はい」

それから本音さんと別れ、千冬さんの案内で教員室に着く。流石に四人も寝るだけあってかなり広い部屋だ。僕は荷物を置いて、窓の外を見る。

窓の外にはきれいな青い海が見えた。そして、下を見ると、森の中で僕を呼ぶかのように手招きをする女の子が居た。

「一夏、先に着替えて海に行つて。僕、用事が出来た」

「え、あ、ちょ、おい！優人！」

僕は靴を履いて旅館を出て、森の中へ入っていく。先程、女の子の居た位置まで行くと、誰も居なかった。

「はあ……はあ……あの子は……？」

「ここだよ」

声が聞こえた方を見ると、木の影から着物の女の子が出てきた。

「君は……誰だ？何故僕を呼ぶ？」

「誰って……もう私を忘れたの？」

「え？……もしかして、神様！？」

「そ、だいせーかい」

「でも、唯ちゃんの顔や格好じゃ無くないですか？」

「当たり前だよ。この前のは私の仮の姿。今の私が本当の姿ってわけ」

「ふうん……で？この前、神様はさ、もう会えないって言っていませんでした？」

「神様の力は侮ってはいけないのです！」

「そうですか……。それで？僕に何のようですか？」

「もう、そんなに焦らなくてもいいじゃない。私はね、更識簪の居場所を知っているの」

「！？……ああ、神様だからなんでもありってわけか」

実は簪は『打鉄式』の稼働テストの日から行方不明なのだ。監視カメラにも映っていなかったから、楯無さんがかなり心配していた。

「そういうこと。それで、更識簪を攫ったのは私です！」

「……はっ？」

「だから、簪さんを攫ったのは私です！」

……突然何を言い出すかと思えば……。

「つてええええ！？なんで！？どうしてさー！」

「だってえ…君あまりにも面白くない行動ばかりなんだもん」

「あんたねえ……」

「まっ、でもすぐに会えるから。楽しみにしてて」

そう言うのと神様は霧の様に消えていった。

「あっ！おい！！」

「あ、そうそう。ちょちよいとクアンタとサバーニヤ借りてくよ」

脳量子波で声をかけてくる神様。そして、PFを入れてあるPETホルダーが光り、クアンタとサバーニヤのチップが消える。

「って、なんでだよ！！」

「明日の夜には返すから」

「……くっ！もう心配がしない！……諦めて海に行くか」

ちくしょう……。楯無さんになんて言えはいんだよ……。

「……………」

現在、僕は水着、その他諸々の荷物を取ってきて、本館と別館を繋ぐ通路にある庭に生えているうさぎの耳のようなものを睨んでいる。

ウサミミの近くには『引つ張って!』などという看板があるが、引つ張らないほうがよさそうな気がしたのでそのままスルーしようとする。が、離れようとすると足が何かに掴まれ、動けなくなる。

「……そんなに出たいなら自分で出ればいいじゃないですか」

僕はそう言うが、相手は出てこようとしない。僕は諦めてウサミミを引つ張ると、土からウサミミだけ取れる。

何も起きないのかと思いきや、空から何かが落ちてくる音がする。上を見ると、大きな人参が降ってきた。そして、それは庭の地面に突き刺さる。そして、桃太郎の桃の如く、綺麗に真つ二つに割れる人参。

「おおおお! ゆ〜く〜ん〜!! やつと反応してくれたよお〜!!」

真つ二つに割れた人参から出てきたのは東さんだった。東さんは出てくるや否や、めちゃくちゃ涙目で僕に抱きついてくる。

「ど、どうしたんですか?」

「あのね! みんな私をスルーして行くだよ!? 篝ちゃんもいっくんもちーちゃんも!」

「ああ、それで僕がやつと反応してくれたから感動していると」

「そうだよ〜!! やっぱ、私の居場所はゆーくんの胸の中だけだよ!」

「ハハハ……。それで、ここにはどんな用で?」

「あ、篝ちゃんに誕生日プレゼントを渡しにきたんだよ！でも、明日だから今日はちょっと仕……ゲフンゲフン！！何でもないよ！」

「あ、そついや、明日は篝の誕生日か（今、何か誤魔化そうとしたな）」

「というわけで、ゆうくん！また明日！！」

「はいはい」

苦笑しながら返事をする、目にも止まらぬ速さで廊下を走り去る束さん。

僕はその影が見えなくなると、急いで別館へ向かった。

別館で着替え、海に向かうとみんながビーチバレーをやっていた。

山田先生や千冬さんも参加していてとても珍しい光景だった。

僕は砂浜には行かず、階段のあたりでその光景を眺める。

（みんな、楽しそうだな……。簪……）

今見ている光景に混ざっていたかもしれない女の子のことを考える。

（すぐに会える……。どういうことだ？……。あ、原作知識が抜けたこと、神様に聞くの忘れた）

僕が階段あたりでビーチバレーを眺めながら考え事をしていると、本音さんが僕に気づく。

「あゝゆっきーだ。おい」

「え？氷川くん？……。本当だ！おい！こっちで一緒にやろうよ」

！  
」

本音さんが僕に気づいたことを言うと、鷹月さんが僕に呼びかける。他のみんなも僕を呼びはじめた。

「今行くよ！」

とりあえず、今は考えない方がよさそうだな。

階段を降りてみんなのところへ向かおうとすると、パラソルで作った影の下にビニールシートを敷いたセシリアに呼び止められた。

「優人さん！お待ちになって！」

「へ？どうかした、セシリア？」

「どうかした？じゃありませんわ！昨日のお約束をお忘れになっ  
て？」

昨日……？ああ、サンオイルを塗るとかいうやつか。

「ああ、ごめん。もしかして、今の今まで待ってたの？」

「そうですわ！またとないチャンスを……ゲフン！なんでもありませんわ！さあ、優人さん、サンオイルを塗って下さい……」

そう言ってビニールシートの上に寝転ぶセシリア。そして、水着の紐を解く。

正に僕は今！思春期の男の子なら絶対望むであろうシチュエーションに遭遇している！……だが、不思議と性欲が湧かない……。やっぱり神様の言う通り、枯れてるのか……？いや、でもシャルと風呂



入った時は欲情しかけたんだ……多分枯れてないよ……。

僕はセシリアからサンオイルを受け取る。サンオイルを手にとって揉むようにして温める。

そしてセシリアの体に慣れた手つきで塗っていく。

(……あれ？なんで僕こんなに手際いいんだ？)

自分の手つきに疑問を抱きつつ塗っていく。

「んっ……。慣れていきますわね……。何処かで経験が？」

あ、思い出した。

「うん。母さんと海に行くとき毎回塗ってあげてたからさ。その時に手取り足取り教えてもらったんだよ」

「そうなんですの……。気持ちいいですわ……」

僕の塗り方は軽いマッサージを兼ねているため気持ちいいのだろう。そして、背中、腕を塗り終える。

「はい、終了。後は自分で」

「え？足などは……？」

「流石にまずいでしょ？周りの人達と絵的に」

「えっ？あ……」

僕がセシリアにサンオイルを塗っている間、ギャラリーが集まって

いたのだ。つまり……

「氷川くん！私にも塗って！！」

「私サンオイル持つてくる！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「私サンオイル落としてくる！」

「いや、落とすなよ！？」

思わずツツコミを入れてしまう。

「おい、お前ら、面倒な事をするな」

ギャラリィの中から織斑先生が出てきて、暴走しかけている生徒達を止める。

「お、織斑先生……ありがとう……ござ……います？」

「？ 何故疑問系なんだ？」

（ち、千冬さんの水着……黒くて、大きな胸を強調しているっ！なんて大胆な水着なんだ！しかもそれだけでも色っばいのに、いつもと違って髪を下ろしてより色っばさを増している！とても大人っばい！僕にとってどストライクー！）

「……優人、鼻の下伸びてる」

「……生きててよかった。ってえ！シャル！？……う、うおおおおー……」

僕は恥ずかしさのあまり、海に向かって走り出す。  
今の気分は正に思春期の男の子だ！  
俺は枯れてねえ！！ひゃっほい！！

優人がいきなり海に向かって走り出すと千冬姉は呆れたようにため息を吐く。

「……ふう。あいつは放っておいて、お前たち。サンオイルを塗ったばかりのオルコットには悪いが、そろそろ食堂に行って昼食でもとってこい」

「先生は？」

「私は残り僅かな自由時間を満喫させてもらおうでしょう」

やはり教師にはあまり時間がないのだろう。なら、俺たちは邪魔にならないようさっさと退散するか。

「じゃあ、俺たちは昼食に行ってきます」

「集合時間に遅れるなよ」

「はい。あ、優人は？」

「あのバカは戻ってきたら私から伝えておくからさっさと行け」

「わかりました」

現在、12時を過ぎた頃なので、生徒全員がそろそろと移動していた。

「織斑先生の水着見た？すっごいきれー。かつこいいー！」

「あー、私もあんな風になりたいなあ」

「いや、あんたは無理でしょ」

「や、やってみないとわからないわよ！」

みんなはそんな感じで盛り上がっている。俺は身内が褒められているのが少しくすぐったくて、喜んでいいのかよくわからなかった。

（それにしても、似合ってたなあ）

正直、かつこいい。本物のモデルみたいーいや、モデル以上だった。

「……一夏のシスコン」

「ん？なんか言ったか？鈴」

「別に？なぐんにも言ってるまっせーん」

「はあ……」

俺の隣を歩くシャルロットがため息をこぼす。

「どうかしたのか？シャルロット」

「あ、一夏……。優人って織斑先生みたいのがタイプなのかな……」

「？」

「どうしてそう思うんだ？」

「だって、織斑先生の水着見た反応と僕の水着見た時と反応がちがうんだもん……」

「あー……あいつ、昔からそうだから」

「え！？優人は昔から織斑先生が好きなの！？」

「い、いや、そうじゃなくて、あいつ。年上好きなんだよ。昔自分でそう言ってたから」

「そう……なんだ……ライバル多いなあ……ううん！でも僕は諦めないよ！」

何を諦めないというのか？

「まあ、何かはわからんが、シャルロット。俺はお前を応援してるぞ！」

「うん！ありがとうー夏！」

その満面の笑みに俺は少し照れてしまう。と、同時にふたつの視線を後ろから感じる。

振り向くと鈴とラウラが睨んでいた。

「……一夏？」

鈴から黒いオーラが見える…！

「私というものがありながら……お前は私の嫁なのだ！私だけを見ていろ！」

「だから嫁じゃない！」

食堂入口付近で俺と鈴の声がこだました。

第二十六話 いえーい、海だー（棒）（後書き）

ロックマンXの方ももうすぐ出来上がります。もうしばらくお待ちを。

感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4314w/>

---

第二の人生はISの世界で！？

2012年1月14日15時45分発行